
男の娘な女神様

トマト畑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男の娘な女神様

【Nコード】

N2592W

【作者名】

トマト畑

【あらすじ】

ノリで倒した相手は女神だった!?

俺が代わりに女神になるのかよー!!

何はともあれ女神様生活スタート。

俺は男だー!!

はいはい、男の娘ですね。

現在第二部スパッツネプテューヌ編をお送りしています。
そして再執筆中。

ではではゆっくりどうぞ。

女神シルバーハート（前書き）

改訂版

まあ、駄文です。

女神シルバーハート

俺はなんとなく旅をしている旅人。たまに人を助けたりしながら旅をしている。不思議な力を手に入れたりした。その内なぜかヴアルキュリアとか戦乙女等と言われたりもした。それは女性に付けてあげてほしい。今は四英雄とか言われていた人達と一緒に天界とか言うところに来ているところ。よく分からないが「貴女をお送りします。」と言われて連れて来られてしまった。そう、それが間違いの始まりだった。

俺は天界に取り残された。四英雄の人達は俺を置いて何故か直ぐに帰ってしまった。「女神様ごたつしやで。」「また会える日まで！」「とかよくわからない事を言っていた。女神様つてだれ？

それから宛もなく天界をさまよった。途方もない年月を。そのせいか謎の変身能力までてにいられてしまった。特撮ものが好きな自分としては凄いい嬉しかった。露出が多いのは気になったが。

長い年月を過ごして気づいたが何故か歳をとらない。眠たくならない。お腹もすかない。けどご飯はしょっちゅう食べていた。

とある日いつもの様にモンスターを倒したりして過ごしていると不思議な場所にでた。何やら神秘的な場所に、何故だかそこが自分の為の場所と思っていた。そしてその中心には一人の魔女もどきと謎の小人サイズのミニマム少女が本に座って空中に漂っていた。何やら言い争っているようだ。

「マジエコン又貴女はいつたい何をしようとしているんですか！？」

今のままでは下界の住民達が……………」

「決まっているこの世界の全てを手に入れる。そして世界の全てに私が味わった苦しみを味合わせてくれる!!」

「そんな事が出来る訳ありません!!」

「出来るさ。イストワール貴様の力をつかえばな!!」

「貴女まさか!?!」

どうやら一触即発の空気というやつらしい。マジエコン……………めんどくさいから魔女もどきでいいか、やつの手がミニマム少女に魔の手が伸びようとしていた。

「あのミニマム少女を助けますか。まともに話が聞けそうだしね。あの魔女もどきはさっさと倒すしますか。」

「さてと行きますか!?!」

俺は腰にさしていた双剣零刹那と菊雫紋字を引き抜き魔女もどきとミニマム少女の間に転移する。

「そこまでだ魔女もどき。俺が相手だ。」

彼女達二人からしたら突如として現れた様に見えるのだろう。転移非常に便利。

「貴方は？」

啞然としているミニマム少女。

「俺か俺は……………」

ミニマム少女の疑問に答えようとするが魔女もどきが簾らしきものから光弾を放つ。俺は即座に光弾を菊薔紋字の腹で受け止める。

「目障りだ消えろ！！」

「さてどうだろうか？」

続けて放たれる光弾を菊薔紋字と零刹那で切り裂く。

「危険です！！逃げて下さい。」

ミニマム少女たしかイストワールだっけ？

「大丈夫、大丈夫。俺は強いから。まあ、安心して見ててミニマム少女。」

「み、ミニマム！？む、無理です。彼女は女神です。彼女には誰も勝てません。」

俺はミニマム少女イストワールの頭をひとなでして魔女もどきの前に立つ。

「まあ見てて。変身!!」

その言葉と共に俺の姿が変化する。髪は白から銀色に。瞳は金色に。そして身体に銀色の装甲プロセスサユニットが装着される。

『SETUP』

そして降臨する銀色。

「貴様はなんだ!!」

「貴方はいったい？まさかその姿は伝承の……………」

二人の問いに俺は答える。

「シルバーハート。それがこの姿での名前。詳しくは俺も分からない。だがかなり強いよ。」

「見かけ倒しが消え去るがいい!!」

「消え去るのはそっちじゃないか。」

「くっ、なめるなあ!!」

魔女もどきがまた光弾を放つ。数は先ほどに比べると数が圧倒的に多い。そして光弾が放たれる。

「またたくさんあるなあ。だけど……………」

光弾が放たれる。そしてそれは俺に向かう。本来なら直撃していったかんのおわりだろう。

「だが甘い！！光波よ敵を穿て。」

俺は両手に持っている黒から銀色に変わった双剣に光を集める。そして向かってくる光弾に向かってそれを放つ。その瞬間全ての音が消えた。

「外したか。」

「な、なんだと!?!」

魔女もどきの驚きの声も分かるかな。だって自分の真横の物が消し飛んでいるのだからね。

「これが伝承の女神の力!?!」

ミニマム少女が驚きの声をあげる。何やら女神とか言っていたが……………。俺の事じゃないよね。まあ、いいやそろそろ飽きてきた事だしね。

「くつ、なるほど、大した力を持っているようだな。だが私を本気にさせてしまった貴様はこれでおわりだ。」

魔女もどきが先ほどよりも質量の大きい光弾を作り出す。

「さあ、消え去るが「絶対領域発動。」何？ぐうおー！！」

魔女もどきが光弾を放つ寸前に俺の能力のひとつ『絶対領域』を発動する。光弾が消えて魔女もどきが地に伏せる。

「ば、馬鹿ないったい何をした！？力が使えないだ！？」

魔女もどきが声をあげる。

「いちいちそんなに驚かなくても良いのにね。」

驚きで顔を（。ー。）なイストワールに話しかけて見る。

「いったい何を！？」

「俺の能力のひとつの絶対領域を発動させたんだよ。絶対領域の前ではどのようなスキル、能力、奇跡さえも操ることができる。」

「す、凄い……。や、やっぱり貴女が私の女神さま……。」「

今度は顔が赤くなっている。まるで恋する乙女のように。

「くっ、ぐうー！！」

魔女もどきが声をいやうめき声をあげる。『ぐうー！！』ってこれが噂のぐうの音か。

「まあいいや、これでおわりにしよう。」

俺は菊吉紋字と零刹那をひとつに組み合わせる。そして構える。

「こいつの威力はどうかなくぞインフィニット・ソード。」

目にも止まらない早さで魔女もどきを斬り裂く。

「俺の前に立つのならただ斬り伏せるのみ!!」

オーバーキルもはや魔女もどきはお前はもはや死にすぎている状態である。

「ステキです。うつとり。(´Д、´)」

ミニマム少女はいや、イストワールだっけ?なんだかうつとりしている。

「これで終わり。」

最後の仕上げに一回指を鳴らす。パチン。それと共に魔女もどきが爆発する!!

「ぐ、ぐわあああああああああー!!」

「悪・即・爆発ー!!!」

これは俺のボスキャラ倒した時の決めセリフ。それは言いとして目の前でうつとりしているイストワールに話しかける。

「ちょっといいイストワールさん?」

「はい、何でしょうか女神様?」

「め、女神様?」

何やら嫌な予感……………。

「はい今日から貴女は女神様です。」

今日から魔王ならぬ今日から女神様。何かまた面倒事に巻き込まれたのか俺は。

女神シルバーハート（後書き）

あまり変わらないかな？

伝承の女神と勉強（前書き）

改訂版

伝承の女神と勉強

とりあえず俺は今人生の岐路に立たされているのだろう。ノリであんな魔女もどき倒すんじゃないかったよ。

「貴方は今日から女神様です。」

目の前の少女イストワールが恋する乙女のような顔で話しかけてくる。

「なんで？」

「貴方によって先代の女神マジエコンの野望は阻止されそのマジエコンヌ本人も貴方によって倒されましたし。故に貴方が次の女神様です。よくわかりませんが貴方には信仰シエアが寄せられてますから問題ありません。それにあの伝承の女神様ともなれば下界の住民達からの信仰もうなぎ登りですよ。」

「信仰ねえ。けど俺は女神が何をするのか知らないし。」

「大丈夫です。女神の何たるかは私がおしえますから。(^ _ ^)」

いやいやそれ以前に俺は。

「だいたい俺は男だよ。」

固まるイストワール。

「はい？め、女神様いくら何でもそんなことはないでしょう(_)」
「(_)!!!。」 □

「いや、本当だから。」

「そこまでして女神になりたくないんですか？だいたい女神様みたいなかわいい娘が男なわけありません。
もし本当だというのなら証拠をみせて下さい。」

「証拠か……………」

「ほらないんじゃないですか。」

「いや、ちょっと待って。どうすれば？」

「じれったいですね。えいつ!？」

突如人のズボンを思いっきりずらすイストワール。

「わあああ!？」

まじまじとある物を見てくる。

「本当に男、いえ男の娘だったんですね。 (^ | ^)」

「早くズボン返して!？」

「俺が男だってわかっただろう?。」

「はい。まがいもない男の娘でした。」

「なら俺は女神にはなれない。わかつただろう?。」

「よろしく願いします女神様。」

「人の話し聞いてた?。」

「ではまずは女神のすべきことしなくてはならないことについて話していきましょう。」

「お願いだから人の話を聞いて。」

少女?説明中。

「わかりましたか(^ | ^)。」

「まあ、なんとか。」

「今はそれで良いです。今から学んでいけばいいのですから。」

「そんなもんか。」

「そんなもんです。」

「がんばりましょう。(^ . ^)」

「ああ、がんばってみるか。………いつの間にやら女神する事になっっていたよ。」

「しつかり今の言葉録音しましたよ（ノ。〇。ノ）」

「抜け目ないな。」

「逃がしませんよ（＜―＞）」

「まあいいか。」

少しは楽しめるかもしれないしな。それに何となくしてみるのもいいのかもしれないと思っっている自分もいたからね。

只今イストワールとの勉強中既にかなりの時間がたっている。

「ねえ、もう九時間は経ったんだけど。いつまで勉強するの？」

「そうですねえ、後八時間くらいはかかりますよ。」

「はい！？ちよつと、長すぎない。」

「がんばりましょう（＾―＾）大丈夫ですよ。私の女神様ならこれぐらい楽勝ですよ。何たって伝承の女神様なんですから。」

「わ、私のつて俺は君と出会ってまだ浅いとおもうんだけど。」

「そんなことはないですよ。私と貴女は運命の赤い針がねでつながっているんですから。」

「針がねって……。ところで気になってたんだけどその伝承の女神ってなに？」

その質問を待ってましたとばかりにこんな（、旦々）をするイスト

ワール。

「この天界には伝承があるんです。ゲームギョウ界が暗雲に覆われた時何処からともなく銀色の女神が現れあつと言う間に救ってしまふというものです。」

「なんと言うか随分軽い伝承だね。」

「そんなことはないですよ。今の私は最高の伝承ですから。では長くなりましたが勉強の続きをしましょう私の女神様。」

女神になるの少し後悔してきていたけどこのイストワールの笑顔を見るとなんだかがんばれそうな気がしてきたよ。

「あと7時間かかりますよ。」

「……………」

頑張ろう。

伝承の女神と勉強（後書き）

余り変わってません。

ふらぐ？（前書き）

ちなみにまだネプテューヌ達は生まれてません。

ふらぐ？

とある一日のひとこま。

「おや、何をしようとしているんですか？」

「ああ、イストワールか。ちょっと暇つぶしに新たにプロセッサユニットを開発しようと思ってね。」

「プロセッサユニットというとあなたが女神化した時に纏っている鎧のことですね。」

「うん。そのとおり。」

「今のままでは駄目なんですか？」

「駄目な事はないけど戦いかたが限られてくるんだよ。」

「そうなんですか。」

「今のプロセッサの絶対領域なら負けはないだろうけど、いざというときはほかの戦いかたもあった方が良くからね。」

「絶対領域？（。！。）」

「魔女もどきの時のあれ。」

「マジエコンヌの女神の力が使えないようにしたのですか？」

「そうそう。絶対領域。その中ではどのようなスキルも魔法も奇跡も操ることが出来る。」

「やっぱり貴方は異常ですね。」

「はいはい。設計図はこんな感じでっ」と

「私にもみせて下さい。」

「はい、どうぞ。」

「……………これは何ですか？」

「それはプロセッサの名前だよ。」

「名前？」

「そう。それぞれネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールって言うんだ。」

後々この四つのプロセスがユニットがあんな事になるとは。

ふらぐ？（後書き）

フラグなのか？

四人の妹さん（前書き）

あの四人登場します。

四人の妹さん

イストワールとの出会いからかなりの年月が経ち今では女神の仕事が少しは板についてきたはず。

なんだかんだで今は休憩中暇つぶしに新しく作ったプロセッサユニットをみながら少しニヤニヤしていたところでもあったりする。

「遂に完成ましたね。全部で四つですか。黒に紫、白、緑。全部貴方の好きな色ですねユウ。」

ちなみにユウと言うの俺の通常時の名前。

「まあね。けどこれで戦闘の幅が更に広がるはずだ。」

「今のままでも充分強いと思います。」

「そうかな？」

「そうですよ。」

暫くたわいもない話をした。

「ちょっと喉が渴いたかな。イストワールお茶淹れるね。」

「でしたら私はお茶菓子を準備しますね。」

「ありがとう、イストワール。」

「気にしないで下さい。愛しの貴方の為なら構いませんよ。」

そう言ってお茶菓子を取りに行くイストワール。

その姿を見送りつつ今までの事を振り返る。

お腹は空かなくてもご飯は美味しいとか。夜は暗くならないけど眠るようにしていたりもする。きづくとイストワールがベッドに潜り込んで来ているときもあった。お風呂がなかったため自分で作ったりもした。何故かイストワールがニコニコしながら覗いていたりもした。理由を聞くと愛ゆえの行動だとの事だそうだ。そんなことを考えていると四つのプロセッサユニットの様子がおかしいことに気付く。

「発光している？」

プロセッサユニットが光に包まれている。その光は更に輝きを増して行く。

「これはいったい？」

「くっ！？眩しい。」

暫くすると光は止む。すると四つのプロセッサユニットがあったところ、そこに四人の少女がいた。

その内の一人の紫色の女の子が近づいてきた。

「お」

「お？」

「お姉様！」

「お姉様！？」

突如として抱きついてくる。そして更には押し倒される。

「ああ、お姉様！お姉様！」

「ちょっと何処触ってんの！？」

「お姉様良い匂い。ハアハアハア。」

何やら紫色の少女が危ない行動をしていると……………。

茶髪の白い服の少女が何処からともなくハンマーを取り出して紫色の少女ネプテューヌと言うらしい。あれ？その名前は……………。

「お姉様から離れるネプテューヌ！！」

「うわぁー！？」

間一髪でネプテューヌがそれを避けると白い服の少女に文句を言う。

「むう。いきなり何するのブラン危ないよー!!」

それを無視してブランは俺に上目遣いで心配そうに聞いてくる。

「お姉様大丈夫？ネプテューヌに何か変な事されなかった？」

今度はネプテューヌを睨み付けて。

「お姉様にベタベタしやがって嫌がってるだろうが!!」

何か俺とネプテューヌで態度が違う？

「何言ってるの？どう見たって仲の良い姉妹のスキンシップだったじゃん。」

「どう見てもめえが無理矢理押し倒してただろが!!」

「あーあー。聞こえない。」

「てめえいい加減にしやがれ!!」

ネプテューヌも剣を取り出してブランと戦い始めてしまった。

「お姉様危ないですわ。」

今度は金髪の緑色の服の少女が俺の手を引いてネプテューヌ達から遠ざける。

「お姉様こちらにあの二人は放って置いてお茶でもしませんか。」

「ああ！？ベールが抜け駆けしようとしてる！！。」

それをネプテューヌが見つける。

「あら、抜け駆けなんて失礼ですね。私はただお姉様とお茶しようとしていただけですね。」

「そういうのを抜け駆けって言うんだよ！！。」

「文句があるならかかって来なさい！」

ベールまでもが槍を構えて戦闘に参加していった。みんな好戦的なあ。

くいくいつと俺の服の袖を引っ張ってくる黒い服装の少女。あの三人の名前がそれぞれネプテューヌ、ベール、ブランということは彼女の名前は……………。

「ノワール？」

「はい。どうかしたお姉様？」

「君はいや君達はもしかして……………」

「待ってお姉様、言いたいことも分かるけど今はお茶を飲まない？
せつかくの淹れたてが冷めてしまうわ。」

俺が淹れていたお茶を指さしノワールが言う。

「そうだな。お茶は淹れたてが一番だしね。」

俺は今出来る最大の笑顔をノワールにむける。

「っ！？／／／／」

赤くなるノワール。

「三人も一緒にお茶飲まない？」

一応争っていた三人にも聞いてみる。

「「「喜んで!!」」」

よほど喉が渴いていたのだろうか？

現在五人でお茶を飲んでいる。

俺の右隣にはベールが左隣にはネプテューヌがブランは俺の膝の上に座っている。そして向かい側の席にはノワールが座っている。

「率直に聞くけど君達はやはり俺が作ったプロセスサユニットなのか？」

俺の問いにノワールがこたえる。

「そのとおりよ。私たちはお姉様が作り出したプロセスサユニットが基になって擬人化したものなの。」

「基？」

更にブラン付け足す。

「……………そうあくまでもプロセスサユニットは基。……………それにお姉様の優しさ、思いが。そして願いが私たちを生み出した。」

「俺の……………」

「難しい事はわかりませんがお姉様は自分の力を過小評価し過ぎですわ。今のお姉様はそれこそ願えば何でも叶う位の力はあるのですよ。」

「過小評価ねえ。」

ベールの言葉通りだろうか？

「あーもう！！そんな難しい事どうでもいいの、私はお姉様とイチヤイチヤできれば」

飛び付いてくるネプテューヌ。

「あらあらネプテューヌだけずるいですわ。」

更に反対側から抱きついてくるベール。

「っ」

すでに膝に座っていたブランは真正面からそのまま抱きついてくる。

「べ、別にイチャイチャなんてしたくないんだからね！」

そっぽを向くノワール。

「……………うう。やっぱり私もイチャイチャする〜。」

ノワール陥落。後ろから抱きついてくる。

四人にもみくちゃにされる俺そんな時。

ドサッ。

紙袋が落ちたような音がした。その方向を見るとイストワールがいた。
ただしこんな顔で。

(。ー。)

無表情でじっとこっちを見ている。その無言の威圧に抱きついていた四人も固まる。

「飽きたんですか？」

「えっ……………」

「私にはもう飽きたんですか？私はもう過去の女なんですね！！」

「いやいやちょっとまってイストワール。」

「若い女の子が良いんですね。私はもうパートナーじゃないんですね。ぐすっ、うっつ。信じてたのに。うわぁーん！！（TOT）」

泣き出したイストワール。この誤解を解くのにかなりの時間が必要だったのは言うまでもないだろう。

四人の妹さん（後書き）

主人公女の子と勘違いされたまま終わってしまった。

驚愕の事実（前書き）

ユウがやっと自分の性別を話して酷い目に会います。

ひとつ主人公の性別は男でも男の子でもなく男の娘です。

二つキャラ崩壊いえ決壊は当たり前。

三つ駄文です。

驚愕の事実

「しかしながら擬人化とは我ながら驚きだ。」

あの後イストワールに何とか事情を説明して事なきを得た。まあ、そんなところ。

「アナタならもう何をして私に驚きませんよ。（＾―＾）」

何気に酷いぞイストワール。

今はイストワールを合わせた六人でお茶をしていた。

お茶菓子はイストワールが持って来たシュークリーム。それはいい。シュークリームは好きだしだが……………

「何この俺のシュークリームはペタンコ！」

そう俺のシュークリームだけペタンコ。イストワールが紙袋を落とした時に潰れた物みたいだ。

「自業自得です。（。―。）」

頬をハムスターの様に膨らませプイツとそっぽを向くイストワール。

可愛いじゃない。

ちなみにイストワールは俺の服の中に入って襟元から（。ー。）を出している。

「お姉様これ美味しいね。」

「ネプテューヌ美味しいのは良いがクリームが付いてるぞ。」

頬に付いていたクリームを指ですくいとるとすぐに口に運ぶ。

「うん、甘い。」

何故かその瞬間みんなの動きが止まった。そして口にクリームをつけた。

（。ー。）×四

何この期待した様な視線。

まあ、そんなことよりも……………。

「俺の願いが叶うと言うならばこのシュークリームを本来の姿に、できればもう少し大きくなれ。クリームたっぷりで！」

シュークリーム変化なし。

「何も起きないだろ!？」

何かむなしいな。

「可愛らしいですわお姉様。よろしければ私のを半分どうぞ。」

「……………私のもあげる。」

「ありがとうブラン、ベール。」

二人からシュークリームを受けるとそれを食べる。

「もきゅもきゅ。ごっくん。」

何故か全員が微笑ましい物を見る様な目で見てくる。

「美味しかった。……………やっぱりこの潰れたのも食べようかな。」

「お姉様私のも食べてもいいわよ。」

ノワールが顔を赤くしてそっぽを向きながらシュークリームを乗せて皿を出してくる。

可愛いじゃない。

思わず抱き締めてしまった俺は悪くないはずだ。

「お姉様だ、駄目よ。いくら女どうしだからって、私の理性が決壊するわ。っていうか決壊しても良いかも。むしろOK?」

顔がトマトよノワールさん。後目が怖いぞ。

「……………」

「あらあら。」

「私も抱き付くー!!」

再び全員が抱き合う形となる。何か良いねこっいの。
だがイストワールが……………。

「む、むぎゅー！？（＜ε＞）」

「イストワールが俺のシュークリームの様にぺたんこ！？みんな離れて離れてー！！更にはイストワールが食べていたシュークリームが潰れて服の中がベタベタにー！！」

「私は貴方の胸の中で死ねるなら私はほんもうでした。（―・―）」

漫画の様にぺたんこになっていたイストワールを引っ張り出して丸めたり引き延ばしたりしてなんとかしました。

「恐い事言わないでよ。それにしても中がベタベタだよ。」

服のボタンを外し胸をはだける。

「…………ぐわあ！？…………」

四人が意味不明な声をあげる。だが今はこのクリームをどうにかしないと。

「舐めちゃえ、ぺろっ。甘い。」

指で少しすくって舐めてみる。

「「「「「ぶぎゃー!」「「「「「

こいつらは人が困っている時になんなんだ。

「これは誘っているのかしら。」

鼻を押さえて上を向いているノワール。

「……………落ち着け私、私はクールで無口系美少女ロリキャラ。ここで感情的になれば絶対後悔する。」

テーブルに顔を伏せて何やらブツブツ言い出したブラン。

「お姉様の白い肌に付いた白いクリームを私は舌で舐めとる。最初嫌がるお姉様、だけど段々とその快楽に耐えきれなくなりそして最後には私に全てを委ねてしまう。」

何やら危ない事を言い始めたベール。自分で言って自分で興奮しないでくださいねー。

「お姉様わたしが舐めてあげようか？」

お前がある意味一番純粹だなネプテューヌ。

「いけませんよユウ。年ごろの男の娘が胸を露出したら。してもいいのは私と二人きりの時だけですよ。」

「ああ、ごめん。。年ごろの女の子の前でこれははしたなかったね。一応俺も男だしね。……………あれ何で皆固まっているの？」

「あ、あのお姉様私の聞き間違いかもしれませんがいまのお二人のお話を聞く限りお姉様は男性なのですか？」

ベールがおそるおそる聞いてくる。

「うん。だからね最初からそう言ってたでしょう？」

「いえいえ聞いていませんわ。」

「あれ、そうだったっけ？」

「」「」「」「」「」

全員が一斉に頷く。そういえばお姉様を訂正するのを忘れていた。

「まあ、言ってなかったのは悪かったけどこれからはお姉様ではなくお兄様でよろしくお願いします。」

「あ、ありえないわ！！こんなに可愛い娘が女の子じゃないなんて証拠は証拠！！」

「イヤイヤ、どうみても男だろうノワール。胸もないし。」

更に服をはだけさせ胸をみせる。

「ぐふぉ！わ、わからないわ、もしかしたら胸がぺたんこなだけかもしれないし。」

「ええ。ブランはどうっ？」

「私はどっちでもいい。お姉様はお姉様だから。」

「ネプテューヌは？」

「私はちょっと驚いたけどありだと思う。いやむしろOK!」

「ベールは？」

「絵的にはありですね。」

絵的？

「なら証拠を見せれば良いじゃないですか。えい、えいっ!!」

「なっ、イストワールやめろまた脱がせるきかやーめーろー!!」

イストワールのズボンずらしから逃げる俺。

「良いじゃないですか。へる物ではないですし。」

「いろいろ減るんだよ。」

そんな感じを繰り返してはや三十分。

「あーもうじれったい!!」

ノワールが待ちくたびれたのかいきなり立ち上がる。

「おりゃ!! (ノ<Д>ノ)」

スポンを引きちぎった。無論どうなるかは言うまでもないだろう？

「ま、まさかほんとにお姉様はお兄様!？」

ノワール自分でやっといて何を言う。

「……………よし。」

「ブラン、なにがよしなんだ？何でガッツポーズ？」

「リアル男の娘。実在したなんて!？」

「違うぞベール。俺は男の子!!」

「我がよの春がきたー!!」

「ター。Xだと!?ネプテューヌなぜそれを知っている。もういいからズボン返して!」

「はい。」

ノワールが引きちぎったせいでズボンが

「ボドボドダー!」

「仕方ない。プロセスサユニット装着。プロセスサユニット装着完了。女神シルバーハート降臨!どうだこれなら服が破けても問題ないだろ。」

四人ともまたもや無反応。イストワールは変身と同時に機能一時停止させた。本の状態になって隅にでも転がっているだろう。少しは反省して下さい。

「ふつくしい。」

「社長!」

「でも私たちもできるよ変身。」

胸をはるネプテューヌ。

「やっぱり出来るんだ。みせてみせて。」

「……………残念だけど私達の変身は好感度を一定の値まで上げないと見れない。でも私のは振り切れてるからいつでもみせてあげる。」

「ブラン、それ結局どっち？」

「さあ？」

知らないようだ。

「まあ、いいや。みんなこれからよろしくね。」

「無理矢理まとめたわね。」

「だって疲れたんだもん。」

「お兄様これからよろしくね。」

「……………よろしく。」

「お兄様いろいろご迷惑お掛けしますがよろしくお願いしますわ。」

「よろしくー!!」

これから忙しく、いや一応楽しくかな、そう楽しくなっていきそうだな。でも嬉しいかなだって『家族が欲しい』という願いが叶うのだから。

「私は放置ですか。（TOT）」

あ、忘れてた。

驚愕の事実（後書き）

このイストワールはもう取り返しがつかない。

ネプテューヌは欲望に純粹。

ノワールはツツコミツンデレ。

ブランは自称無口系クールロリ美少女。

ベールは妄想癖の廃人。

主人公は男の娘。

まあ、暖かく見守って下さい。

プランとの一日（前書き）

まあ、題名通りです？

ブランとの一日

今日はブランと一緒に天界の図書館で読書中である。この図書館は俺が女神となった後に立てられた物である。かといって俺がこつこつと作ったわけではなく、ただ単に『あつたらいいな』と思っていたらいつの間にかやら出来ていた。いやほんとに。ご都合主義？何それ美味しいの。イストワールは『私がいるから良いじゃないですか。』と言い図書館を度々消し去ろうとする。まあ、そんなことは忘れてしまおう。

「お兄様続き早く読んで。」

「ああ、ごめん。」

今はブランに膝枕をして本を読み聞かせている。

「白貫姫はふがない王子様の代わりに魔女をしばいてしまいました。そして王子様をお尻に敷いて幸せに暮らしましたとさおしまい、おしまい。」

「いつの世も女性は強いね。」

「白貫姫はきつと拳法かなにかを習っていたんだよ。」

そう思わないとやってられない。

「次はこれ。」

ブランに新たに本を渡される。題名は……………。

「ピーチボーイ・裏切りの始まり。欲望とメダル。」

ツッコミどころが多すぎる。

「まあ、良い読むよ。」

「うん」

足をバタバタさせるブラン。

「こらはしたないからやめなさい。パンツ見えるよ。」

「みせてるの。ちらっ。」

「……………皆さんが知っているピーチボーイ。それは桃から産まれたボーイがお祖父さんと死闘を繰り広げキング。ブハ。トの称号を得てお供のフェニックス、ワーウルフ、ラオシ。ンロンの三匹と共にメダルの怪人グリードとグリードが人の欲望を基に生み出したヤミーと闘うハートフルラブコメディーであろつ。」

「そうなの？後パンツ見えた？」

「いや、たぶん違つと思う。後白いパンツなんて見てないから。」

「そうなの？ニヤニヤ。」

「無表情でニヤニヤとか言わないで。後ごめん見ました。」

「興奮した？」

「べ、別に。」

「確かめてみよ。くる。」

身体の向きを変えて膝枕に顔を埋めるブラン。

「こ、こら何処触ってるの!？」

力づくで離そうとする。だが変身されてしまう。純粹な力では俺はブランには負けてしまう。さすがに絶対領域でも腕力はどうしようもない。

「止めないともう本は読まないよ。」

「それは嫌。」

くるつと向きを戻すブラン。

「変身は止めないの？」

「うん。生足で好感度をあげるの。」

俺は生足見せれば好感度があがるのか。

「とりあえずこの本は読まないでおうか。この本一冊でまた別の物語が始まる予感がする。」

「否定できない。今日はもう本は良い。眠たくなってきた。」

まぶたを擦るブラン。

「ならお部屋行こうか？」

「うん。お姫様抱っこでお願い。」

「はいはいお姫様。」

ブラン＆ユウ移動中。

ブランの部屋に行く途中イストワールを見たようなきがしたがまあ気のせいだろう。

部屋に到着。

「ブラン着いたよ。」

そう言ってブランをベッドに横にする。そのまま立ち去ろうとするがブラン引っ張られベッドに引きづり込まれる。

「一緒に寝て。」

「はいはい。ブランは甘えん坊だなあ。」

「すうー。」

「寝るの早っ！？まあ、いいや。お休み、ブラン。んっ。」

ブランのおでこにキスすると俺もそのまま眠りにつくため目を閉じる。

「んっ、ちゅ。」

唇に柔らかく微かに湿っぱい感触がしたが気にせずそのままブランを抱き締め眠りにつく。

「おでこじゃ物足りないから。お休みお兄様。」

そしてブランとの一日が終わる。

プランとの一日（後書き）

天界の図書館はカオスのように見えるがちゃんとした本もあります。

大陸管理（前書き）

展開早いです！！
駄文です。

大陸管理

今はご都合主義もとい俺の純粋な願いによつて作られた会議室にて全員を集めて話し合いをしている。ちなみに全員女神化している。

「これより、綺羅星じゅ、じゃなくて女神総会を始める。今日の議題は今俺が管理している四つの大陸についてだ。」

「はい、先生。」

質問及び意見する時は挙手をする事となっている。

「はい、ネプテューヌ君。」

「今日の下着の色は何ですか？」

「女神化している時はプロセスサユニットを直接着ているため下着は付けていません。」

俺の女神化した姿はほかの四人の様にレオタードではなくスパッツである。

「そうなんですか？私興奮してきました。お花摘みに行ってきたもよろしいでしょうか？」

「駄目です。お前は女神化して性格は変わっても欲望には忠実だね。」

「ありがとうございます。」

「ほめてません。」

「ユウ話がそれてますよ（＜ε＞）」

イストワールがいましめてくれる。だがその顔をはなに？

「では改めて、俺が管理している四つの大陸。プラネテューヌ、ラステイション、ルウィー、リーンボックスは知っていますね。簡単に言えば女神候補生である貴女達四人にその大陸を一人ひとつずつ管理してもらいます。」

「『『『ええ』。』』』」

ある意味予想通り。

「反論はゆるしません。お前ら毎日ただ遊んでいるだけだろう。二
ート街道一直線だぞ。」

「今はコミケに向けての衣装作りで大変なのよね。あ、安心してお
兄様の衣装もちゃんと作ってるから。」

「それでも私は働きたくないですわ。」

「働いてもいいけど抱いて下さいお兄様。」

「…………小説の執筆が忙しい。」

「ニートな妹達とは口を聞かない。」

ぷいっとそっぽを向く。

「…………喜んで大陸管理をさせてもらいます。」

ニヤッ、計画通り。

「しきり直してと。イストワール四大陸の地図だして。」

俺はイストワールに指示をだしてウインクをする。するとイストワールもウインクを返す。そして自らの口の中に手をつ突っ込む。

「うおえええー。」

「『『吐いた!?!?!』』」

「いや、違う。イストワールは自らの体内にある書物を取り出しているだけであって嘔吐しているわけではない。」

俺も初めて見た時は引いた。

「はい、終了しました。どうぞユウ。」

「あ、ありがとう。うわっ、何かベタベタした液体が。」

俺は地図を受けとり開くなんかあちこちべたついてる。

「まあいい、これが四大大陸だ。お前達にはこの大陸をひとつずつ管理してもらう。誰がどの大陸を管理するかはすでにアミダで決めました。」

「そんなに簡単に決めていいものなの?」

ノワールが頼杖をついて呆れた様に言う。

「ノワールこれ作るのに三時間もかかったんだよ。」

「お兄様も大概暇そうよね。」

全員が同様に呆れた顔をして俺を見る。ヤバイヤバイ兄としての威厳が……………。

「ま、まあアミダはおいといて誰がどの大陸を管理するかを発表します。」

「『『『逃げた。』』』」

「まずはネプテューヌにはプラネテューヌを管理してもらいます。」

「任せてお兄様！あと結婚して下さい。」

「次はノワール。」

「スルー！？スルーなのね、興奮してきたー！！」

いちいち叫ばないでほしい。今ちよつとびつくりした。

「ノワールにはラステイションを管理してもらいます。」

「全力を尽くすわ。それでお兄様新しい衣装採寸したいから後で来てもらっていいかしら？」

「いいけど変なの着せないでよ。ミニスカート履いて下界のみんなに見られたのはかなり恥ずかしかったよ。次はベール。ベールにはリンボックスを管理してもらいます。」

「がんばりますわ。ところでお兄様ほしいゲームがあるのですけれど。」

「3日前に買ってあげたばかりだろう。お前はニートを通り越して廃人街道一直線だな。」

「まあ、ありがとうございますお兄様。後3日前に買ったゲームはもうクリアしましたわ。」

「ほめてないから。次はブラン。ブランにはルウィーを管理してもらいます。」

「……………わかった。後お兄様また小説書いたから読んで見て。」

「わ、わかった。暇があったら読んでおくよ。イストワール保管しておいて。」

俺はブランから渡された本をイストワールの口に突っ込む。あの小説はある意味トラウマものである。簡単に言えばブランの小説は酷い！！我が妹ながらこの酷さはやばい例えるならばエスカルゴをレストランで注文したら生きたかたつむりが出されるくらいに。

「やめてください。こんなに大きい物入りません！こんなにいれたらわたしこわれちゃいまげばらああ！？」

「お兄様イストワールが白目むいてるけど。」

「ノワール、こいつはこんな事じゃ壊れない。何故なら俺のパートナーなんだから。」

「ええ、私はこんなの慣れっこですよ。」

俺の言葉が聞こえたのかイストワールがブランの小説を飲み込んで生き返る。

「貴方達やっぱり異常です。」

「ごもつともだけどお前はその異常の妹だからねノワール。」

「ああ、そうだった。なら私も異常なのかしら。」

頭をかかえ本気で悩み始めたノワール。だが俺はそんなことを気にせず話を締めくくる。

「これにて女神総会を終了します。まあ、大陸管理については俺がサポートするから安心してあと何か聞きたいことがあったら聞きに來て。じゃあ、みんながんばって。」

「失礼しますね。」

俺とイストワールは女神総会が終わると別の部屋に転移する。

「『消えた!?!?!』」

四人はそれを見てたいそう驚いたそうな。

場所は変わってイストワールとユウが転移してきた部屋。そこは全体的に白で統一された色の部屋であった。

「よかったですか？」

イストワールいつになく真剣な表情でユウに聞く。

「ん、何の事？」

「とぼけないで下さい。大陸管理をあの娘達四人にさせる事です！」

ユウのとぼけた態度にイストワールが怒りを隠さずに言葉を紡ぐ。

「今はたださえ大変な時期なのにさらに厄介事を増やさなくてもいいではないですか！！このままでは貴方の身体に負担がかかります！！」

「そこまで負担がかからないとは思っただが。」

それを聞いてイストワールはさらに語気を強める。

「私が知らないとも思っているんですか？最近のモンスターの大量発生、異常気象、シェアの低下を防ぐため貴方が休む間もなく動いていることを――！」

「やっぱりばれていたか。」

「当たり前です――！私はこの世界その物なのですから。」

「なら分かるだろ。頭の良いお前ならあの四人に大陸管理を任せた理由を。」

その言葉にイストワール唇を噛みしめうつむく。

「シェアの分割。貴方へ向けられているシェアをあの娘達四人に……。」

「そうあの娘達に向けてあの四人に新たな女神となってもらう。あの娘達も素質は充分あるんだから大丈夫だよ。」

「それでいいんですか？貴方が今まで集めてきた信仰を全てをあの娘達に渡してしまっても。」

「別に構わないよ、それに大陸管理は大変な事ばかりだしね。あの娘達にも大陸管理が大変だという事を分かってほしいからね。大陸を一人ひとつだから大丈夫だよ。」

「わかりました。私はもう何も言いません。ですが……………」

イストワールがうつむく。

「ですが私の前からいなくならないでください。傷つかないでください。貴方がいなくなるのは傷つくのは見たくない。」

「イストワール……………。当たり前だろう。お前は俺のパートナーじゃないか。」

イストワールの頭を撫でつつ微笑む。

「そう言われるともう何も言えないんですね。私も甘いんです。でしたら今日は一緒に寝ても良いですよ。パートナーなんですから。」

「調子に乗るなと言いたいところだけどまあ、今日だけだからね、変な事するなよ。別に嬉しくなんかいいんだからね。」

何故かそっぽを向いて言う。

「では、変身♪」

「えっ!？」

イストワールの掛け声と共にその身体が光に包まれる。

「眩しい!？」

イストワールを包んでいた光が消える。

「どうですか?」

「イヤイヤ何それ!？」

「俺聞いてない!?!なんでおっきくなっているー!?!」

そうイストワールが大きくなっていた。ブランより少し小さいくらい。

「あの娘達には負けられませんから。これじゃあおきに召しませんか？」

「いや、そんなことはないんだけどまあ、気にするだけ無駄か。寝ちゃお。」

気にせず部屋の備え付けのベッドに入る

「えへへ（o^v^o）」

イストワールが隣に入って来る。そして腕に抱きついてくる。

なんだか良い夢が見れそうな気がした。

「「お休み。」」

そして二人は眠りについた。

大陸管理（後書き）

まあ、こんな感じです。感想待っています。

ノワールと一日（前書き）

どうしよう一話一話がかなりの短さ。

ノワールと一日

今俺はノワールの部屋に訪れている。今では来たことに少し後悔している。

「さあ、お兄様これを着てみて下さい。」

メイド服らしき物を手渡される。

「ちょっと、ノワールこのメイド服スカート短すぎる。」

「ちがうわ！それはメイド服ではなくて今大人気アニメ『マジカルニャンコちゃん』のコスチュームよ！！」

凄い気迫だな、一瞬ひるんだぞ。

「さあ、お着替えしましょうお兄様。」

「ま、まて着替えぐらいは自分でできるから。」

「これを着るの大変なのよ、だから手伝ってあげる。さあ、さあ！」

何かまずいと直感が訴えてくる。ノワールの手が肩にかかる。

「わかった、わかったから。」

凄い良い笑顔である。

「うつつ。」

ただいまノワールにより着替えさせられ中。

「ここはこう付けてと、それにしてもお兄様の肌って白くてすべすべして羨ましいわ。」

指で背中を撫でられる。

「ひゃう!?!」

思わず声をあげてしまう。

「あらごめんなさい、感度も良いのね。ほんとに男にしておくのは

勿体ないわね。」

今は何を言われようとも我慢しなくては。下手に何かすると後が恐い。

「はい、ネコミミ付けて出来上がり♪さすが私良い仕事してるわね！。」

「うつつ、恥ずかしすぎるー!!」

考えてほしい年ごろの男がこの恰好だぞ。かなり精神的にきついら。

対象的にノワールはニコニコしている、カメラを構えながら。ん？

「カメラ!？」

「次は撮影会ね。その顔いただき。」

パシャッという音と共に撮られる。

「ちょっと待ていくら何でも撮影は止めて。」

「大丈夫よ。誰にも見せないから。それとも今までの写真下界にばら蒔いてもいいの？」

「わ、わかった。だからそれだけは止めてくれ。」

想像しただけで恐ろしい。

「じゃあ、まずは女神化してちょうだい。勿論服はそのままよ。」

「わ、わかった。変身。」

俺はシルバーハートへと姿を変える。

ノワールはシルバーハートになった俺の姿を見て二、三回頷く。

「やっぱりこっちの方がしっくりくるわね。じゃあ今から私のいつもの通りのポーズをとってくれるかしら？」

拒否権はないんだろうどうせ。

「もう開き直ったぞ、よしどんどこい!!」

心の準備はOKだー!!

「まずはそのミニスカートをたくしあげてみて。」

「いきなり予想を遥かに越えたー!!」

イヤイヤこの短いスカートをまくるとかもう下着が見えるだろうが。

「スパッツだから問題ないでしょう?それに主人公のニャンコちゃんのモットーはスパッツは見せないと恥ずかしいもん。」

え、何そのストライクなうっちーず的な考え方は。

「さあ、早くしてくれるかしらお兄様。時間は有限なのよ。」

「はいはい。」

仕方く俺はスカートをまくり上げる。

「素晴らしいわその恥ずかしそうな表情もいただきね。ナイススパ
ッツー！」

何度もカメラのフラッシュがたかれる。

「ねえ、ノワール。」

俺は前から思っていた疑問をノワールにぶつける。

「何？ああ、次は四つん這いになって。」

「よ、四つん這いね。自分ではコスプレしないのか？」

「するわよ。」

「その割にはあんまりそんな姿を見かけないけど。」

「みせてないから当たり前。もしかして見たいの？」

「ちょっと興味があるかな？」

カメラをいったんしまつとノワールは俺の四つん這いに合わせて座っていた椅子から立ち上がる。

「じゃあ、着替えるから待ってくれるかしら。」

「わ、わかった。」

俺はそう言つとノワールのコスプレした姿を想像する。コスプレするのは構わないんだけどこの服見たいに露出が多いのは何か嫌だな。理由はよく分らないんだけど。

「終わったわよ。」

早！？

コスプレしたノワールは何故か女神化した状態にフリルがふんだんにあしらわれたピンク色のゴスロリとか言う恰好だった。

「おおー。」

「何？やっぱり変かしら。だからいやだったのよね。」

何故か落ち込むノワール。

「そんなことないよ。凄く可愛いよ!」

その俺の言葉に何故か驚くノワール。

「か、可愛いってなんでそんなことをどうして簡単に言えるのかしら。その姿で言っても嫌味にしか聞こえないし。」

何やら言ったようだが小さくてよく聞こえなかった。

「ん?ごめんノワールよく聞こえなかった。もう一回聞いていい?」

今度は何故か怒っている。喜怒哀楽がゆたかな娘である。

「なんでもない。今日の撮影会はこれでおわり。」

おおー。何か知らないが終わったよ。そんなことを考えているとノワールに押し倒される。

「ノ、ノワール急にどうしたの!?!」

「馬鹿お兄様。今日は二人きりなんだから少しは気をきかせてよ。」

顔を赤くしてそっぽを向くノワール。

ああ、ようわあまえたいのか。

「今日は気をきかせて二人で遊ぶか？」

一瞬ノワールは笑顔になるがすぐに顔を引き締める。

「しょうがないからいつしよに遊んであげるわ。まったく寂しがりやのお兄様にも困ったものだわ。」

「はいはい。」

その日一日はノワールといろんな事をしてあそびました。

終わりだー！！

ノワールの部屋から出るときどこかで見かけた本が凄い勢いで浮遊し移動していた。

ノワールとの一日（後書き）

なかなか話が進まないー！！

怒りの赤、奪われたスパッツ！！（前書き）

感想が欲しいー！！ できればほめてくれれば作者はやる気を出します。

怒りの赤、奪われたスパッツ！！

四人に大陸管理を任せてかなりの年月がたった。今では俺が教える事もなく全員がその大陸の女神として信仰されている。そして俺の出番もなくなり女神の力もなくなると思っていた。だが俺の女神の力は失われなかった。以前として女神化も可能であり力は持続していた。イストワールでさえもその理由を説明することは出来なかった。ただまだどこかで俺の事を信仰してくれているのかもしれない。だがそれはあり得ないと俺は思っている。今では俺は下界の事には干渉はほとんどせずに過ごしている。時折妹達が手におえなくなつた際にこつそり手助けしてただけである。そんなことを考えているとイストワールより驚きの報告を受ける。

「ネプテューヌ達が戦闘を？」

「はい。何やら女神化して本気で争っているようだ。」

確かにここ最近あの娘達がギクシャクしたり互いの大陸の管理について争っているようなことはあったが女神化して戦闘を行うのは危険すぎる。怪我どころでは済まないかもしれない。仕方ない、様子を見て場合によってはお仕置きしないといけないか。

「イストワール場所は？」

「ここから少し離れたモンスターも現れないはずの場所になります。」

「ああ、あそこね。わかった、転移で直ぐに向かうぞ」

「了解しました。」

俺とイストワールは四人がいる場所に転移する。

「到着つと。さてあいつらは、いたいた。」

到着して四人を探すと以外と直ぐに見つける事ができた。

「やはり何かあるようですね。全員殺気だってますよ。」

イストワールの言葉通り四人の表情には相手を本気で叩き潰すという意思が明確に読み取れる。

「しばらく様子を見てみようか。」

「その方が賢明でしょうね。今出て行っても状況を悪化させるだけですしね。」

四女神 side

四人の女神達は斬り合いを続ける。四人の力は拮抗して決着が付かない現状である。

「埒が空かないわね。」

ノワールが忌々しげに他の女神を睨み付ける。

「確かにそうですわね。」

ノワールの言葉に同意しつつも槍を構えるベール。

「……………なら誰か一人を先に消す。」

自らの身体の大きさに合わない戦斧を構えて静かに発言するブラン。

「それもいいわね、一番邪魔な奴を消すと言う事で良いかしら？」

「構いませんわ。」

「…………別に構わない。」

ノワールの言葉に賛成するブランとベール。

「誰を倒すかだけど……………」。

その言葉と共に今まで語りあっていた三人の視線が一人に集まる。

「……………ふふふつ。ん？何かしら三人ともそんなにわたしを見つめて。」

今までひとつの発言もせずに何故かニヤニヤしていたネプテューヌへと。

「貴女ね。」

「てめえだな。」

「貴女ですわね。」

「……………？何かかしら。」

三人の発言の意味がまったく分かっていないのか首を傾げるネプテューヌ。

「貴女人の話を聞いてなかったの？っていうかさつきから何ニヤニヤしてるのよ気持ち悪いのよ！」

ノワールの言葉に納得がいったのかうんうんと頷くネプテューヌ。

「ふふっ、驚かないでちょうだいね。これを見なさい。」

ネプテューヌが何処からともなくスパッツを取り出し上空に掲げる。

「……………スパッツ？」

今度はブランが首を傾げる。

「そうスパッツよ。言っておくけど私ではないわよ。」

黒いスパッツ。取り出したネプテューヌ本人の物ではないとするならと三人は互いを伺う。ふと三人の考えが一致する。

「……まさかお兄様の！？」「……」

「そのまさかよ。やつとの思いで手にいれたのよ。ああ、早く戦いを終わらせてくんかくんかしなくては。」

恍惚の表情でスパッツを懷にしまう。

「……」「……」

静かにそれぞれの武器を構える三人。

「あ、あら恐い顔をしてどうかしたのかしら三人とも。まあいいわめんどくさいからまとめてかかって来なさい。」

三対一戦いをすればどちらが勝かは一目瞭然。だが今は分からない何故ならば

「「「「スパッツー!!」「」「」

スパッツが出てきたのだから。

ユウside

「「「「スパッツー!!」「」「」

俺は今頭を抱えて妹達の戦いを見ていた。

「スパッツの力は凄いですね。」

イストワールが何かを言っているようだがまったくもって頭に入って来ない。

「あいつらの育て方いいたいどこで間違えてしまったのだろうか?」

「生まれた時からではないでしょうか？」

俺はあいつら四人が生まれた時から今までのことを思いかえす。正直甘えさせすぎたかな。調子に乗っている部分もあるのではないかとさえ思えてくる。そして俺が受けてきた理不尽な扱いを思い出す。すると驚くほど頭がすっきりしてプツンと何かが俺の中で切れる。

「そうだあいつらには少し反省してもらわねば、変身。」

俺の姿がシルバーハートへと変わる。だがひとつおかしいことがある。

「赤色？」

今イストワールが呟いた通りいつものシルバーハートのプロセッサと色が違い何故か赤かった。

「簡単に言えば俺のプロセッサユニットは感情に反応するんだ。今は怒りの感情ね。」

「なるほど……。それであの娘達をどうするんですか？」

「お仕置きそれと少し早いけど例の計画を実行する。」

そして俺は妹達に向かってゆっくりと歩き出す。

「あの娘達のご冥福を祈ります。」

イストワールはこっそり十字を切っていた。

四女神 side

四人は四人共にボロボロであった、スパッツのせいで。

「ネプテューヌいい加減にスパッツを渡しなさい。」

荒い息を整えながらノワールがネプテューヌに言う。

「お兄様の神聖なスパッツは私のもんだ!!」

普段兄の前では考えられないような発言をするブラン。

「ふふつ。お兄様のスパッツ、私はそれを隠しもっているのがお兄様にばれてしまう。そしてお兄様は私を無理矢理押し倒されてしまう。そしてそのまま……………」

最早取り返しが付かないベール。

全員が武器を構え直す。そして

「……………決着をつけ……………!?!?!」

ようとしたその瞬間女神四人に向かって圧倒的な闘気と怒気がぶつけられる。

四人がその方向を向くと自分達の愛する兄がいた。普段なら直ぐにでも飛びついて行くのだが今の兄には誰も近づけないでいる。兄は

とても良い笑顔なのだが今の兄は目が笑っていなかった。

「みんな、こんなところでのうのうとひとのスパッツを巡って何を
しているの？」

「えっ、いや、あの。」

兄の言葉に反応しようとするが上手く反応出来ないノワール。

「……………」

まともに兄の顔すら見れないブランとベール。そんな三人の気を知
らずかネプテューヌが……………。

「お、お兄様のスパッツを見つけたから届けようとしてたのよ。」

「そうなの？それはお礼をしないといけないかなあ？」

すると兄の気が収まった、それに安心したネプテューヌは言葉を紡
ぐ。そして

「そんなお礼なんて気にしないでお兄さまごへうー！！」

上空を無様に舞っていた。そこに兄、いや阿修羅さえも凌駕した何
かは追撃をする。

「穿て烈線！！」

「ちよっ、まっ！？」

「無限の剣星蒼窮を駆ける！」

「げぼっ！！ぐぼらっ！！？」

「ワンオフス・ディゾルヴァー!!」

「イヤー!!」

何があつたかは諸君らで想像してほしい。ただ結果ノワール、ベル、ブランの前には

「回復アイテムキボンヌ……………」

そう言つて倒れた紫色の何かがあつた。

「ひい!?」

そして三人の女神達の前に立つ阿修羅さん。

「残念だけど気は収まつたのではなく収束しただけなんだよね。さてねえノワール？」

あからさまに身体をビクツと震わせる。そんなことはお構いなしに阿修羅さんはノワールに向かって歩き出す。ノワールは蛇に睨まれた蛙のごとく動けないでいた。

「お前ならこんな馬鹿な事しないと思つていたんだけどなあー。まさかスパッツ、スパッツ連呼して闘いに参加するなんてねえ。」

「ち、違つのお兄様私はただお兄様のスパッツを履きたくて（ネプテューヌから取り返して届けたくて）。あ、本音と建前がぎゃくに!？」

阿修羅さんは無言でノワールを羽交い締めにする。

「えっ……………！？」そのまま空中に飛翔する。もの凄いスピードで。さらに空中で物凄い早さで五回ほど回転する。

「うっ！？」

この時点で気絶するノワール。そんなことはお構いなしに物凄い勢いで地面にノワールは犬神家のごとく突き立てられる。（この一連の流れ仮面ライダー龍騎に登場する仮面ライダーベルデのファイナルベントを思いうかべてほしい。）

阿修羅さんは次の標的であるベールに目を向ける。

「お、お兄様私の話を聞いてくぶわぁー！！！」

そんな謝罪は無視してベールに蹴りと殴打の嵐を喰らわせる阿修羅さん。

ここからは音声のみでお楽しみ下さいね。

「奮えるぞ胸ー！！！」

「ちよっ、まっ！？」

「燃え尽きるほど熱いー！！！」

「理不尽なー！！！」

「刻みます。流星のスピリアー！！！」

「ぐぼっ！？」

「君が泣くまで殴り飛ばすー！！！」

「ひどっ!？」

「銀色流星拳――!!」

「も、もう無理ですわ……………」

「悪・即・爆発――!!」

最後に残されたブランの前には爆発した何かが落ちてくる。

「あ、ああ……………!？」

怯えきつたブランの前に阿修羅さんが舞い降りる。

「さてとブランお前は俺のスパッツをどうするつもりだったの？」

「……………」

最早ガタガタ震えだしてまともに口すら開けないブラン

それを見た阿修羅さんは小さくため息をつき、今まで赤くなっていた装甲を元に戻す。そして両手で拳を握りしめゆっくりとブランのこめかみに添える。

その瞬間ブランは自分が何をされるか悟り顔を真っ青にした。

『ぐりぐり』と物凄い音が聞こえた。そして高速で回転するユウの両手。そしてあまりの痛みで声すら出せないブラン。

「……………!？」

「俺は言ったはずだけどね。口調のどうすれば良かったね。」

「……………！」

ブランの手からユウの手が離される。

「うめ…ぼし…はいや……………」

そう言って倒れるブラン。

そして四人の女神は目の前が真っ黒になった。

ユウ s i d e

今俺の前にはボロ雑巾のようになった妹達がいる。

「さてと仕上げと行きますか。」

妹達に転移に使う魔法陣を作り出す。

そこにイストワールから声をかけられる。

「本当にいいんですかこの娘達を下界に落として？」

それを手でせいする。

「それは言わない約束だよ、イストワール。俺は期待しているんだよね。この娘達が下界で成長することを。」

そう言うって転移魔法陣を発動させ四人を転移させる。

「その為に今まで準備してきたんだからね。」

最後のつぶやきはイストワールには聞き取れなかった。

「……………あつ、スパッツ返してもらうの忘れてた。」

そして奪われたスパッツ。今スパッツはネプテューヌの手中に。

怒りの赤、奪われたスパッツ！！（後書き）

次回は下界に落ちたスパッツ視点でお送りします。

堕ちたスパッツ、突き刺さる紫（前書き）

落ちたスパッツ視点もとい突き刺さったネプテューヌ視点です。

いが。そんなことを考えていると、扉が開き女の子が入って来る。
「目覚めたですか？」

「うん。でもなんか嫌な夢見たせいで目覚めは最悪かな。えっと
……………」

「あつ、私の名前はコンパっています。」

「コンパだね。私はネプテューヌ。ねぶたん、ねぶちゃん、ねぶぴ
よん好きに呼んでね。」

目の前の少女コンパは少し考えるように頭を捻ると

「じゃあ、ねぶねぶついていきます。ところでねぶねぶはなんであ
んなところに突き刺さってたんですか？」

「ん？突き刺さってたの私。」

「覚えてないんですか！？頭から地面に突き刺さってましたよ。」

「ごめんコンパ。私名前以外は何も覚えてないの。」

記憶がないことをコンパに説明する。

「記憶喪失ですか。だとすると地面に突き刺さった時のショックで
……………」

コンパが思考の渦に入った為に手持ちぶさたになったネプテューヌ
はコンパを観察して見る。無論失礼などという気持ちなど一切なく
その内で最終的にネプテューヌの視線が辿りついたのはコンパの胸
だった。

そんな露骨な視線に女の子であるコンパが気づかないわけがない。

「ね、ねぶねぶどうしたんですか？」

自分の身体を抱きしめ胸を隠すコンパ。

「うーん、なんかコンパのおっぱいを見ると嫌な感じがするんだよねえ。コンパって妄想する？」

「も、妄想ですか？余りしないですよ。」

「うーん、なんか引つかかるんだよねえ。」

「何か記憶の手掛かりになるかもしれませんよ。ねぶねぶ他に何かありませんか？」

「そう言われても簡単にはねえ。ん？」

何かが懐の中にあるのに気づき引つ張り出すネプテューヌ。出てきたのは……………。

「「スパッツ？」」

そうネプテューヌの兄ユウのスパッツであった。だがネプテューヌはそんなことは知らない。

「んー私のかなあ。それにしても大きいなー。」

スパッツを掲げているネプテューヌ。

「それ以前にそのスパッツ男ものですよ。ってねぶねぶ何してるんですか！？」

コンパが驚くのも頷ける。ネプテューヌはおもむろにそのスパッツに顔を埋めて匂いを嗅ぎ始めた。

「スーハー スーハー。」

コンパの声すら聞こえていないのかニヤニヤしながら嗅ぎ続けるネプテューヌ。痺れを切らしたコンパがスパッツを奪いとるまでそれは続いた。

「ねぶねぶ女の子があんなはしたないことしたらいけないですよ。」

「ううー。だってなんかあのスパッツ凄いい匂いがしたんだもん。コンパも嗅いでみたら？」

「嗅ぎません！えへん、ところでなにか思い出しませんでしたか。」

「……………このスパッツで。」

「うーん、良い匂いがするのとなんだか懐かしい感じがするんだよね。」

ネプテューヌは何か大切な物を見るような目でスパッツを見る。

そしてそんなネプテューヌを見てドン引きするコンパ。

なんとも対照的な二人である。

おもむろにコンパの手からスパッツを奪いとるネプテューヌ。そのまま立ち上がりスパッツに足を通す。

コンパはただただ啞然としてネプテューヌの行動を見つめる。

「んー。やっぱり少し大きいかなっ！？おおー。」

何故かネプテューヌには大きはずのスパッツが何故かぴったりフィ

ットする。

「凄いよ、このスパッツ！！ねえねえコンパ見てよぴったりだよー。」

コンパにスパッツを見せつけるネプテューヌ。くるくる回ってみたいジャンプしてみたりと人の部屋だということを忘れてしまっている。

そんなネプテューヌを見てコンパは……………。

（私がしっかりしなきゃです。）

決意をしていたようです。

ところ変わって場所はダンジョン。コンパが事前に調べた初級者向けの物。

コンパはさっきのスパッツの件よりも混乱していた。

「ふっ、他愛もないわね。」

ネプテューヌの姿が変わりダンジョンのボスキャラを圧倒しているのである。

「ねぶねぶその姿は？」

「さあ、私にも分からないわ。ただ言える事があるとすれば……………」

「あるとすれば？」

「おっぱいが大きくなっているってことよー!!」

胸をはって自信満々に言うネプテューヌ。

それを見てコンパは（やっぱり私がしっかりしなきゃです。）

改めて決意をしていたようです。

その後ボスキャラを倒した後ボスキャラが落としたアイテム　それが彼女達の未来を変える。

『ネプテューヌさんはじめまして。私はイストワール。貴女にたのみたい事があります。私は今悪い奴に捕まっているので助けて下さい。四つの大陸のそれぞれに私を助ける事が出来るアイテムの欠片があります。欠片は強いモンスターが持っています。ですからなんとかして下さい。』

この声（何故か棒読み）を聞いたネプテューヌは大陸を越えた冒険をすることになる。

それを聞いたネプテューヌはコンパに説明する。

「といわけなのよコンパ。」

「幻聴じゃないですか？」

冒険はまだ始まったばかりである。

堕ちたスパッツ、突き刺さる紫（後書き）

ネプテューヌのせいでコンパがしつかりとした常識人になってしま
いそう。次回からはユウ視点に戻ります。それと感想をくれた方々
本当にありがとうございます。次が投稿早く出来るようにがんばり
ます。

邂逅のI・F・(前書き)

ユウがデレます。そしてあの娘と出会います。

主人公は男の娘であると言つことを前提に見てくださいね。

邂逅のI・F・

C o u n c i l

妹達を下界に落として数日。妹達の様子はいつでも確認できるよう
にしている。そんな時ひとつの問題が発生したネプテューヌの記
憶喪失である。

「記憶喪失か。衝撃与えすぎたかな。」

「いえ、もっと消え去るぐらいは殺るべきだったと私は思いますが
(。ー。)」

いつの間にか現れたイストワールが話しかけてくる。

「消え去るぐらいって……。お前なんか怖いぞ。」

一瞬ヒヤツとした。

「もー。女の子にそんなこと言ったらだめなんですよ。」

プリプリ怒りながら俺の頭の上に小さい状態で座るイストワール。

「ところでネプテューヌさんの件私に任せてくれませんか？」うつ
て変わって真面目な声で話しかけてるイストワール。

「ん？何をするつもりだ。」

少し心配でもある。こいつは俺を一番で考えて他の事をおろそかに

しがちなところがあるから。

「別に危ない事をさせるつもりはありません。ただ四つの大陸を冒険してもらっただけですよ。」

「な！？それは危険だろう！！」

「何を言ってるんですか？ネプテューヌさんならそこら辺のモンスター相手には負けませんよ。」

イストワールが落ち着いて下さいと促してくる。だがお前は大事な事を忘れてるぞ。

「確かにモンスター相手ならね。だけど女神どうしでぶつかるとしたら危険すぎるだろう。ああ、みんなが怪我したらどうしよう。やっぱり連れ戻すべきかな。」

イストワールはなぜか「たまりませんねえ。」とかいいながら頭から降りて身体を大きくして椅子に座っていた俺の膝の上に向かいあう様に座る。そして俺は抱き締められる。さらには頭を撫でられる。

「なんだかんだ言いながら貴方もブラコンなんですネ。」

「な！？そんなんじゃない。ただ俺はあいつらが下界の人達に迷惑をかけないかどうか心配なだけでだな！！」

イストワールは抱きしめる力を更に強くする。

「そんな泣きそうな顔してたら説得力ないですよ。」

泣きそうな顔してたのか。

「心配って言ったら心配だよ。あいつらにお仕置きしたのだって少し反省してるしね。乱暴だったてね。」

イストワールを抱きしめ返してそう話す

「はう。そうですか。でも後悔はしてないんですか？」

顔を赤くしながらも聞き返してくるイストワール。

「うん。だってあいつらのことを思ってたことだからね。」

「そうですよね。だったら尚更ネプテューヌさんいえ下界に降りた四人のことは私に任せてくれませんか？」

「んー。少し心配だけどイストワールがそこまで言うなら頼むよ。無論報告は定期的にしてね。」

「はい、勿論です。でもなんか貴方らしくありませんね。そんなに弱々しいとおそっちゃいますよー（＾．＾）」

俺の背中をわさわたとさわりながらニヤニヤと耳元で話しかけるイストワール。

「良いよ。」

「え？（。―。）」

「イストワールになら。」

イストワール side

今この人はなんて言った！？私の間違えでなければ襲って良いとにやんにやんしても良いとそう言いましたよね！！

「い、いいんですか？」

ごくりと唾を飲み込み目の前の最高のご馳走を見つめる。

「良いよイストワールになら。でも……………」

「でも？」

ここにきてやっぱり生理的に無理なんて止めて下さいね。そんなことになったら私立ち直れませんから。だがそれは私の予想を遥かに上回ったでもだった。

「でもそついう事初めてだからどうすればいいかわかんないよ。」

なにこの可愛い生き物？

「大丈夫です！！私の持ち得る全ての知識を持って貴方を快樂のドン底に叩きおとしますから。」

「????」

はっ！？いけませんここで下手な事を言ったら取り返しの付かないことに！？」

「では目をつぶって下さいね。」

「うん。うん。」

目をつぶるユウ僅かに赤らんでいる頬。私の理性が決壊するのは早かった。

「ではいただきます。」

私は一旦距離を取り助走を付けてユウに飛びかかりました。

そして私は頭を殴打して気を失いました。

ユウside

「では目をつぶって下さいね。」

「うん。」

イストワールの指示通りに目を瞑ると頭の中に誰かの声が響いてくる。

『助けて。』

その声に俺は立ち上がり転移魔法を発動させすぐさま声が聞こえてきた場所に向かう。途中ゴーンと音が聞こえた気がしたが気にしなかった。

アイエフside

私は今窮地にたたされていた。簡単なクエストのはずだったのだがクエスト情報にはなかった大型のモンスター。わたしの好きなRPGで言うならばキガントモンスターというのだろうか。今そのギガントモンスターが私の前にいるのである。

「いくら何でもこれはまずいわね。」

リーンボックス私が信仰している女神様グリーンハート様が守護する大陸。今回はそのリーンボックスのグリーンハート様からの依頼だった。無論グリーンハート様本人にあったわけではない。協会のうさんくさい教院長から頼まれたのである。

『グヴオー!!』

「考えている時間はないか。なんとか隙を見て逃げ出さないとね。」
だが逃げださず事など出来るのだろうか。そんなことにお構い無しにモンスターはその巨大な腕を振り降ろしてくる。

「くっ!? 冗談でしょう腕振り降ろしただけでクレーター出来てるわよ。」

などと驚いていたせいかもしれない、モンスターの剣状の尻尾からの不意打ちに気付く事に遅れてしまった。

「しまった!？」

こんなところで終わるなんて思いながらも、心の中で女神様に助けを求める。

（やっぱり女神様が私なんかの為に来てくれるわけないわよね。もう少しだけ色々して見たかったわね。）

諦めて私は目をつぶる。

おかしい。衝撃が痛みがいつまでたっても襲ってこない。不思議に思っただけ私は目を開ける。

そこにいたのは銀色に輝くとても綺麗な人いや、

「……………女神様。」

C o u n c i l

声が聞こえた場所に駆けつけると女の子が特大モンスターに襲われていた。名前をつけるとするならイアンコック。

すぐさま俺はモンスターの前に立ち攻撃を菊文字で受け止める。

「……………女神様。」

ああ、またそれか。 そんなつぶやきを聞きつつモンスターに向けて菊雫紋字を一閃する。そして胴体を真つ二つにする。

「凄………」

その声に振り向くと先ほどの少女が呆然といった表情で俺を見ていた。

「大丈夫だった？」

今できる最大現の笑顔で話しかける。

「は、はい。女神様のおかげでなんともありません。」

顔を赤くして少し緊張しているようである。ふと彼女の服の袖に血が滲んでいるのを見つける。

「ちょっとみせて。」

「は、はい。」

見てみると少し手の甲が切れていた。すぐさま癒しの魔法をかける。

「癒しよ。うん、これで大丈夫。後はこれをまいてっと。よし。」

癒しの魔法をかけた後状態異常をなくすスカーフをての甲にまく。

「傷が！？あ、ありがとうございます。ところでこれは？」

「それは守りのスカーフ。どんな毒も痺れもそれがあれば守ってくれるよ。」

それを聞いて驚く少女。

「そ、そんな凄いもの貰えませんよ。」

「気にしないで良いよ。俺ももう一枚持っているから。」

ヒラヒラとスカーフを見せる。と余り長くいるとベールに気付かれるからそろそろ退散するかな。

「というわけで俺はそろそろ帰るね。あとこの辺のモンスターは――掃してあるから帰りは安全だからね。」

俺は飛び立とうとする。そこに少女が声をかける。

「あの貴方の名前を教えてください。貴方を名前で呼びたいから。」

「シルバーハートそれが今の俺の名前。君の名前は？」

「あ、アイエフです。シルバーハート様。」

「アイエフさんだね。また会えるといいね。では失礼するよ。」

そう言っただけ俺は転移魔法を発動して天界に戻った。

アイエフ side

あのあと私はダンジョンを抜けてリーンボックスの町に戻った。

戻ってすぐにとまっていた宿屋に戻り携帯電話のインターネットでシルバーハート様についてくぐってみた。

それでわかったこと。

ひとつ、シルバーハート様は余り人前には出ないため余り知られて

いない。だが何度が目撃されている。

二つ、その割には根強い人気がある。

そして三つ、男の娘である。

「まあ、ネットで調べられるのはこんなことぐらいかしらね。」

私は携帯をしまつとひとつの決心をする。それは……………

「シルバーハート様を信仰する！！そうと決まったらまずは仲間を集めないとね。ふふっ、待っていてくださいねシルバーハート様。きつと貴方を最高の女神様にして見せます。」

少女は決意したようである。

そんな少女に信仰されたシルバーハートは……………。

「ご、ごめんイストワール。お願いだから泣き止んで。」

「私なんて私なんて死んだ方がいいんですー！！うわぁーん。」

慰めていたそうだ。

邂逅のI・F・（後書き）

トマト畑「ニヤニヤ。」

ユウ「なに感想みてニヤニヤしてんのトマト？」

トマト畑「いやあ感想もらえると嬉しくて。」

ユウ「まあ、ありがたいけどニヤニヤするのは気持ち悪い。」

トマト畑「うっ。でも今回のイストワールとお前のほどではないぞ。」

ユウ「……………／／／。次回はスパッツもといネプテューヌとアイエフの出会い。上手くいけば黒い妹との再会までいきたいと思います。では失礼します。次回また会いましょう。」

トマト畑「トマトのセリフがー！！」

新たな仲間LEDそして黒き妹。（前書き）

前回登場したアイエフが登場。やはりキャラ決壊ぎみです。
ちなみにネプテューヌいやもうスパッツでいいや。今回はスパッツ
視点です。

新たな仲間LEDそして黒き妹。

ネプテューヌside

プラネテューヌで鍵の欠片なるアイテムを手に入れたネプテューヌ。次なる大陸ラステーションを目指して大陸間をつなぐダンジョンを進んでいた。

「なーんだこのモンスター結構弱いね。これなら次の大陸なんてすぐについちゃうよ。」

「ダメですよね。ぶねぶ油断してたら足元すくわれるです。」

「大丈夫だつて。もうコンパは心配症なんだから。それに私にはこのスパッツがついてるから。」

スカートをまくりあげ履いているスパッツをまるでいとおしいもののように見つめるネプテューヌ。

そんなネプテューヌを見てコンパはやはりドン引きしていたようです。

そんな時

「? ねえコンパ。あそこからなんか近づいてくるよ。ほら光ってる。」

そう言われてネプテューヌが指差した方向を見るコンパ。

「ほんとですう!?! 何かが物凄い勢いで近づいて来ます。キヤー凄

「い光ってます!?!」

その光は物凄い勢いでネプテューヌとコンパ達のところに近づいてくる。

「ま、まさか宇宙人!?! 私たち食べられちゃうの!?! スパッツ助けて!?!」

なぜかスパッツに助けを求めるネプテューヌ。

「そんなの嫌です。食べるならねぶねぶにしてください。ねぶねぶは男物のスパッツはいて喜ぶような変態さんですから。」

泣き叫ぶコンパ。何気にキツイ。

そんなことはお構いなしに光はネプテューヌ達の目の前まで来て停止する。

「まぶしいー!?!」

光の光量は凄まじく容赦なくネプテューヌとコンパの目を焼き切るかのようだ。

「ギャー目がー!?!」

某大佐も驚く位の絶叫である。

その時……………。

「何よ失礼ね。ひとの顔を見た瞬間悲鳴をあげるなんて。」

謎の光が言葉を発した。

だが……………。

「「キヤー!？」」

二人はあまりの眩しさに声を聞き取れていなかった。

「ああ、LED消してなかったっけ。ごめんなさい今消すから。」

光が消えるそしてそこに現れたのは……………。

「うわっ、なんか変な女の子が現れたよコンパー!!」

「ねぶねぶいきなり何言って……変な人がいますぅ。」

身体全体を隠すようなコートを羽織った少女アイエフだった。ただその恰好がおかしかった。なぜか服装が全て銀色で統一されていた。そこはまだ良い。更に彼女をおかしくしているのは身体全体に付いているLEDライトであった。

そんなLEDアイエフが二人に話しかける。

「ここは貴方達みたいなふざけた娘がくる場所じゃないわ。すぐに帰りなさい。」

アナタにだけは言われたくはない。そう思うコンパとネプテユース。

ネプテユースとコンパ、アイエフに事情説明中。

「四つの大陸にある鍵の欠片というアイテムを集めてイースンなる人物を救うね。……………いいわ、わたしも手伝ってあげる。」

「「いえ、結構です。」」

二人の意見がまた一致する

「さてとついたわねラスティション。」

結局二人についてきたLEDアイエフ。

「私がしっかりしなきゃですしっかりしなきゃです。」

がんばれコンパ。負けるなコンパ！

「ねえアイちゃん。なんでアイちゃんは身体にライトをいっぱい付けてるの？」

みんなの疑問を代弁するネプテューヌ。

「ああ、これ？」

そう言いながらまたもやLEDをつけるアイエフ。

「「つけなくていいから（です）ー！！！」」

やっぱりLEDは眩しかった。

「ごめんごめん。これはね私の憧れの人に近づく為なのよ。」

「その人もライト付けてたんですか？」

コンパの問いに苦笑しつつ首をふるアイエフ。

「違うわ。その人はね輝いてたのとても綺麗に。とても強く、とても優しくね。私はあの人みたいに輝きたい。そう思ってこのLED

を付けてみたんだけどまだまだみたいね。」

いや、もう十分輝いてるよ。ネプテューヌとコンパはまたもや意見が一致する。

「ねえコンパ今日の宿を探しに行こう。」

「そうですね。暗くなる前に探しておきましょうか。」

そして話しを続けるアイエフを置いて走り出す二人。

「私とあの人の出会いは、ってどこにいくのよあんた達こらー待ちなさい!!」

走り出した二人に気づき追いかけるアイエフ。LEDの重装備にもかかわらず凄いスピードである。

「コンパもっと早く走って!!」

「む、無茶言わないでほしいです。」

二人とも全力で走っているにもかかわらずじわじわとアイエフに距離を詰められる。

「逃げるなあー!!これでもくらいなさい。LEDフラッシュ!!」

「「ギャー!!」」

LEDの圧倒的な光量に悶絶する二人……………いやその他大勢。

「あ、やばっ!?!これって街中じゃご法度だった。」

この事はラスティションの七不思議のひとつとして語り継がれるのであった。

ノワールside

ところ変わってラステーションの協会。ここにはネプテューヌと同様にユウによって落とされた妹の一人ノワールがいた。

「謎の発光事件？」

「はい、原因はまだ分かっておらず現在調査中です。」

今ノワールは協会の教員から定時報告をうけていた。

「わかったわ。調査が終わり次第報告をちょうだいね。」

そう言ってノワールは立ち上がる。

「どちらに？」

「部屋に戻るわ。何か急ぎの様以外は呼びたさないでちょうだい。」

「わかりました。」

ノワールは部屋に戻る。

「ふう。この部屋は落ち着くわね。まるでお兄様に包まれているみたい。」

ノワールはベッドに横になり部屋を渡す。その部屋はまるで異質だった。壁一面にユウの写真がところ狭しと張り巡らされている。

「お兄様。」

つぶやきと共にノワールは抱き枕を抱きしめる。その抱き枕にはユウが印刷されている。裏には女神化したユウが印刷されているという丁寧さ。抱きしめるのに満足したのかベッドから立ち上がりまるで恋する乙女のような表情で部屋を見渡す。

だがとある写真が目にとまった瞬間ノワールの顔から表情が消える。その写真にはノワールの大好きなお兄様とノワール自身、そしてネプテューヌが写っていた。

「ネプテューヌ貴女のせいでお兄様と離れなれに！！」

ノワールは自分の武器であるレイピアを壁の写真に向かって投げつける。レイピアは写真のネプテューヌを見事に突き刺していた。

「はあはあ。まあ、いいわ。いずれ他の娘達ともケリをつける。ネプテューヌともその時に……………」

呼吸を落ち着かせた後ノワールは依頼クエストの一覧に目を通す。

「こういう時は気分転換にクエストでも受けるとしようかしら。」

しばらく一覧に目を通すノワール。

「これなんか良いかしら？」

ノワールの目にとまったのはダンジョンに迷いこんだ子供の救出。

偶然いやもしかしたらイストワールの仕業かもしれないがちょうどその時……………。

「ねえねえコンパ、アイちゃんこれなんて良くない？迷子の子供の救出だつて。」

ネプテューヌ達もそのクエストを選んでいた。

新たな仲間LEDそして黒き妹。（後書き）

トマト畑「一応次回までネプテューヌ視点の予定です。」

ユウ「俺の出番がない……………」

トマト畑「次回のが終わればユウ視点だからね。」

ユウ「がんばります。」

黒との対決 LEDの光（前書き）

LED無双！！女神二人がついに対決します。書き終わった後見直して見て思いました。

ひとつ、なんてカオス

ふたつ、雑。

そしてみつつ、短い。

黒との対決　LEDの光

ノワール side

クエストは比較的簡単にすんだ。女の子をモンスターから助け出して親のもとへと届けた。それで終わりのはずだった。助け出した女の子とその兄の心配し、慰め、喜び合う。その一連の行動を見た時自分の兄である愛しいあの人のことを思い出した。

「……………お兄様。」

少女を家族に預けた後先ほどのダンジョンに戻って来ていた。

「くっ、あれもこれも全てネプテューヌのせいよ！！本当だったら今ごろ天界でお兄様とコスプレ三昧だったのに！！」

ふとノワールの手がいや、身体全体が震えだす。

「まずっ！？こんなところで禁断症状が！？」

ノワールは懷に手を入れるとハンドタオルを取り出し、なぜか匂いを嗅ぎ始めた。

「スーハー、スーハー。」

禁断症状よく聞くのは麻薬、お酒なんかが有名であるがノワールは兄であるユウの禁断症状。定期的に兄であるユウより愛を補給しないと危険な状況に陥るのである。

「今は何とかコレクションのお兄様の下着やタオルなんかで持ちこたえているけどこのままじゃあ危ないわね。ああもうこれも全部ネプテューヌのせいよ!」

手近にあった岩を剣で叩き割る。

ドゴン。そんな音と共に岩は砕ける。そんな時だった……………。

ピカー!!

「「ギヤー!?!」」

謎の発光現象がダンジョン内で発生した。それと共に人の悲鳴が聞こえた。

ノワールの頭のなかで教員より報告があった発光事件が思い出される。

「新種の魔物っていう線もあるわね。それにさっきの悲鳴きになるわね。行ってみるしかないわね。たしか光ってた場所があっただったわね。」

ノワール移動中……………。

「確かここら辺だったわね。ってまぶしい!?!」

またもや起こる発光現象。

「イヤー!!アイちゃん待って、目がつぶれてしまっわ!」

「アイちゃんLEDはしばらく使用禁止って言ったばかりですう!?!」

「あれって街の中だけじゃないの？」

誰かの話し声が聞こえる。っていうかこの迷惑きわまりない光は人が起こしているものなの！？信じられないわ。ちよつと注意しなきゃ気がすまないわ。

「ちよつと貴女達いくらダンジョンだからって人の迷惑も考えなさい。」

私は光を発している三人に注意する。

「ごめんなさいです。すぐに止めるので待ってくださいですー！」

「アイちゃん早くLEDを止めて！！周りの迷惑よ！！」

「仕方ないわねえ。」

光が収まる。

「ごめんなさい。」

私の前には丁寧に頭を下げる女の子とネプテューヌ。そして発光現象のおおもとである目がチカチカしそうな恰好の可笑しな少女。ん？ネプテューヌ！？

「ネプテューヌ又貴女なんでここに！？」

するとネプテューヌは不思議そうに首を傾げる。

「私たちって知り合いだったかしら？」

その言葉に私は怒りを覚える。

「ふざけないで忘れたなんて言わせないわ！！貴女のせいで私は愛しのあの人と引き離されたんだから！！」

この時三人に電流が走る。

「ねぶねぶなんて酷い事を！？ねぶねぶはただの変態さんただけじゃなくて悪人さんだったですねー！！」

「昼メロ的展開ね。ねぶ子あんたの立場は悪女ね！！」

「ちょ、ちょっと待ってコンパ、アイちゃん少しぐらい彼女の言葉を疑いなさい！！」

私の言葉に仲間割れしだす三人。団結力皆無である。

「ねぶねぶならあり得るです！！」

「あんた何か人の運命とか簡単に操れそうだもんね。」

俄然団結力を失っていくパーティー。

「コンパ私を信じて！！後アイちゃんはもう黙っていて。」

あんた達本当にパーティーなの？

必死に二人を説得するネプテューヌ。

それを見ながら私は小さく呟く。

「貴女が私の愛しいあの人のスパッツを奪ったからこんなことに……。」

小声で言ったはずなのに何故か、かなりの反応するネプテューヌ。

「私の事なんてどうでもいいわ。それより貴女スパッツのことを知っているの!？」

「ねぶねぶ自分の罪と向き合ってくださいです。スパッツに逃げないでください。」

「光が足りないわ……………。こんな事ではあの人には近づけないわ……………」

あの銀色またライト付けそうよ。だがそんなことは気にしないでネプテューヌは剣を目の前に突き出して構えをとる。

「答えなさい!!このスパッツの事何を知っているの!!」
真剣な雰囲気なのだが……………。

そんななか私は先ほどからの疑問をネプテューヌにぶつける。

「疑問を疑問で返す様で悪いけど、そういえば貴女プロセスサユニットがレオタードタイプからあの人と同じスパッツタイプに変わっているけど。まさか履いたの!？」

「ええ。」

さも当然の様に胸をはって頷くネプテューヌ。
なんて……………なんて羨ましい!!

「肌触りは!!」

「最高よ!!」

「匂いは!!」

」

「嗅いだわ!! 良い匂いよ!!」

「サイズは!!」

「ジャストフィットよ!!」

もはや語ることはいわね……………。

「行くわよネプテューヌ!! 貴女を倒してスパッツは頂くわ!!」

「かかって来なさい。だけど私は負けないわ!!」

そして私たちは斬り結ぶ。

「「スパッツー!!」」

その時コンパ、アイエフは……………。

「また変態さんが増えたです」。

「やっぱり髪も銀色に染めるべきかしら。」

かたや絶望。かたや意味不明であった。

そんななか二人の闘いは決着を見せようとしていた。ネプテューヌの疲労が半端ないのである。主にLEDのせい……………。

「どうしたのネプテューヌ動きがダンチよ!!」

「くっ、このままじゃ確実に負ける!？」

苦々しい顔をするネプテューヌ。

「大人しくスパッツを渡せば見逃してあげるけど？」

「っ!？誰が!!」

剣でノワールを薙ぎ払おうとするがバックステップで避けられる。

「ねぶねぶ年貢の納めどきですうー!!」

「コンパ!？私達パーティーよね!？助けてちょうだい!？」

まさかの裏切りのコンパ。

それを見てたいそう笑うノワール。

「ついにはパーティーにすら見捨てられるなんてね不様ねネプテューヌ!!」

「くっ!？」

コンパにすら見捨てられたネプテューヌだが……………。

「やっぱりカラーコンタクトにするべきかしら、ん？何よねぶ子ピョンチじゃない。ここは私に任せなさい。」

「『『え？』』」

思考の渦に入っていたアイエフは今までの流れを知るわけもない。
故に……………」

「LEDエネルギーチャージー！」

身体中のLEDに光が溜まりエネルギーが収束する。

「エネルギーチャージ80%！！よし行くわよー！！」

爆発的な量の光がLEDに充填される。

「カウント開始！！0、発射ー！！」

「『『それカウントの意味がギャー！？』』」

その瞬間爆発的な光がダンジョン内に放たれる。
そこで何があつたのかを知るものはいない。ただ……………」

「女神が負けるなんて……………」

「回復アイテムキボンヌ……………」

「こんなの嫌です」

誰かの戦闘不能の声と……………」

「やった♪レベルが上がった」

レベルアップの音が聞こえたそう。

ユウ side

「ラステーションで謎の高エネルギー反応!？」

「今至急調べています。」

「ノワール何もなければいいが……………」

（私としては消滅してくれることを祈ります。）

LEDの光は天界でも観測されていたそう。

黒との対決 LEDの光（後書き）

何となくつくってみたレベル表。

ユウ レベル999

ある意味振りきっています。

イストワール レベル99

ただし戦闘には参加出来ない。

ネプテューヌ レベル25

ノワール レベル30

コンパ レベル22

アイエフ レベル74（LEDをところ構わず発光させる為）

優しさの緑 ギルドSSH登場（前書き）

・注意事項

小説内で出てくるMMBマークIIとはマルチプルメがビームランチャーマークIIの略称です。

今回は新キャラが二人です。 いったいだれがでるんです？

後この小説はやっぱりカオスなのです。

後今回はスパッツ視点ではないです。
ではどうぞです。

優しさの緑 ギルドSSH登場

ユウside

今俺の状況を一言で言うならば寒い。

現在俺はルウィーにて絶賛遭難中。今回はこっそりルウィーを視察だけしてすぐに帰るつもりだったのだが雪山の魅力に負けてしまった。結果スノーマンを68体もつくってしまった。

後にこのスノーマンがルウィー七不思議 になることをユウは知らない。

「しかしながら一面見渡す限り真っ白今日の夜はお鍋に決定します。

」

転移魔法使う気力も魔力もないや。

「さてとどうしたものか？かまくらでも作るかな。」

そんな事を考えていると……………。

『キヤー！？』

何処からともなく女性の悲鳴が聞こえてきた。

「かまくらは後まわしかな。」

俺は悲鳴が聞こえてきた方向に走り出す。

ユウ移動中……………。

「ここら辺かな？おっとこれはまたいつぱいいるな一気に決めるかな。」

女神化して一気に大量のモンスターを倒そうとするが魔物に囲まれている金髪の少女を発見する。

「下手に大技使えば彼女を巻き添えにしてしまう。まずは彼女を救うのが先決かな。」

俺は菊唄紋字と零刹那を鞘から引き抜き走り出す。

「はあああああ！！」

モンスターに視認出来ないスピードで走り出す。そしてすれ違い様にモンスターを連続で斬りつける。一気に金髪の少女のもとに辿り着く。少女はいきなり現れた俺に驚く。まあ、当たり前か。

「大丈夫？立てますか？」

彼女に手をかし、立ち上がらせる。

「は、はい。ってあなたはまさか！？」

何故か少女は俺を見て何故かまたもや驚く。

「ん？ってまだこれ程の数のモンスターが！？君絶対俺の後ろから出ないでね！」

モンスターの数が更に増加する。致し方ない。女神化するしかないか。

「変身!!」

『SETUP』

俺の身体にプロセッサユニットが装着され女神シルバーハートへと姿を変える。

「プロセッサユニット装着完了!女神シルバーハート爆誕!!」

決めゼリフを言って腰に装着しているプロセッサユニットからMMBマークIIを取り出し連射する。

「ああ、やっぱりシルバーハート様……。生で変身シーンを見れるなんて。」

ん?俺の事を知っているのか?って今は目の前の敵に集中しなくては。MMBマークIIを連射し続ける。

「射つべし、射つべし!!」

だがいくら射つても全然敵は減らない。

「くっ!!?何処から沸いてくるんだ子のままではじり貧だな。仕方ないあれ行ってみますか。」

「あれ?」

少女にも聞こえていたみたいである。

「君、俺今から少しおかしい事になるけどびっくりしないだね。」

「えっと……。は、はい。」

少女の返答を聞くと俺はMMBマークIIの連射をとめる。

「さてと行ってみますか!!変身!!」

俺の掛け声と共にプロセスサユニットが解除されていく。残ったのは足の部分とスパッツスーツのみ。だがそれだけで終わりではなく残ったプロセスサユニットの色が緑色に変わって行く。そしてまゝには瞳の色まで緑へと変わる。

「うおおおおおおお!!」

俺は咆哮をあげる。

「優しさの緑、シルバーハート・グリーンモード。」

「凄く新しい変身グリーンモード!」

以前の怒りの赤と同様に感情の変化によってプロセスサユニットが変化する。

この優しさの緑はスピードに特化したタイプである。だがそれだけではないこの姿の真骨頂は……………。

「行くぞ!」

「えっ、うそ!?シルバーハート様がいつぱい!」

そう質量を持った分身を作り出すこと。一人で大多数を相手にする際なんかにしようする。説明もそこに俺は全てのモンスターを全滅させる。

「……一人ぐらいほしいなあ。」

そんな少女の独り言はさておき、俺は分身を消して女神化を解く。

フウ。と溜め息をつき金髪の少女に話しかける。

「大丈夫？怪我はない？」

「は、はい！シルバーハート様のおかげで傷ひとつありません。」

元気な娘だなあ。

「ところで悪いんだけど……………」

「はい、なんででしょうか？」

「街中までの道を教えてほしいんだけど大丈夫？」

「……………えっ？」

ユウと少女移動中。

金髪の少女名前をフィナンシェと言うそうなのだが、フィナンシェの道案内のおかげでルウィーの街に帰って来る事ができた。

「いや、本当にありがとうフィナンシェ一時はかまくらで一夜を過ごすところだったよ。」

「い、いえ礼には及びません。こちらは命を助けてもらっただけですから。」

「本当にありがとうフィナンシェでは俺は行くよ。あまりこの大陸にとどまっていると甘えん坊の妹に気づかれるから。」

俺は踵を返して帰ろうするだが……………。

「待ってください!!」

フィナンシェに腕を掴まれ引き留められる。

「ん?どうかした?」

「あの一緒に来てほしいところがあるんです。」

来てほしいところ? なにやらフィナンシェも真面目な顔をして真剣である。

「何処にいけばいいの?」

「よ、よろしいんですか!?」

一気にフィナンシェの顔が笑顔になる。

「構わないよ。可愛い女の子の頼みならね。」

などとおちゃらけて見る。

フィナンシェは顔を赤くしながらも俺に行ってほしい場所を言う。

「ルウィーに存在するギルドと一緒に来てほしいんです。」

・ギルド

その大陸に生まれながらもその大陸の女神様を信仰せず別大陸の女神様を信仰する人々が集まった集団それがギルド。このルウィー

「にはそのギルドの拠点があると言われていたがまさかそのギルドに実際に来る事になるとはな。

ギルドは地下にあり、いまはそのギルドの拠点の扉の前にフィナンシエと一緒に立っていた。

「ここからギルドの内部へと入れます。まあただの扉なんですけどね。ちょっと待ってくださいね。」

フィナンシエは扉にノックを二回する。すると……………。

「合言葉を言うのです。」

中から声が聞こえてきた。合言葉？

「シルバーハート様は最高です！！」

「よろしいですの。入っていいですの。」

何その合言葉！？

俺はひきつつた笑みを浮かべる。

「ちょっと待っていてください。」

フィナンシエは扉の中に入ると中にいる誰かと話す。

「フィナンシエ今日は定時報告の日じゃないですの。」

「ええ、ですけど素敵な方をここに招待したの。きっと貴女も気に入ってくれると思うわ。」

「いったい誰を連れて来たのです？」

「今呼びますからちよつと待ってください。どうぞお入りください。」

「フィナンシェより呼びがかかる。」

「わかつた、入るよ。」

俺はギルド内部へと入る。中を見ると啞然とした。まるでギルド内部はロボットなんかを開発している様な秘密基地だった。ギルドにこのような設備があるとはね……………。

等と考えているとガチャンという何かが落ちる音が聞こえ何かが足元に転がって来る。

「これは薬草？」

転がって来たすり鉢の中身には薬草を練っている途中のものだった。転がって来た方を見るとにつこりと良い笑顔のフィナンシェ。そして目に涙を溜めた特徴的な帽子を被った少女ガストがいた。

「グスン、今まで何処にいたのです。ガストは貴方に会いたくて会いたくて仕方がなかつたのです。」

「久しぶりだねガスト。」

「答えになってないですの。うぐつ。」

俺は今にも泣いてしまいそうなガストを優しく抱きしめる。

「うぐつ、また会えて、嬉しいですのシルバーハート様。うつつ、
うわあああああああん。」

「俺も会えて嬉しいよガスト。」

「へえ。ガストさんはシルバーハート様と一緒に旅をしていたんですか。」

「そうです。シルバーハート様はガストがついていないと危なかしくて大変でしたの。」

ガストとはフィナンシェ同様にモンスターから助け出したことがきっかけで知り合った。旅をしていたといっても二、三日だけであるが……。怪我をしていた為に近場にあつた薬草を調査して手当てをした。回復魔法をかけたらよかったのでは？と思うかもしれないがその時は薬草なんかを調査するのがマイブームだったもので……。その調査を見ていたガストに何故か『弟子にするのです。』と押しきられ一緒に旅をしていた。

膝の上に座っているガストの頭を撫でつつフィナンシェに質問する。

「ところでこのギルドは君たち二人だけなの？」

「いえ、本当は10人いるのですがみんなそれぞれの任務についているんです。」

「10人だけ？」

「その他の大陸にも支部があつて合計すると1000人近いかと。」

「1000人!？」

「ここは幹部会員N0・10までのみ人しかいないんですの。」
「会員?」

「フィナンシエ説明してないんですの?」

「ごめんなさい。忘れてました。」

おほん、と咳払いをしてフィナンシエは語りだす。それは耳を疑う話だった。

「このギルドの名前はSSH。正式名称は『シルバーハート様は私の嫁』というんです。」

「嘘だと言ってくれ。」

俺は頭を抱える。

「名前の通りシルバーハート様を愛し信仰するギルドです。因みに私ことフィナンシエは会員N0・8です。」

「ガストは会員N0・4ですの。」

フィナンシエが思い出したかのようにガストに尋ねる。

「ガストさんそういえば他の方々はいないんですか?いつもなら2、3人はいるはずですけど。」

ガストは首を捻ると……………。

「ガストにもあの変な人達の事は分からないわですの。会員N0・1はきつとそこら辺で歌っているんですの。」

「会員N o . 2のあの人はきつとまたどこかで光って迷惑をかけているんじゃないかな。」

「あのピカピカ女はいない方が良いでしょう。会員N o . 3はきつとまた人助けでもしているんです。」

「会員N o . 5は嫁、嫁言って布教活動でしょうか？」

「いったいこのギルドはなんなんだ!？」

しばらくフィナンシェとガストにギルドの事を聞いた(目眩がした後ギルドを後にして天界に戻った。ガストに泣きつかれたがまた来るといつておいた。逐一見に来ないとこのギルドは恐ろしい。

天界に戻るとイストワールがカードらしきものを見せて来たため見るとそこには……………。

『SSH会員N o . 6イストワール』

と書かれていた。何それ怖い。

優しさの緑 ギルドSSH登場（後書き）

またもや意味不明につくつてみたSSH会員表

会員No・1 不明

会員No・2 不明

会員No・3 不明

会員No・4 弟子のガスト

会員No・5 不明

会員No・6 デレデレイストワール

会員No・7 不明

会員No・8 まさかのフィナンシェ

会員No・9 不明

会員No・10 不明

プロトタイプとSSHの暗躍（前書き）

ここだけの話し最初ネプテューヌをプレイしたときシアンを男の子だと思っていた。ちなみに今回は短いです。ユウ視点です。

プロトタイプとSSHの暗躍

ユウside

俺は今ラステーションに謎の巨大エネルギーの調査できている。だが特に成果もなくて天界に戻ろうと思ったのだがお腹が空いたためとある食堂にお邪魔しているところである。

少し古風な感じのする食堂、その扉を開けて中に入る。

「シアンご飯食べに来たよ。」

声をかけると一人の少女が出てくる。

「シルバーハート様いつラステーションに来ていたんだよ？事前に連絡できれば迎えに行っただのに。」

そう言っただ俺を見てくる赤毛の少女はシアン。以前まだノワールにラステーションの管理を任せてまもない頃に知り合った。以前このラステーションではアヴニールと言う大会社が産業の大幅を担っていた。だがアヴニールの社長であるサンジュは人間など信用出来ない、機械こそが一番など考える人間であつた。だがまだそれだけなら良いのだがこともあるうか展示会の準備をしていたシアンを妨害しよとしてきたのだ。それを見かねた俺が身分を隠してシアンに協力して見事シアンを勝利に導いた。簡単に言えばこんなところである。後々ばれてノワールには説教をされ、シアンには驚かれた。

「ごめん、ごめん。今日はちょっとした野暮用で近くまで来てたんだ。ここにはお腹が空いたから来たわけ。」

それを聞くとシアンは溜め息をつく。

「……………それでいつもので良いのか？」

「うんうん。鯖の味噌煮定食大盛りひとつね。」

「はいはい。」

そう軽く言うシアンの顔はどことなく嬉しそうだった。

「はい。おまちとおさま。」

ユウの前に鯖の味噌煮定食が出される。

「いただきます。」

そう言っユウは食べ始める。

ユウ食事中……………。

食事も終わりお茶で一息つくユウ。

そこにシアンが話しかける。

「で今日の本当の目的は？」

お茶を飲みきりシアンの問いに答えるユウ。

「本当にサバ味噌食べに来ただけだな。」

ジト目でユウを見るシアン。

「ごめん、ごめん。だからそんな目で見ないでよ。シアンに頼んだ例のあれどうなってるのかと思ってね。」

その返答にシアンはやっぱりかという顔をする。

「一応プロトタイプは完成した。実践は可能だ。」

「さすがシアンだな。」

そのユウの言葉に顔を赤くするシアン

「……………馬鹿。でも本当に良かったのか俺にプロセッサユニットの情報を教えて。あれって女神の力の元になっているんだろ。」

「シアンだからこそだよ。一緒にがんばって来た仲だしシアンの事は信頼できるしな。」

更に顔を赤くしそっぽを向くシアン。

「ほらっ！！お前に言われ通りに作成した第二世代プロセッサユニットのプロトタイプだ。」

シアンはテーブルの上にベルト状の試作型プロセッサユニットを置く。

「デザインまで完璧に再現してあるな。早く試してみたいな。」

そう実はシアンにプロセッサユニットの作成を手伝ってもらっていたのだ。

「完成には後は実践データが必要だ。ここからはシルバーハート様の仕事だ。」

「ああ、任せてくれ。」

俺は試作型プロセッサユニットを手取る。

「さてと、プロセッサユニット渡したし、そろそろ仕事に戻るよ。」

そう言つて奥に入つて行くシアン。だがそのシアンの服のポケットからカード状の何かが落ちる。それをユウが拾いシアンに渡そうとするが、それに何故か見覚えがありついそれを見る。

それは

「SSH会員No.9シアン……………。シアンがあのギルドに!？」

俺のカードを読み上げた声にシアンはビクツと身体を震わせるといきなりユウに飛び掛かる。

「見るなー!!返せー!!」

「わ、わかった!?!わかったから首締めないで。」

シアンはユウから会員カードを取り返すとそのままユウを店の外に蹴りだす。

「でてけー!!乙女の純情をもてあそぶなー!!」

ボタン!!そんな音をたてて扉が閉められる。

「いったい俺が何をした!？」

鈍感なユウであった。

シアン side

「まさかあのギルドに入っている事がばれるとはな。あーめちやくちや恥ずかしい!？」

シアンはひとり悶えているとポケットから音楽が流れだす。

「ん?ガストからか。はいもしもし。」

シアンはポケットから銀色の携帯電話を取り出し電話にでる。

『ガストですの。シアン例のものはどうなっているのですの?』

その言葉に今までの事がなかったかの如く真面目な顔をするシアン。

「ああ、完璧だ。今日シルバーハート様に渡した試作型プロセッサユニットにちゃんと仕込んでおいた。……………隠しカメラを。」

『そう計画通りなのですの。今から興奮してきたですの。』

「『これでシルバーハート様のあられもない姿を隠し撮り(ですの)』。』」

ギルドSSHそれは犯罪だ。

そしてそれを知らないユウは

「やばいベルトって何かいいな。一日中付けていようかな。お風呂の時も付けたら駄目だろうか?」

危険な状態であつた。

プロトタイプとSSHの暗躍（後書き）

次回はお待ちかねスパッツ視点のラスティション編の終わりですよ。

まあ、こんな作品誰も期待してはいないかもしれませんが。

絶望のコンパ 痴漢容疑者の黒（前書き）

すいません。報告が遅れましたが以前投稿したのは間違いで 今回投稿したのがスパッツ視点の続きです。本当に申し訳ありませんでした。ではお楽しみ下さい。

絶望のコンパ 痴漢容疑者の黒

ネプテューヌside

現在ネプテューヌ一行は協会にいた。無論ノワールも一緒にいる。

「で、ネプテューヌあんた何しに人の大陸に来たの？まさかスパッツを自慢しに来わけじゃないでしょうね。」

ノワールは椅子に座りながらテーブルに突っ伏しながらネプテューヌに問う。

「いくら私でもそれはないよ。じつはね……………」

ネプテューヌ事情説明中。

「いーすん？聞いたことないわね。それにしても……………記憶喪失ねえ。ある意味ライバルが減ったと言うところかしら。」

「ん？どうしたの女神様ニヤニヤして？」

「っ！？なんでもないわよ！？」

ネプテューヌに指摘されて慌てるノワール。

「ブラックハート様は鍵の欠片なるアイテムに覚えはないですか？」

コンパが問う。

「残念だけどないわね。」

「そうですね、だったら強いモンスターがいるダンジョンを教えてくださいませんか？」

「それこそ山の様にあるわよ。ひとつひとつ回ってたら途方もない時間がかかるわ。」

「そうですね……………」

落ち込むコンパ。

「だったらさあやっぱり一個ずつ回って行くしかないよ。」
ネプテューヌが発言する。

「そうですね。この旅いつになったら終わるんですか……………」

溜め息をつくコンパ。

そこにノワールが声をかけようとするが……………。

「まあ、がんばりなさ、うっ……………!？」

急に顔を青くして痙攣しだした。どうやら禁断症状のようだ。だがそんなことを知らないコンパとネプテューヌは……………。

「ブラックハート様どうしたですか!？」

「えっ、何!?大丈夫、女神様？」

「な、なんでもないわ……。私は部屋に……。戻る……。から。こんな時に限って……。タオルが……。くつ。」

そう言っただけでふらつきながら部屋に帰ろうとするノワール。戦闘の時にタオルを無くしてしまったようだ。

「だ、駄目ですよ！ちゃんと病院にかからないと。」

「む……。無駄よ。治らないわ……。どんな……。医者でもね。」

その言葉にはつとめるコンパとネプテューヌ。

「……。まさか、不治の病にかかっているのですか！？」

「そ、そんな不治の病だなんて女神様まだ恋してない友達もいない灰色の青春しか送っていないのに……。」「

『何故ネプテューヌがそんなことわかるのよ。あなた記憶喪失なんでしょう。』とツツコミすることも、動くことすらまもなくなくなってきたノワールは必死に禁断症状を押さえられるものを探す。

（何か、何かないのお兄様の匂いがあるものは……。っ！？あったじゃないのスパッツよ。ネプテューヌが履いているスパッツよ。あれさえあればよし！！）

残る力を振り絞ってノワールが立ち上がる。

「うわあよみがえったー！？」

ノワールはまだ死んじやいないぞネプテューヌ。

「ブラックハート様何か言ってるです？」

「……ッツよ」

「「？」」

「たりないのよー！！スパッツよー！！」

ネプテューヌに飛びかかりスカートの中のスパッツの匂いを嗅ぐ。

「ぶはあー！！生き返ったわあ。さすがスパツ」「キヤー！？」「えっ！？」

「変態が変態さんがいるですよー！！」

「痴漢だ！痴漢されたー！！」

ノワールからすればお兄様分の補給かもしれない。だが端からみればただの痴漢行為である。

「待ってちがうのコレは！？」

パシャリ。

そんなカメラのきられる様な音がする。その音が聞こえた方に三人が振り向く。そこには銀色の携帯電話を構えた今まで姿が見えなかったアイエフがいた。何故かLEDライトを増設した姿で。

「いやいや良いもの撮れたわね。これでブラックハート様の信仰はがた落ちね。」

顔を先ほどとは別の意味で真っ青にするノワール。三人から白い目で見られる。

「待つて誤解よ！？何よその目は、いやそんな目で私を見ないでイヤー！！」

そんなノワールの肩にネプテューヌの手が置かれる。

「ネプテューヌ？」

「女神様分かってるよ、女神様はただこのスパッツが欲しかったんだよね？」

「……………そうよ。」

「でもね。他の人たちがあの写真を見たらどんな顔をするんだろうね。」

ノワールの顔が真っ青になる。

「もしあの写真をばらまかれなくなったら鍵の欠片探しに協力して。」

ちよつと黒いよネプテューヌ。

「もう好きにして。」

膝をつき絶望するノワール。

常識人のコンパならこの行為を止めようとするはずなのだが姿が見当たらない。

よくよく見ると部屋の隅でアイエフと話している。

「アイちゃん何でLEDライト増えてるんですか？」

「だってコンパがお金くれたじゃない。それで買ったのよ。いやゝ。なかなか良いものがあつたはラステイション。プラネテューヌとはまた違った良さだわ。」

その言葉に顔を真つ青にするコンパ。

「アイちゃん何てことをあれは今日の宿屋に泊まる為のお金だったですよ！！私達今日野宿するしかないじゃないですか。」

「大丈夫よ。そんなの気合いと根性の大会体でなんとかなるわよ。」

「なるのはアイちゃんとねぶねぶぐらいですう。」

膝をつき絶望するコンパ。

そこに女神ブラックハートを引きずりながらネプテューヌが声をかける。

「二人とも鍵の欠片探しブラックハート様も協力してくれるって。」

「そうなの？さっすが女神様頼もしいわね。」

アイエフとネプテューヌはニコニコと笑い合っている。その反対ノワールとコンパはというと……………。

「お互いに苦勞するわね。」

「もうこんなの嫌です。」

「がんばりましょう。」

「……………はいです。」

なんか通じあっていた。

その後すぐさまダンジョンにむかったネプテューヌ一行。すると偶然なのかはたまた作者のトマトの怠慢なのか鍵の欠片を持っているモンスターを発見した。

ネプテューヌが変身する前にノワールがもの凄く早いスピードでモンスターを切り裂き殴りとばし、アイエフがLEDライトを発射する前にコンパがいつもなら考えられないほどの機敏さでモンスターの懐に入り注射器による射撃を零距离で打ち込みまくる。モンスターは力つきても止まることもない攻撃にさらされる。ガードブレイクがもう何度おこったことやら。

そんな二人の姿を見てネプテューヌとアイエフは

「一体二人とも何があっただんだろうか？」

そう呟いていた。

いやお前達のせいだからね。

そうしてネプテューヌ一行はラステーションの鍵の欠片を手に入れた。ノワールは写真を消去して解放された。モンスターを倒した時にでたお金でコンパ達も無事に宿屋に泊まることができたのであった。

そして別れの朝。

ノワールは、

「お願いだからもうこないで。」と言って目に涙を浮かべていた。そんなノワールにコンパが声をかける。

「ブラックハート様私なんか後二つの鍵の欠片を見つけるまであの二人と一緒になんですよ。」

「まあ、がんばりなさい。もし何かあったらコンパさん貴女だけでもラステイション協会で保護するから。」

「ありがとうございます。」

二人の間には友情が生まれた。

「では行ってきます。」

「ええ、また来なさいコンパさんだけ。」

そしてネプテューヌ一行は旅立つ次なる大地、リーンボックスに。そしてそこには……………。

「素晴らしいですわ！！このお兄様の同人誌。買って正解でしたわ。やっぱりお兄様は女の子に無理矢理されるのが絵的に合っていますわ。」

スパッツネプテューヌと互角かそれ以上に危険な女神がいた。

絶望のコンパ 痴漢容疑者の黒（後書き）

この作品のノワールは兄であるユウの事を抜けば普通なんですよたぶん。

さて次回はユウ視点の試作型プロセッサユニットの初戦闘です。

際どい試作型 赤の布教活動（前書き）

今回は凄いくだくだしてます。覚悟して見てください。
今回の注意事項。

一つ、小説内でイストワール（大）と表記していますがそれはイストワールが人の大きさになっていると言うことです。

二つ、主人公が男の娘と言う事を忘れないでください。

そして三つ、今回は今までにまして酷すぎるかもしれないので不快感を与えたらすいません。

際どい試作型 赤の布教活動

ユウ s i d e

現在俺は天界にてイストワールに呼び出されたところである。

「何か用イストワール？」

「実は貴方に渡したいものがありまして。これを……………」

イストワール（大）が銀色の携帯電話らしきものを手渡してくる。
ひっくり返して見ると大きくSの印がついていた。

「これは？携帯電話？」

「それはSギアです。まあ、携帯電話みたいなものですよ。これが
取り扱い説明書です。」

イストワールから更にA4サイズの紙を渡される。

「なるほどね。おおインターネットまでできるのか。」

「では次にこの紙にサインとはんこをおしてください。」

俺はSギアをいじりながらサインをしようとする。

「って何故にサインとはんこ？」

俺はその用紙をしてみる。

「……………イストワールこれ婚姻届って書いてあるんだけど。」

イストワールはそっぽを向いて口笛をふく。ちゃんと吹けていないが。

「お前なあ……………ってうわぁ!？」

イストワールに注意しようとするやと突然Sギアが『ビービー』と音が鳴り出す。

「どうやら下界にてモンスターが出現したようです。場所はルウイー既にSSHの会員No.5が戦闘に入っているようです。」

イストワールが俺と同じSギアを取りだしてその画面を見て俺に告げる。

「なるほど危険なモンスターの出現場所まですらわかるとはかなり高性能だな。まあいい俺も行くか。」

シアンに頼んだ試作型プロセッサユニットも試してみたいしね。

「がんばってくださいね。それとこれを着て行ってくれませんか。」

イストワールから声援と謎の宝箱を受けとって俺はルウイーに向けて転移する。宝箱の中身はメイド服状のプロセッサユニットでどこかに投げすてた。いつの間にこんなものを？

「……………そう言えば会員No.5って誰なんだろう。」

ユウ転移中

「到着したけどこの惨状はなに。ん？何か落ちてる。」

到着した場所は以前フィナンシエを助けた場所なのだが、そこには大量のモンスターの死骸とSギアがひとつ落ちていた。

「これはSギア？いたい誰が……………」

そんな時に『ズドン』と何かの音がする。

「今のは？考えていても仕方ない。いつてみるか。」

ユウ移動中

そこではまたもや女の子がモンスターに囲まれて襲われ、いや襲っていた。

「ナニコレ。」

それはもうモンスターがかわいそうなぐらいに滅多打ちにされていた。そしてそれを行っていた人物は……………。

「REDちゃん!？」

その声に反応して振り向くREDちゃん。

「お？おおおー!!アタシの嫁のユウちゃん!!今そっちいくね
ー!!」

もの凄く早いスピードでこちらに駆け寄ってくるREDちゃん。その勢いで周りのモンスターが吹き飛ばされる。

「ユウちゃん会いたかったよー!!」

真正面から抱きついてくるREDちゃんを受け止める。

「うおっと!?!相変わらず元気だね。」

REDちゃんはそのまま俺の胸に顔をぐりぐりと押しつける。

「うんうん。アタシは元気だよ。でもユウちゃんに会えてもって元気になったよ。それにしても相変わらずユウちゃんは良い匂いがするな。アタシ発情してきたよ!!」

ハアハアと息を荒くするREDちゃんから俺は距離を取る。

「発情ってそこも相変わらずだね。」

REDちゃんは普段こそ普通の女の子？　なのだがすぐに発情して襲いかかってくるのがたまに傷。

「ユウちゃんお願い!!チューさせて。」

「ちょっと、無理かな?」

「じゃあ、キスさせて!!」

「それ意味一緒にだからね。」

「じゃあマウストゥマウス!!」

「知ってた?息をしてる人に人工呼吸したら危険だつて。」

「じゃあいいや!!もうやらせて!!」

「何を!?!」

「何をつてそれはセ……。」

「ダメそれ以上いったら危険だよいろんな意味で!!」

REDちゃんは頬を膨らませるとポンポン起こりだす。

「ユウちゃんは相変わらず我が侂だね。でもね。そんなところも大好きだよ!!」

何かこの娘疲れる。そう言えば……。

「REDちゃんこのSギアもしかしてREDちゃんのじゃない？」

俺が先ほど拾ったSギアをREDちゃんの前に差し出すとREDちゃんは目を真ん丸にして驚く。

「それはアタシのSギア!!ユウちゃんが見つ付けてくれたのか、ありがとうこれでユウちゃん大量の萌え萌え画像が救われたよ。モンスターに襲われた時に落としたみたいで。」

萌え萌え画像つて、もう気にしないでおこつかだって………モンスターが待ちくたびれているみたいだし。

「さてと、REDちゃんはおいというて試作型プロセッサユニットを試すしますか。」

俺はベルト状のプロセッサユニットを腰に装着する。

「おおユウちゃんが闘うのか!？」

REDちゃんが大げさに反応する。

「REDちゃんは俺が守るから下がっていて。」

俺がそう言つとREDちゃんは顔を赤くする。

「まさかのプロポーズ！？わかったよユウちゃん。式場の予約は任せておいて。アタシ、ウェディングドレスが着たいから洋風がいいな！！」

俺はいつたいどこを間違えた？しばらくREDちゃんを説得する。その間モンスターさん達には待っていてもらう。

気を取り直して……………。

「新たなプロセッサユニットの力見せてやる。変身！！」俺は腰に巻き付いているベルトのレバーを回す。

『キター！！』と言うどこかで聞いたことのある声の電子音声と共に俺の身体にプロセッサユニットが装着されて行く。

「プロセッサユニット装着完了女神シルバーハートモードアサルト降臨……………って何だこれはー！！」

俺は絶叫した。何故ならば……………。

「これちよつと露出が多すぎだろ！？それに何故にスカート！？」

普段のプロセッサユニットもかなりきわどいがこれはその領域を遥かに凌駕してしまっている。

スパッツスーツはいつもより少しばかり短い膝の上3cm。しかも何故かミニスカート。上着はノースリーブ、スカートはピンクそれ以外の色は銀色なのは変わらない。シアンは何がしたかったんだ。それよりも、もう一つ文句を言うべきところがある。無論さっきの電子音声についてである。

「イストワールだね？」

『……………！？』

「えっと、何やってるの？」

『チガイマス。ワタシハチヨウコウセイノウエーアイデス。』

もういったいどうすればいいんだろうか。ツツコミ所が多すぎるよ。

「ユウちゃん。」

そんな時REDちゃんが微笑みながら話しかけてくる。

「REDちゃんどうかした？」

「私もう我慢できぶへー！！」

身の危険を感じてREDちゃんをお星さまにした俺は悪くないはずだ。

「アタシはユウちゃんが大好きだー！！」

さよならREDちゃん……………。

『グオー！！！！』

ああ、あまりにもいろいろなことがありすぎてモンスターさん達のこと忘れていた。

「まあ、いいか。さあ闘いますか。」そう言って俺はベルトのレバーを回す。

『ドリルキター！！』

その電子音声と共に俺の右腕に大型ドリルが装備される。

「おおー！！ドリルは男の子ロマンだね。ではさっそく……」

俺の目の前に来ていた大型モンスターをドリルで貫くその結果……グロい。

「うつつ！？気を取り直してレバーを回してつと。」

『センチヤイ！？』

「……………？」

『……………センチヤキター！！』

噛んだんだね。

俺の足に戦車のキャタピラが装備される。

「意外に使いやすいなこれ。よつとー！」

キャタピラで一気にモンスターの中に入り蹴りあげる。

「これまたえげつない。さてと……………」

もう一度レバーを回す。

『ツインテールキターー!!』

何故か髪型がツインテールになる。それ以外の変化なし。

「何かの間違いだきつと、うんもう一度レバーを回してつと。」

『トドメキターー!!』

え？トドメ！？

俺の胸部に大型のバズーカが装備される。

「おおこれは分かりやすい。」

『カウントシマス。ゼロ、ハッシャ。』

なにっ！？カウントの意味がない！？あれこんなの前にもあったよ
うな？

『ドカーン』とそんな音と共にモンスターが消滅する。

「凄まじい威力だけど地面までえぐってるぞこれ。やばいな誰かが
来る前に逃げないと。」

俺はすぐさまプロセッサユニットを解除して天界に転移した。後に
ルウィーにできた大穴はやっぱり七不思議として数えられるようにな
ったとき。

場所は変わって天界。ユウはイストワールにSギアをREDちゃんが持っていたことについて聞きに行っていた。

「イストワールもしかしてREDちゃんもSSHなのか？」

「ソウデスヨ。カノジョハカイインナンバーゴデスヨ。」

「……………」

「ドウカシマシタカ？」

「イストワール電子音声のままだよ。」

そう言っただけはイストワールのもとを立ち去った。とりあえずがんばってイストワール。

その頃吹き飛ばされたREDちゃんは……………プラネテューヌにいた。しかも何故かネットカフェにいて布教活動を行っていた。何故にネットカフェかというと……………。

「よしよしあの際どい変身の動画を投稿。これでまたユウちゃんの人気がますぞ。」

彼女の行う布教活動とは某動画サイトにユウことシルバーハートの動画を投稿することである。

無論SSH公認である。他にもシルバーハート様フィギュアやマグカップ、うちわ等のグッズを売ったりもしている。だがユウ本人は知らない。

「おおー！！凄いまだ投稿して三十分もたっていないのにもう一万アクセスだよ！！これで私の嫁がさらに有名になるね。よしグッズ

売りに行くぞー!!」

彼女の布教活動はまだまだ続くのであった。

際どい試作型 赤の布教活動（後書き）

会員N O . 5はREDちゃんでした。彼女のキャラがなんかネプテューヌとかぶっている気がする。

それとあの試作型プロセスサユニットについては酷すぎるかもしれない。

名前は何にしよう？何か良い名前があったら教えてください。

メイドな紫 聖地リールボックス（前書き）

今回はやり過ぎました。ベールとリールボックスのファンの方は回れ右でお願いします。

メイドな紫 聖地リールボックス

ネプテューヌside

現在ネプテューヌ一行はリールボックスに繋がるダンジョンに来ていた。

「やっぱりこのモンスターもたいしたことないわね。もう出口よ。」

「ねぶねぶ油断大敵ですよ。前回の事を思い出してください。今回は……………」

コンパは黙って隣にいる危険人物を見る。

「そうだったわね。アイちゃんLEDライトは二度と使わないでってギヤー!？」

アイエフの方からネプテューヌの居る地点に向けて収束した光が集まる。その収束した光はネプテューヌの目を直撃した。

「ねぶねぶ!？アイちゃんLEDライトを止め……………あれっ？私そこまで眩しくないですよ。」

よくよく見ると光はアイエフのLEDライトからではなく掲げた右手から出ている。

「これはトレジャーサーチって言う私の能力なのダンジョンの隠れているレアな宝箱を見つけることができるの。」

「へえ」。アイちゃん宝箱は何処にあるんすか？

「ああ、ねぶ子の足元に「説明は良いからまずは止めて頂戴!!」
ああ、ごめん、ごめん。」

光がやみ膝をつくネプテューヌ。

「まさか本当にやられるなんて油断したわ、私の馬鹿!!まだ目を
開ける事が出来ないわ。良い子のみんなは光を人の目に当てちゃ駄
目よ。ああー!!!目が痛い!!!」

悶えるネプテューヌ。そんなネプテューヌをコンパは見なかったこ
とにして宝箱を探す。

「アイちゃん宝箱ないですよ。」

ネプテューヌのいたところを探すコンパだが見つけることができ
ない。

「ああ、ごめん。もう一回するわね、ってしばらくしないと使えな
いんだった。よし。LEDライト発光開始。」

「えっ?キヤー!?!」

その瞬間コンパは光に包まれた。

しばらくして光がやみそこにあつたのは悶えて地面をのたうち回っ
ているいるネプテューヌとふらつきながらも立っているコンパそし
て宝箱がひとつあった。

「もう私は負けないんです。負けたくないんです!!」

「何の話よ。あ、コンパ足元危ないわよ。」

ただでさえLEDライトのダメージを受けてフラフラなコンパは足元にある宝箱に気づかず足を取られて空中を一回転して転ぶと言う妙技を見せる。顔面を打ち付けたが大丈夫だろうか？

「大丈夫じゃないですう。」

仰向けに倒れているコンパに地面をのたうち回っているネプテューヌが近づくと見事に……。

『ごっん。』

互いのあたまが衝突する。

「「ギャー!!」」

「たくつ、何やってるのよ先がおもいやられるわね。」

その言葉に悶えていた二人が立ち上がる。

「「いい加減してー（ですうー）!!」」

それはそれはとても見事なツツコミだったそうだ。

それでは気を取り直して……………。

「宝箱これね。開けて見るわね。」

「何かお金に替えられるものだったらいんですけど。」

「案外モンスターがー！！ってことも。ねぶ子貴女のことは忘れな
いわ。」

現実的なコンパ、非道なアイエフ。

「こ、これは！？素晴らしいiiiiiiii！！！！」

宝箱を開けたネプテューヌから驚嘆の声が上がる。

「何が入ってたですか？」

「何モンスターの死骸でも入ってたの？」

「なんで私がモンスターの死骸で喜ぶのよ！？ちがうわこれよ。」

ネプテューヌが手にしていたのは……………。

「何故にメイド服！？」

そうメイド服だった。それも古風な超純情ロングスカートのメイド
服だ！！（一応プロセッサユニット扱い）

「しかも私専用装備よ！！これはさっそく……………。」

ネプテューヌを着替え中……………。

「自分の才能が恐ろしいわ。どんなものでも着こなしてしまうんだ
から。まあ、いいわ。さあリーンボックスに向かいましょう。」

ネプテューヌが淡々と語る。

「まつですねぶねぶ。その恰好で行くつもりですか!？」

「ええ、何か問題があるのかしら？」

「大問題ですよ。アイちゃんだけでも白い目で見られてるのにねぶねぶまでそんな恰好したら私達危ない集団として見られてしまいますよ!!」

「あらコンパ私の美しさに嫉妬？女の嫉妬ほど醜いものわないわよ。」

ネプテューヌクスクスと笑う。そのネプテューヌの態度にコンパは頬を膨らませるて怒る。

「もういいです!!ねぶねぶなんて補導されればいいんです!!」

すたすたと歩き出すコンパ。負けるなコンパ。がんばれコンパ。

そしてネプテューヌ一行はダンジョンを出てリーンボックスに向かう。

みなさんはリーンボックスの事をご存知だろうか？雄大なる緑の大地と呼ばれ中世ヨーロッパを彷彿とさせ、自然も多く四大陸のなかでも比較的過ごし易い大陸と言われ、シルバーハートが管理していた。その後その妹グリーンハートによって管理されていた。それが間違いの始まりだった。

リーンボックスは変わってしまった。中世ヨーロッパを彷彿とさせたお城は打ち壊されゲームショップ、同人誌販売店等が立てられた。

さらには住んでいた人も老後の生活をする老人や新婚生活を送る夫婦は激減し、アニメやゲームをこよなく愛する通称オタク達が激増した。自然が多く残されていることが唯一の救いである。

今のこの大陸は雄大なる緑の大地などではなく言うならば……………。

萌えとオタクの聖地リーンボックス

そう呼ばれていた。

そしてネプテューヌ一行はそのリーンボックスの大地に立っていた。

「わ、私が聞いていたリーンボックスとは全然違いますう。」

困惑のコンパ。それに答えるアイエフ。

「コンパが知っているリーンボックスはシルバーハート様が管理していた当時のものね。今のリーンボックスは女神グリーンハート様管理しているんだけど……………」

アイエフは周りを見渡し溜め息をつく。

「ここも変わってしまったわね。どうして私あんな女神様信仰してたんだろ。」

そんなアイエフを見てコンパは関わるとめんどくさいと思いつく。

「アイちゃん協会にいつてみませんか？」

「そうね……………そう言えばねぷ子は？」

辺りを見渡して見るとゲームショップの店頭でゲームをプレイして

いた。だが何やら様子がおかしいゲーム画面に向かって何やら叫んでいる。

アイエフとコンパが近づき、何を言っているのか確認して見る。

「どうして！！どうして分かってくれないのお兄様、私はこんなにも貴方を愛してるのに!？」

「ねぶねぶがおかしくなっただすうー。」

コンパが涙目で呟く。

「違うわ。これは今大陸中で大人気のゲーム『お兄様は男の娘』って言うゲームよ超高性能AI搭載で実際に中にお兄様と会話できるのよ。ねぶ子は今バッドエンド一直線ね。」

アイエフがコンパに説明している間にもネプテューヌ又はゲームを続けていく。

「いや、お兄様捨てないでそれだけは嫌なの！！なんでも言う事を聞くからお願い！！待ってお兄様何処に行くの、待って行かないで！！イヤー！！」

画面に浮かぶGAME OVERの文字そして絶望するネプテューヌ又は膝をつき拳を地面に打ち付けるネプテューヌ。

「くっ！？何故、何故なの何故お兄様は!？」

「ねぶねぶ恥ずかしいですから早く行くですうー。所詮ゲームの中の話です。」

コンパが膝をついているネプテューヌを無理矢理引っ張って行き連れて行く。

「お兄様ー！！」

ネプテューヌの絶叫がリンボックスにひびいた。

しばらくしてネプテューヌも立ち直り協会についたのだがそこで問題が発生した。

「ああ、困りますお客様協会にその様な恰好で入られては。」

そう服装について注意された……………コンパが。

「どうして私が注意されるですか！？」「ああ、言いわすれていたんだけどこのリンボックスではコスプレこそが正装なのよ。そう言えばコンパ看護学校の制服があったじゃないあれを着れば良いんじゃない。」

「恥ずかしいですー！！」

嫌がるコンパ。

「お客様あまり騒ぐようだと警備員を呼ぶ事になりますか？」

そんなコンパに協会の教員が睨みをきかせる。

「コンパ……………確かに補導されそうね貴女がね。ふふつ。」

ネプテューヌがクスクスと笑う。

「……………こうなったらもうやけですー!!」

コンパ着替えもといコスプレ中。

「ではグリーンハート様が参られるまでこちらでお待ち下さい。」

現在ネプテューヌ一行は応接間にてグリーンハートを待っているところである。

話は変わるが今のネプテューヌ達の服装を確認しておこうか。

アイエフはいつも通り。

コンパは看護学校の制服。

ネプテューヌは女神化してメイドプロセスユニット装備。無論スパッツ装備済み。

「失礼しますわ。貴女達かしら私に会いたいとおっしゃっている…

……………ネプテューヌ!? 貴女なんでここに!？」

グリーンハートことベールが応接間に入って来ると同時にネプテューヌの存在に驚く。

「でたわね乳お化け!」

「ねぶねぶいきなり何を言っているんですか!？」

いきなりの暴言のネプテューヌにコンパは驚愕する。

「相変わらずですわね貴女。まあ、いいですわ。ところでネプテューヌ又貴女スパッツ持っていますわねいますぐに渡しなさい。」

「やはり貴女の狙いもスパッツなのね。悪いけど渡すつもりはないわー!」

一触即発の空気

「まあ、いいですね。だったら勝負しませんこと?」

「勝負?面白そうね受けて立つわ。」

ネプテューヌは剣を取り出そうとする。

「お待ちなさい。誰も戦闘で決めようとは言っていないわ。」

「だったらどうするつもりよ?」

「そこでこれの出番なのですわ。」

ベールがその言葉と共に取り出したのは
『お兄様は男の娘で弟!?』

まさかのゲームソフトだった。

メイドな紫　聖地リールボックス（後書き）

今回はベールの恐ろしさをしつたね。

ユウ「いったい何があつたんだ？」

まあ、いろいろとね。そう言うユウは？

ユウ「俺は………まあ、ちよつと。」
教えてくれないの？

ユウ「いずれわかるよ。」

まあ、いいや。ところでみなさんは幼女が好きでしょうか？もし好きな方は感想にでも良いので好きか嫌いか書いてくれると嬉しいです。

ユウ「何をするつもりだ？」

ではみなさん失礼しました。

最強の青髪 語る銀と嘔吐（前書き）

今回はSSH最強のあの人が登場します。

駄文なので気をつけて見てください。

最強の青髪 語る銀と嘔吐

語り手イストワール side

話をしましょう。これはまだユウが女神になってまもない頃。ユウは一人の少女と出会います。

イストワールいきなりどうしたんだ食事中に語りだすのはマナー違反だぞ。

少女には夢がありました。でも少女は臆病で引つ込み思案さらには根暗で引きこもりと言う典型的な駄目人間でした。

誰の事かは知らないが言いすぎだろ……………。

でも少女は変わります。運命的な出会いを果たして……。これはそんな出会いの物語り。

こんなキャッチフレーズどこかで聞いたような？

では出会いの書を紐解きましょう……………。うわおえええ！。

うわっ！？食事中に吐くなよ！！なんか本が出てきた。
さあ紐解きましょう……………っ！？

どうしたイストワールいや語り手さん？

久しぶりに出したら……………本当に……………でそう……………で。

まさか！？ちよつと待て責めてトイレで吐いて。ああ止めるなんてこっちに来るー！！

一緒に汚れましょう。うおええええー！！

止めるおー！！

5pb・side

ボクの名前は5pb・ストリートミュージシャンなんかをしているんだ。これでも少しは有名なんだ。けっして引きこもりでも根暗でもないよ。そんなボクにはもう一つの顔があるんだ。それはギルドSSHシルバーハート様は私の嫁の会員No.1しかも設立者で會長なんだ。どうしてそんな事をしているのかと聞かれるとあの人ユウ君……。じゃなくてシルバーハート様との出会いから話さないといけない。そうあれは雲ひとつない快晴の日だった。

その頃のボクは極度の恥ずかしがりやで人前で歌う事なんてできなかった。そんな時にどこからかとても綺麗な歌が聞こえた。

「いったい誰が……………」。

ボクは気付くと走り出していたその歌の聞こえたところに向かって。

「……………」。

魅了されてしまった。その唄を奏でる柔らかかそうな唇に艶やかでサラサラと銀色に輝くストレートの髪に金色に輝く瞳に。彼をシルバーハート様をみた瞬間にボクの全てが奪われてしまった。

気付くと彼は歌い終えたのかどこかに行こうとする。ボクは彼を何故か引き止めていた。

「あつ、あの……………」

彼が振り返るその目は何故か悲しみに満ちていた。

「……………なにかよう？」

「えっと、その、唄凄く綺麗だった……………」

心の中ではいっぱい言いたい事を考えていたはずなのに口から出てきた言葉はそんな言葉だった。

「そつ、ありがとう。」

その言葉と共に彼の顔が笑顔になる。

「……………っ!？」

その笑顔にボクは心臓を鷲掴みにされた。

「どうしたの顔が真っ赤だよ。」

首をコテンと傾ける彼、その仕草はとても可愛らしかったと言って
おこつ。

「な、なななんでもないです。」

「そつ?ならいいんだけど。」

彼が穏やかな顔になったのを見てボクは彼に問う。

「あ、あのどうしてそんなに悲しそうなの？」

その瞬間彼の顔がきょとんとあっけにとられたかのような顔になる。その仕草もとても可愛らしかったと言っておこう。

「……………ああ。別に大したことじゃないよただ幸せになれなかっただけだから。」

そう語った彼の顔はまた悲しみにつつまれていた。

「幸せになれなかった？」

「みんなに唄をきいてもらえなかった。みんなを……………幸せにすることが……………」

彼の唄が人を幸せにすることが出来ないはずがない。少なくともボクは……………。

「ボクは君の唄で幸せになれたよ。ボクに君を幸せにする手伝いをさせてほしいんだ。」

「……………！？」

彼の顔がまたもや驚きに包まれた。

「あのね君の唄はとても綺麗なんだ。でもねこの通りは今の時間は人通りがとも少ないんだ。歌うんだとしたら向こうの通りのほうが良いんだ。」

ボクはそう言つてこことは反対の道を指差す。

「それにボクなんかのじゃ悪いかもしれないけど……………」。

そう言つて私は自分の相棒を取り出す。

「エレキギター？」

「そうだよ。これでも少しは変わつてくるはずだよ。」

ボクは彼にエレキギターを取り出して見せる。彼はそれはキラキラとした目で見える。くちゃくちゃ可愛いとだけ言っておくよ。

「それじゃあ行こう!—!」

ボクは彼の手を引つ張り連れ出す。いつものボクならこんな事は出来ないと思うよ。でも彼と一緒にならなんでも出来るそう思えた。

「ま、待つて。」

彼から声をかけられる。

「どうかした？」

「君の名前を教えて。」

そう言えば言つてなかったつけ。

「ボクは5 p b . 君の名前は？」

「……………ユウ。」

「そう。じゃあ行こうかユウちゃん。」

彼の名前を呼ぶと彼は何故かむすつとした顔をする。何か気にさせることをしたのだろうか？今考えると明らかだったんだけど。

「ユウちゃんじゃなくてユウ君俺は男の子。」

え？

「……えー!!」

ボクの絶叫は人がほとんどいない通路によく響いた。

とりあえずユウ君がどこからか持ってきたビール瓶のケースの上に
乗って歌う準備をする。ボクはそのままギターを準備してチューニ
ングを行う。ふと周りを見回して見るとちらほら人が集まっていた。
それも仕方ないと思う。ユウ君はみんなの目を惹く美しさだしね。
本当に男の子なのかな……いや確かこんな言葉があったな『こんな
に可愛い子が女の子なわけがないきつと男の娘だ』そうかユウ君
の性別は男の娘なんだ。

「準備できた？」

そんな馬鹿な事を考えていたときユウ君より声が掛かる。

「うん。いつでも良いよ。」

ジャラーンと一度弦を弾いて見せる。

「じゃあいくよー!!」

その言葉と共にボクはギターを弾く。譜面を見る必要はない。ユウ君が歌う唄はどれもマイナーな曲ばかりなのですべて頭の中に入っている。ボクは前奏を弾きだす。やっぱりギターだけだといろいろ限られてくるね。だけどユウ君の唄はそんなボクの迷いさえも軽く打ち消していく。

奏でられるその旋律によって人々はまたひとりと立ち止まりユウ君にユウ君の唄に魅了されて行く。

「〜」

ボクのギターさえも呑み込んでいまいそうである。ボクはそんな中でも楽しんでいた。とても楽しかった。でもそんな楽しい時間は長く続かない。ユウ君の唄がとまる。

辺りが沈黙に支配される。ユウ君が不安そうな顔で周りを見回す。

でもそんな心配しなくても良いと思う。だって……………。

『良いぞお嬢ちゃん達ー!!』

『感動したー!!』

『私は君に心奪われたー!!』

『キヤー!!ステキー!!』

ユウ君の唄が心に響かないはずない。ほらこんなにも多くの人達を魅了してしまったのだから。

ユウ君は笑顔でボクの手を取りもう片方の手で人々に手をふる。その後観客のアンコールに答えて10曲近く歌った。

「今日はありがとうp.b.ちゃんおかげで楽しかったよ。」

「ボクは何もしてないよ。ユウ君唄がみんなに届いたんだよ。ボクは何もしてないよ。」

不意にユウ君の手が伸びてくる。

「えいつ!」

「ユウ君にやにするのー!」

頬をむにゅむにゅと引っ張られる。

「おお!ーやわらかい、よく伸びるー。」

「うにゅー。えいつ!」

ボクもユウ君の頬を負けじと掴んで引っ張る。

「「うゅー。……………ぷっ、あはは。」」

二人とも互いの可笑しな顔に耐えきれずに笑ってしまふ。

「なんだちゃんと笑えるんだ。可愛い笑顔だね。」

「っ!?!からかわないでよ。」

ボクなんか可愛いわけないよ。

「今ボクなんかがつて思わなかった?」

「……………!?!」

どうして……。

「その言葉は君の可能性を無駄にしてしまつ。」

「可能性？」

「そう可能性諦めてしまえば可能性もゼロになってしまつ。だから………！？」

ユウ君が話しの途中で急に顔色を変える。

「ユウ君？」

「ごめん俺いなくなっちゃ。」

「また会える？」

ボクは悲しみを隠しきれない顔でユウ君に聞く。するとユウ君はボクの頭を軽く撫でる。

「5 p b . ちゃんのぞむならね。じゃ、またね。」

そう言つてユウ君は走り出していった。そしてボクの心を奪いさつていった。

それからしばらくして帰路に帰っていると一筋の光が天に向かって行く。そしてその光の中に彼がいた。

「ユウ君!？」

辺りが騒がしくなってくる。無論みんなあの光を見たせいだろう。

『おおー！！あれは伝承の女神さまじゃー！！』

『そうよあれが銀色の女神様なのよー！！』

女神さま。それがボクの中に響いてくる。まさかユウ君が！？でもなんでだろう不思議とあまり驚かないだって彼は男の娘なのだから。

「よし。ボクもユウ君に負けないようにがんばらないとー！！」

ボクはそれからいろんな事を体験し、学習した。そして今ボクは……。

「これより綺羅星じゅ、じやなかった。SSH総会を始めます。」

「今日こそ貴女を打倒してNo.1の座をいただくわ。喰らいなさいLEDライト100%フルチャージシユートー！！」

いつものNo.2のLEDライトを鏡で反射させる。そして鳩尾に一発いれておく。

「ギャー目に直撃しつ、くぼらっ！？」

倒れふせるNo.2。

「相変わらずの手際の良さですの。」

「ありがとうガストでも貸したお金早く返してね。」

ちなみに5000クレジット。

「ぎゃふん。ギャー!？」

何故かガストの椅子が高速回転しだす。

「相変わらずの最強ぶりだんだけど嫁の事に関してはアタシは負けないぞー!」

REDちゃんが立ち上がり5pb.ちゃんに指を刺す。

「ちなみにボクはシルバーハート様のサイン入りのバスタオル、使用済み歯ブラシ、マグカップ、さらには下着を持っているよ。」

どうやって手に入れたかは聞かないでね。

「これで勝ったと思うなよー!」

「さておふざけはここまで真面目にやるよー!」
ボクはがんばっています。ストリートミュージシャンとしてSSHの最強の存在として……………。

語り手side

少女は変わった出会いによって少女の変革によっていったい世界はどう変わるのかは誰も知らない。だけど彼女が諦めない限り道は続いて行くとそう俺は信じている。あの時の俺に幸せをくれたのだから。ちょうどあの時の俺は女神として成り立てで不安だったからな。

それにしても掃除が大変だった。あのゲロトワールよくも俺にも被害をだして。

え、何故俺が語り手をしているのかって？簡単な話だ……。
おっとその前に。「いい加減に語り手やるのはやめにしよう。疲れ
てきた。ちなみにイストワールは精神崩壊させてトイレに閉じこめ
た。」

トイレの扉をドンドンと叩くイストワール。

「すみませんだれかいませんか。出してくださいここなんか臭い
んです。あつ、臭いのは私か。あの本当にすみません出してください
いここ空気が薄くなって……………」

あれは無視しよう。

「それにしても5pb・ちゃんは今何してるんだろう。自分に自信
を持って歌っていてくれるといいな。」

その頃の5pb・ちゃんは……………。

「ガストよくもボクのシルバーハート様のハンカチを売り飛ばして
くれたね。歯を食いしばってねガスト思いつきりいくよ。音激斬雷
電激奏!!」

ガストにギターを突き刺してジャガジャガやっていた。

「ギャー!!?ガストが悪かったですのー!!だからやめてほしいで
すのー!!」

「悪・即・爆発!!」

ガスト爆発

「キャー!!」

「これがシルバーハート様のリスペクト。」

SSH最強の存在5pb.ちゃんその力は四女神を凌駕するかもしれない。

最強の青髪 語る銀と嘔吐（後書き）

5 p b .「ちゃん無双。どうしてそんなに強いのか？」

5 p b .「鍛えてますから。」

今回はまさかの主人公が語り手。

変なところがあったらご指摘お願いします！！

5 p b .「全部じゃないかな？」

ぐさり。

対決する紫と緑（前書き）

リーンボックス編からの再スタート。どこかで見た事あるかもしれません。ご容赦ください。

対決する紫と緑

ネプテューヌside

現在メイドでスパッツなネプテューヌは協会の応接間でリンボックスの女神グリーンハートことベールと対峙していた。

「それでどうやってそのゲームで勝負するつもりかしら妖怪乳お化け。それは恋愛ゲームでしょう。」

ネプテューヌはベールが持つ『お兄様は男の娘で弟!?』を指差し問う。

「よ、妖怪!? 相変わらず失礼な娘ですわね。まあ、いいですわ特別に許して差し上げますわ。私は寛大ですから。」

「いいから早く説明なさい乳お化け。」
間髪入れずに言うネプテューヌ。

「……………心理的に殺して差し上げますわ。」

案外短期なベールだった。

「このゲーム『お兄様は男の娘で弟!?』は『お兄様は男の娘』の続編で『お兄様が魔女スイトワールの呪いで幼児化してしまうのよ。それを解決するために姉としてプレイヤーが奮闘する』というストーリーよ。」なっ!?

何故かベールのセリフに被せてくるLEDなアイエフ。

そして説明を続けるアイエフ

「新しくなったのはストーリーだけではなくまあ、細かく説明をしていたらきりがいいから省略するけどたぶん今回説明が必要になるのは対戦モードですよねグリーンハート様。」

アイエフはベールを挑戦的な目で見つめる。

「貴女どうしてこのゲームの事を！？このゲームはまだ発売前で抽選で5名のみをテストプレイヤーとして応募しただけでまだ市場に出回ってさえいないのですわ。私だって大量に応募ハガキを送ってやっとの思いで手に入れたのに。」

ベールはアイエフを得体の知れないものを見るような目でみる。

ちなみにコンパはアイエフを危険な人を見るような目で見ていた。

「ああやっぱり名前変えて一万通送って来たのってグリーンハート様なのね。」

その言葉により一層警戒心を高めるベール。

その言葉にさほどの興味もないネプテューヌはお茶請けで出されていたお菓子を食べ尽くそうとしていた。

「貴女はいつたい何者なのなの！？」

「そう聞かれたら答えてあげなきゃかわいそうね。私は……………」

そう言うとアイエフは懷から一枚のカードを取り出す。そうそのカードこそ……………」

「電気店のスタンプカード？」

電気店のスタンプカードだった。

「ああごめんなさい。今の間違いこつちが本物。」

再度アイエフがカードを取り出す。

「まさか貴女SSHでしたの！？」

アイエフが取り出したカードそれこそギルド、SSH『シルバーハート様は私の嫁』の会員カードであった。

「そう私こそがSSHのNo.2副団長のアイエフよ。」

そう言つてLEDライトをかなり強めに光らせるアイエフ。無論室内でそんなことをすれば……………。

「『『キヤー！？』』」

こうなる。

三人が復活するまでアイエフにいろいろ説明をしてもらいましょう。

「構わないわ。まずはこのゲーム通称『お兄様シリーズ』は私達SSHが製作したものなの。無論ゲーム内に登場するお兄様のデザインの元になったのは我らがシルバーハート様よ。」

なるほどね。だからグリーンハートのハガキのことなんかを知っていたんだ。

「そう言う事。次にこの続編であるこのゲームに追加された対戦モードについて説明をするわね。」
恋愛ゲームなのに対戦するの？

「簡単に言えばどちらのプレイヤーが早くお兄様を攻略するのかって言ったところかしら。」

説明をありがとう。そろそろ三人が目覚めるみたいだしね。

「「はっ！？」「」」

三人が目覚めます。アイエフは先ほどの説明を行う。

「……………」

警戒の目でアイエフを見るベール。

「まずいわね。何か興奮してきたわ。」

『お兄様は男の娘で弟！？』のパッケージを見て何故か興奮していた。

「ところで乳お化け様この勝負あまりフェアとは言えないわね。もし私達が勝ったら鍵の欠片と一緒に探してもらおうかしら。」

ネプテューヌはベールに条件を持ち出す。どうやら乳お化けは確定なようだ。

「どうして私がそのような事を！？」

「負けるのが怖いのかしら？どつやら自信があるのはその胸だけのようね？」

「言わせておけば……………いいですわ鍵の欠片でも何でも探してあげますわー！」

「手間が省けたわね。ではさっそく始めるわよー！」

「望むところですよー！」

ゲームスタート。

名前を設定する二人。

「ここは無難に……………」

『1Pネームハイジン。』

「貴女本当にそれでいいの！？」

さすがのネプテューヌも驚きを隠せないでいた。

「え？何か可笑しなところでもありましたか？私ゲームの主人公に付ける名前は大抵これなのですけど。」

彼女は妄想廃人ベールやっぱり常識は通用しない。

「貴方がそれでいいなら構わないのだけれど……………。私はやはり無難にこれかしら？」

『2Pネームスパッツ』

「だいたいの予想は付いていましたけどねぶねぶも人の事言えないですよ。」

もはや最後の砦のコンパ。

「それにしてもこの大陸の電気街ではどんなLEDと出会えるのかしら?」

その言葉を聞いたコンパが財布を入れたカバンをしっかりと抱き締めたことは言うまでもない。

「行くわよ乳お化け!!」

「かかって来なさいネプテューヌ!!」

とりあえずゲームを始める二人の非常識人。

画面に攻略対象である魔女の呪いを受けて弟になったお兄様（以降弟君と記します。）が 登場する。

『…………… どうして俺がこんな目に合わなくてはならないんだよ。イ
ストワールもう少し手はあっただろうに。』

何やらブツブツとつぶやく弟君。だがそんな事には気づかずにハイジンとスパッツは話しかける。

「おはようですわ。相変わらず可愛らしいですわねお兄様。いえ今は弟君と呼ぶべきかしら？」

「まさかここまで可愛らしくなってしまうなんて魔女の呪いいい仕事してるわね。」

「ん？うわっ！？いきなりだな。えーとイストワールからもらった台本は………あつた、あつた。おはようす、スパッツお姉ちゃん、ハイジンお姉ちゃん。もうちょっとまともな名前を付けろよお前等。」

何やらいろいろと可笑しな言動の弟君。これなら製作したSSH所属のアイエフが気づきそうなものなのだが………。

「コンパそのカバンの中にある財布を渡しなさい！！」

「アイちゃんいい加減にしてください！！これがなくなったら今日の宿代だけじゃなくてご飯だって食べられなくなっちゃいますよ！！」

「大丈夫よ私食べれる野草知ってるから。」

いろいろとコンパと大乱闘を繰り広げていた。

「では弟君私の為に美味しい朝ごはんを作ってくださいな。」

「えっ、俺が作るの？」

「当たり前ですわ。私料理なんて出来ませんもの。それに貴方の好きな事は大好きなお姉ちゃんに美味しいご飯を作ってあげる事とい

う設定ですわ。」

ハイジンお姉ちゃんの言葉に本らしき物を開き何かを確認する弟君。
『本当だ。イストワールそういう事は先言えといったのに……………。
わ、わかったよ。だ、大好きなお姉ちゃんの為に美味しいご飯を作るね。』

「御託はいいからさっさと作りなさい!!」

何故か怒り出すネプテューヌ。

『何故俺が怒られねばならないんだ。まあいいとりあえず作るか。』

弟君料理中……………。

『で、出来たよお姉ちゃん達。』

テーブルの上に並べられたのはトーストにオムレツ、サラダにヨーグルトといったシンプルな料理であった。

そしてここで選択肢の登場。

- 1、とても美味しいよ。
- 2、まあまあですわね。
- 3、こんな物食えるか!!

「きましたわ選択肢!!」

「なるほど料理を食べての感想を言うのね。でも画面の向こうだから食べられないじゃない。ちなみに私は1番を選ぶわ。悪いわね早

い者勝ちよ。」

すかさず1番を押すネプテューヌ。

「それは言わない約束ですわよネプテューヌ。私が選ぶのは3番ですわー!」

「貴女いつたい何を考えているの!? 馬鹿なのそんな事したら好感度ガタ落ちよ!」

「まあ見ていなさいなネプテューヌ。」

何故か自信満々のベールであった。
そして……………。

「アイちゃんお財布を返してくださいーい!」

「大丈夫よ死ぬまで借りるだけだから。」

コンパもいろいろとピンチだった。

「とても美味しかったわ。」

『当たり前だ俺が作ったんだ不味いわけないだろう。』

1番を選んだネプテューヌなかなかの好感触であった。

そして問題のベール。

「こんな不味い料理なんて食べられませんか!」

その言葉と共に画面の中の弟君にオムレツが投げつけられる。

「弟君は設定では大好きなお姉ちゃんの為に作った料理をお姉ちゃんに投げつけられると好感度をあがるという超ドMなのですわ。さあお姉ちゃんの胸に飛び込んできなさい!!」

『……………べールお前覚悟しておけよ。』

その弟君の謎の発言と共に画面は砂嵐に変わる。

「……………え?」

しばらくすると画面が真っ暗になり好感度が表示される。

2 P 5ポイント

1 P - 50000ポイント

勝者 2 P スパッツ

「わ、私の勝ちね。」

「そ、そうですわね。私の負けですわ、鍵の欠片でしたかそのアイテムについて調べておきますわ。」

言い様のない恐怖に襲われる二人。

「なら私は宿に戻るわ。」

「待つてくださいネプテューヌ！！一人にしないでください！！」

「嫌よ！！よくわからないけど貴女の傍にいと何か危険な感じがするのよ！！」

「ねぶねぶ終わったんですか？ならアイちゃんを追いかけるのを手伝ってくださいです。私達の全財産を持って電気街に逃亡しちゃったです。早く追いかけないと私達本当に野草食べないといけなくなるですう！！」

「アイちゃんたまには役に立つわね。ならば行くわよコンパ！！という事で失礼するわね乳お化け！！」

その言葉を残してネプテューヌとコンパは電気街へと逃亡したアイエフを追いかけて教会から出ていった。

「いや！！置いていかないで！！」

誰もいない教会の応接間にはベールの叫び声がよく響いていたそう
だ。

ベールside

私ベールことグリーンハートは今現在言い様のない不安と恐怖に
か
られていましたわ。なので教会の教員達を集めて恐怖をまぎらわ
そ
うとしていました。

「それでグリーンハート様何のご用でしょうか？」

ネコミミセーラー服を着たこの教会の教員長が私に用件を聞いてきます。

しかしながら良い年をしたおじさんがセーラー服はやはり辛いですね。

用件はネプテューヌがいていた鍵の欠片の事で良いですわね。

「鍵の欠片というアイテムを探してほしいのですわ。私の知り合いがどうしても必要とされているのですわ。」

「わかりました。では至急調査いたしましょう。では失礼します。」

「待ってください！！皆さんどこに行くの！？」

「ですからそのアイテムの調査を……………」

「それならまた明日からすればよろしいではないですか。……………そうですね、今から皆でゲーム大会を行いましょー！！」

これなら一人になる事ありませんわ。私ったら素晴らしいアイデアですわ。

「はぁ、構いませんが……………ん？ちょっとすいません携帯が。」

「おや私も。」

「自分も。」

「俺もだ。」

「まあ、皆さんの携帯が一斉に鳴り出すなんて珍しい事もあるのでですね。」

私のは大丈夫みたいですわね。

「え！？そんな大丈夫なのか！？」

「お父さんがぎっくり腰だって！？」

「弟が誘拐されただって！？」

おや、何やら皆さん慌てていますわねどうしたのかしら？

「申し訳ありませんグリーンハート様急用が出来たので帰らせてもらいます。」

「私も！！」

「僕も！！」

「『失礼します！！』」

「待つてください皆さん私を一人にしないでください！！」

私は次々に急用だといって教会を去って行く皆さんを引き止めようとしては皆さん出ていってしまいます。ついには誰もいなくなっていましたわ。

「し、しかたありません。こんな時はネットゲームでもしますわ。」

私は恐怖と不安を忘れる為に自室へと戻ります。

ベール移動中……………。

「さてと電源を入れてと。あら？おかしいですわね電源が入りませんわね。」

私は不思議に思い何度も電源をいれようとします。ですがまったく気が配がありませんわ。この間買い直したばかりですのにもう駄目になってしまったのでしょうか？

「しかたありませんわね。同人誌販売店にでも行ってみましょう。」

私がそう決めて立ち上がると……………。

ピキッ、という音をたててパソコンの液晶にひびがはいる。

「え、縁起でもないですわ。さ、さあ急ぎましょう。あ、あははは。」

私はもはや駆け足どころか走って教会の外を目指します。

「とりあえず何事もなかったですわね。心配して損しましたわ。」

私は息を整えて安心して同人誌販売店へと向かおうとします。

「どこに行くのかなベール？いやハイジンお姉ちゃん？」

「……………！？」

そのどこかで聞いた声の主を確認しようとする間もなく私の身体は浮遊間に包まれます。

「いったいなにが……………！？」

回りを見渡してみると雲一つない青い綺麗な空が見えた。………どの方向を見ても。どうやら私は空中に投げ出されたようですわ。

「変身!!」

直ぐ様私はプロセスサユニットを装着して体制を整えますわ。そして私を空中に投げ出した張本人を見る。そう、私の兄であるシルバーハートを。

「久しぶりだなベール。」

ベールが見つめる先には白いコートを羽織ったユウが女神化をせずに空中に浮いていた。

対決する紫と緑（後書き）

きょうのゆにちゃんに変わる新しいのを考える必要があるかもしれない。その時ノワールは？でも書いてみようかな？

ノワ「お断りよ。」

新たな装着者（前書き）

スパッツネプテューヌ視点は書きやすくてユウ視点が書きにくいというまさか。

新たな装着者

ユウ s i d e

現在俺は天界の自室にてイストワールの髪をといていた。かれこれ3時間位。

「イストワールもう止めていいよね？腕がそろそろ吊りそうなんだけど。」

「それを説明するには後3時間ほどかかりますよ（・ー・）」
つまりは後3時間行えと言うのか。

「わかったら続けてください。」

「はいはい。」

まあいいか。この際ネプテューヌ達の事でも聞いてみるかな。

「ねえ、イストワール今ネプテューヌ達の状況はどんな感じ？怪我とかしてないかな？」

なんだかんだいってもやはり心配にはかわりないからね。

「ネプテューヌさんなら今リーンボックスにいますよ。」

「リーンボックスねえ。」

リーンボックス雄大なる緑の大地。自然があふれる素晴らしい大陸である。あそこで日光浴や昼寝よくしたなあ。

「久しぶりに行ってみるかなあ。」

「いけませんよ。下手をしたらネプテューヌさんと鉢合わせする可能性だってあるんですから。」

「冗談だよ、冗談。」

「またそんな事言つて。罰として今日は一緒にお風呂に入ってくださいね。」

「そんなことしたらイストワール水分含んで大変な事になるよ。」

前回イストワールがお風呂に突入してきた時誤って浴槽にダイブしてふやんふやんになってしまった。

乾かすのに一苦労だったよ。

「あれはいい思い出です。ユウが今にも泣きそうな顔で必死に私を助けようとしてくれた時は凄く萌えました。」

「パートナーが大変な時は助けるのが当たり前だろう?。」

「そうでしたね。私としては違う意味でもパートナーになりたいのですが……………」

「ん?パートナーはパートナーだろう?。」

「貴方変なところで純情ですよね。」

呆れたわようにため息をつくイストワール。

「しかし暇だする事がない。」

「なら私と良いことしませんか？」

「良いこと？」

「とつても気持ちがいい事です。気持ちがいいのは嫌いですか？」

「別に嫌いではないんだけど。なんだか嫌な予感がする。それにイストワールなんか息が荒いよ。」

髪をとく手を止めてイストワールから距離を取る。

「気にしないでください。息が荒いのは仕様です。痛いのは最初だけですから。」

「マッサージでもするのか？」

「ええ、まんべんなく貴方の全てを揉みほぐしてあげますよ。ハアハア――！」

じわじわと後退りをする俺。そして少しずつじわじわと近付いてくるイストワール。本当に何をするつもりだこの史書は。

「ではいただきまーす――！」

ルパンダイブで飛び掛かってくるイストワール。とりあえず受けと

めればいいのだろうかと思い俺も構えるがその際足に何かが当たりそれを確認するためにしゃがみそれを拾う。その際、ガシャン、とまるでガラスが割れたような音がしたが俺は気にせず拾った物を見してみる。

「イストワールのかな？ゲームみたいだけれど題名は……………な、何なのこれ。お兄様は男の娘で弟？それにこのパッケージに描かれているのってまさか俺！？イストワールこれはどういう事だよ！？ってあれイストワール何処にいったんだ？」

辺りを見回して見るがイストワールの姿が見えない。いったい何処に……………。その時俺の視界に丁度イストワールぐらいの大きさの物が貫いたかのような窓ガラスが入る。

ま、まさか……………。

「お、落ちたのか？」

この部屋の外は丁度何もなく下手したら下界にまっ逆さまである。

「説明している場合ではないね。プロセスサユニット装着、女神シルバーハート降臨！」

セリフを決めている場合でもなかったね。急いでイストワールを探しに行かなくては。

「へあつー!!」

俺は窓を開けて飛び立つ。

「死ぬかと思いました。気付いたら空を飛んでいて後もう少しで地面とキスする所でした。ちなみに私の初めてはユウに捧げると決めています。とりあえず慰めてください。」

「よしよし怖かったね。」

イストワールは何とか地面すれすれのところで救う事ができた。今は抱っこして頭をこれでもかというほど撫でている。

「もっと撫でてください。そして抱き締めてください。」

「要求多いな。」

「うわああん!!」

「ごめんごめんだから泣かないで。」

仕方なくイストワールを抱き締める。

「ハアハア!!」

そして直ぐに突き放した。

「うわああん。」

やはり再び泣き出すイストワール。

「ああごめん。つい。」

再び抱き締める。

「たまりませんね。自制心なんてゴミ箱にポイしましょう。ハアハア！」

とりあえずイストワールを引っ付かんで投げた俺は悪くない筈だ。一応ベッドに投げつけたのは俺の良心だ。

「ここでいつもユウが一人であんなことやこんなことをしているんですね。」

「していません。ところでイストワールこのゲームソフト知ってる？」

俺はイストワールに『お兄様は男の娘で弟』を見せる。

「それなら私ですよ。」

「このパッケージに描かれているのってもしかして……………」

「貴方を元にして作られたキャラクター通称お兄様です。」

「いやいや、まんま俺でしょうこれは。」

「お兄様です。」

「いや俺でしょ「お兄様です!!」もう何でもいいよ。」

「とりあえず詳しく聞こうか。」

「私の性癖についてですか？」

「そんなわけないだろうが!!このゲームについてだよ!!」

「仕方ないですね。説明しましょう。」

……… 史書説明中 ………

「とりあえずSSHを潰すか潰さないか考えないといけないな。」

イストワールよりゲームについて聞いた俺は製作したSSHを本気でどうすればいいのかを悩んでいた。

「SSHは凄まじい戦力ですよ。貴方一人の手におえるとは思えませんよ。」

「だからこそ悩んでいるんだよ。」

彼らを相手にして闘えば下手したらゲームギョウ界を巻き込んだ大事件が起こるかもしれないな。

『俺はシルバーハートこのゲームギョウ界の女神です!!』

「な、なんだ！？俺の声？」

「これは私のSギアの着信音ですよ。」

「お前は何がやりたいんだ。」

SSHへの対処を考えていた俺の意識はイストワールのSギアの着信音にて思考の渦より引き戻される。

しかしその着信音は本当に止めてください。人様に聞かれたらなんて言えばいいのやら。

「おや？これは面白い事になっていますね。ユウ見てください）＾・
）」

イストワールが自らのSギアを俺に手渡す。
そこには…………。

『行くわよ乳お化け！！』

『かかって来なさいネプテューヌ！！』

ネプテューヌとベールが映っていた。どういう事だ？

「どうやら彼女達は今から勝負するようですよ。この『お兄様は男の娘で弟！？』で。」

「あの馬鹿どもが……………」

「そうだユウ貴方彼女達の様子が気になっていましたよね？」

「まあね。でもお前がネプテューヌと鉢合わせするからやめろと言ったじゃないか。」

「実はネプテューヌさん達に気付かれる事なく接触する方法がありますよ。」

「詳しく聞こうか。」

「その返事を待っていましたよ。まずはこれを見てください！！うおえええええ！！」

うわっ、また吐いたよこいつ。

「ん？何か出てきた、けど触りたくない。」

「超次元電腦ダイブマシン〜。」

だいぶまし？あれ？違うダイブマシンね。

「とりあえずその何処かの猫型ロボットを彷彿とさせる言い方は以後禁止。それでその超次元電腦ダイブマシンってなに？」

「これはSSHのシアンが造りだした。ゲームの中に入れてしまう発明品なのです。」

見た感じただのヘルメットにしか見えないけど。

「物は試ですよ。さあやってみましょう。」

「安全面の問題は？」

「問題ないですよ。これがゲームの台本になります。ではレッツゴーダイブ！！」

ちよつといきなり被せるなよ！！

うわっ、なんか変な臭いが！？

……………ユウ、ダイブ中

簡潔に言々と散々な目にあつたと言っておこう。詳しく知りたいな

ら前話を見て欲しい。ネプテューヌとベールの攻略対象になっていた弟君は俺なので。

「とりあえずリンボックスに行ってくるからね。」

「そうですか、どうせ止めても無駄なんでしょうね。」

「まあね。ベールに少しお仕置きをしてくるよ。ネプテューヌとは遭遇しないようにするから。」

「わかりました。健闘を祈ります。」

イストワールの声援を背に俺はリンボックスへと転移魔法で転移した。

ユウ転移中……………

そしてここから前話の続きとなる。

「久しぶりだなベール。」

「お、お兄様！？ほ、本物なのですか？」

「俺に偽物がいたら会ってみたいよ。それよりお前よくも人の顔にオムレツぶつけてくれたな！！いくらゲームの中の事と言えど許さないからな。」

「相変わらずお兄様は素敵ですわね。怒った顔も堪りませんわ。あ

の白い肌を舐めまわしたいものですわ。」

「それになんだよ萌えとオタクの聖地リーンボックスって！？どんな管理をしたらこうなるんだよ！！」

「私は嫌がるお兄様を無理矢理押し倒して着ている洋服を引きちぎってその白い肌を晒させる。次第に目に涙をためていくお兄様。ですが私はそんな事は気にせずお兄様の身体を「お願いだから話を聞いてください！！」……………」

「ハアハア！！申し訳ありませんお兄様。私お兄様との再開の喜びに我を忘れて妄想にふけってしまつて。」

「相変わらずだなベール。いやさらに悪化しているようだなその妄想癖。」

「ハアハア駄目お兄様！！ここじゃあ人が来てしまいますわ！！」

「こんなところに人はこれないよ。」

「でもお兄様が望むなら私どんな事でもできますわ！！」

「なら黙つて。そして人の話を聞いて。」

「わかりましたわ。愛を謳歌いたしましょうお兄様ー！！」
「話を聞けー！！」

そして何故か戦闘が始まつた。

「一枚目いただきますわ！！」

「なっ！？速い！！」

ボールがユウに向かってランスを構えて突撃してくる。そして昔と比べられないそのスピードにユウは驚き回避が少し遅れて羽織っていた白いコートが切り裂かれる。

「はっ！せい！やっ！！」

「くっ！？」

続けざまにランスでユウを凄まじいスピードで突くボール。ユウもそれを双剣にて防ぐ。

「この動き昔のボールより確実に強くなっている……………それにこの動き！？」

どこかで見たような？

「やはり私とお兄様は運命の赤い糸で結ばれているのですから気付かれるのも当たり前ですわね。私お兄様に下界に落とされてからただ遊んでいたわけではありません。私アニメや漫画それにゲームを見てその動きや技を研究しつくして完璧に再現することを可能としたのですわ。」

「いやいやそれを遊んでいると言ったと俺は思っただけど？」

「廃人にそれを問うなんてナンセンスですわー！！」

叫びながら射撃を行うボール。

「自信満々に言うなー!!」

それを双剣の腹でユウは受けとめる。

「手土産に衣類の一つももらっていきますわ!!」

一気にユウに接近してベールはランスにて突こうとする。

「俺に触れるなこの変態!!」

ユウはそれを双剣をクロスさせて受けとめて一気に力をこめて弾きかえす。

「やはり無下にあしらわれてしまいますわね。ならばこれでえええ!!」

ベールは一旦ユウから距離を取りそこからランスを投擲する。

「くっ!!?なんて無茶苦茶な。」

それをユウは何とか避けるが体勢を崩す。

「はあああああ!!はああああ!!」

体勢を崩すしたユウに飛び付くベール。

「抱きつくな!!息を吹き掛けるなー!!」

ジャイアントスイングでユウはベールを投げ飛ばす。

「きゃっほおおおおい!!」

よくわからない奇声をあげながらお星様になったベールであった。

／／／／／／／／

「疲れた。凄い疲れたこれなら女神化して闘えばよかったよ。それに全然お仕置きできなかった。何か逆に喜んでたし。」

下界に降ろしてさらに可笑しくなってしまうとは完璧にユウの思惑を外れていた。

「他の三人は大丈夫だろうか？」

ユウがベールの変態ぶりの悪化を見て他の妹達の事を心配していると強めの風が吹く。

「うわっ寒い……ひゃう!？」

結構強めの風が吹き抜けるとユウは下半身に違和感を感じる。

「ま、まさか!？」

ユウは自分のズボンに触って確認してみる。

「え? な、なんでちゃんと履いてきた筈なのに。………スパッツがなくなった。」

ベールside

その頃ユウによって投げ飛ばされたベールはゲームギョウ界を一周してリーンボックスの教会の自室に突き刺さっていた。

「さすがお兄様ですわね。女神化していなくてもあの強さ。私の完敗でした。ですが……………」

ベールは懷よりとある物を取り出す。それは……………。

「ハアハア。たまりませんわお兄様のスパッツ。しかも先ほどまで履いていた代物。なんて素晴らしいのでしょうか。」

実は先ほどユウに抱きついた時すかさず高速で抜き取っていたのである。恐るべきスパッツへの執念。

「うふふふ。ではさっそく……………装着ですわ。」

そしてやはり履いてしまうのであった。

「なんとというスパッツ!？」

ここに新たなるスパッツの装着者が現れるのであった……………。

おまけ

「イストワールにばれないようにしなくては。」

「ユウ待っていましたよ!！」

「イストワールなんでネグリジエ!？」

「さあ一緒に寝ましょう！！ユウのネグリジェもちゃんとありますよ。だから早く脱いでください！！今、ここで！！」

「お前まさか……………」

「はあはあはあはあ、まさかのノーパ「それ以上言うな！！」また私は落ちるんですねー！！」

どちらかと言うとノースパッツ。

そしてとりあえず窓の外に投げ捨てられたイストワール。

それ以来彼女を見たものは……………ちらほらいたそうな。

新たなる装着者（後書き）

突撃隣の晩御飯（ノワール限定）

ガスト「皆さんこんばんは突撃隣の晩御飯始めました。ガストですの！！今日はラステーションのノワールさんのお宅に突撃ですの！！！！」

ノワ「な、何よ貴方人の教会に勝手に入ってきて！？」

ガスト「カメラ回ってるですの。」

ノワ「え？カメラ！？皆さんこんばんは。私はラステーションの守護「さつそく晩御飯を拝見ですの！！」ちよつと！！」

ガスト「ブラックハート様の晩御飯は……………卵かけご飯。」

ノワ「ちよ、ちよつと見ないでよ！！」

ガスト「意外と質素ですの。女神様も大変ですの。」

ノワ「違うのよ！！今日はたまたま食べなくなっただけで「今日の突撃隣の晩御飯意外と女神様も大変ということで次回も楽しみにですの。」話を聞きなさい！！」

ガスト「次回はラステーションのノワールさんのお宅突撃するですの！！」

ノワ「ってまた私なの！！」

二人のスパッツ 忘れ去られた魔女（前書き）

もつとつにでもなれやー！！

二人のスパッツ 忘れ去られた魔女

ネプテューヌside

現在ネプテューヌ一行はリンボックスの外れにある今は打ち捨てられた旧教会にて一夜を過ごしていた。

何故宿屋に泊まらずこんなところで過ごしているのかというと……。

「ソーラーLEDやつぱり夜だとあまり意味がないわね。でも電池代が浮いたのは助かったわね。」

「そのおかげで私達はこんなところで過ごす羽目になったですう。」

「そうだよ!!ご飯だつてまともに食べられないんだからね。」

「大丈夫よ。私1ヶ月位ご飯食べなくても生きていけるように訓練受けてるから。」

「私達が良くないの(です)ー!!!」

そうアイエフがコンパから全財産を強奪して電気街でマイクロソーラー電池を購入してしまった。その為にネプテューヌ一行はこの旧教会で過ごしていたのだった。

「それにしてもここ暗いわね。よし出力の上がったLEDライトを試す時ね。」

「逃げるー!!」

「イヤー!!」

その瞬間旧教会は光に包まれた。

ベールside

現在ベールは街の外でモンスターと戦闘中であつた。

「それにしても凄まじい数ですわね。ですが今の私には物足りない相手ですわ。……………変身。」

ベールの身体に緑色のプロセッサユニットが装着される。

「力の差を教えてさしあげますわ。」

萌えとオタクの聖地リーンボックスを守る守護女神グリーンハートの降臨である。

だが少し違つのは彼女のプロセッサユニットが変化していることだ。そうスパッタイプへと……………。

「感じますわ。お兄様の脈動、匂い、温もり。見せてあげますわ私のいいえ、私とお兄様の力をつてキヤー!!」

いろいろと問題のある発言をする途中のベールを謎の発光現象が襲う。

『ギヤー!?!』

その謎の発光現象によって凄まじい数のモンスター達が蒸発してしまふ。

「こ、この光はどこかで見たような？　どうやら旧教会からみたいで
すわね。向かってみる必要がありますわね。」

そう言つて旧教会へと向かうグリーンハートであつた。

ネプテューヌ side

「し、死ぬかと思つたよ。スパッツ大丈夫？　そう大丈夫ならいいん
だ。」

突如スパッツに話しかけるネプテューヌ。頭でも打つたのであろう
か？　いやそういえば何時ものことである。

「ね、ねぶねぶ私の心配もしてほしいです。」

どうやらコンパも無事のようにだ。

「可笑しいわねえ。うつすらとしかつなくなるなんて。修理に出
す必要があるわね。コンパお金」

LEDライトの灯りがうつすらとしかつなくなつてしまったアイ
エフはコンパにお金をせびる。

「当たり前のように私からお金を借りようとししないでください！！
もう1クレジットだつてないんですよ！！」

「ちよつとコンパうるさいよ！！　スパッツがなんて言ってるかわか
らないじゃん！！」

「なんで私が怒られるですか!？」

「自業自得ねコンパ。」

「なんだかもう生きて行くのが辛くなってきました。」

いろいろと大変なコンパであった。

「やはり貴女達でしたかネプテューヌ。」

旧教会の扉が開き女神化したグリーンハートが入ってくる。

「…………鬱ですう。」

「つきなさい、つきなさい、つきなさい。つきなさいよLED!!
今つかなきや何の意味もないのよ!!お願いだからついてよ!!」

「スパッツお腹空いたね。でもねお金がないから我慢しないね。」

自分達の事で精一杯でグリーンハートの言葉が全く聞こえていない
ネプテューヌ達でした。

「とりあえず貴女達人を無視するのはどうかと思いますわ。」

「どちら様ですか?もしかしてこの人ですか!?!すみません。不法侵入だっことはわかってるです。でも私達お金がなくて、お金がなくて……うつうつ……ぐすつ。」

「よ、よくわかりませんが苦勞しているのですね。」

今まさに涙腺が決壊しかけのコンパ。そしてそれに戸惑うグリーンハート。

「貴女はどちら様？何か私と似た恰好してるね。」

「貴女とだけは一緒にしてほくはないですね。それにしても貴女私を馬鹿にしているのかしら？」

「ねぶねぶは馬鹿じゃないです！！ただの記憶喪失の変態さんです！！」

「コンパそれフォローになってないよ。」

「ネプテューヌが記憶喪失？詳しく聞かせてもらいますわ。」

事情説明中……………

「なるほど下界に落ちたショックで記憶喪失に……………。ならお兄様の事も忘れているという事ですわね。ライバル一人が自滅というわけですわね。」

何やらブツブツとつぶやくグリーンハート。

「それで貴女はだれ？もしかして私の事知ってるの！？」

「ふう。しかたありませんわね。」

ネプテューヌの疑問にため息をつき女神化を解くグリーンハート。

「ああー！！妖怪乳お化け！！」

「ぐ、グリーンハート様だったんですか!？」

「ええ、驚きましたか？」

二人の驚きに何故か少し嬉しそうなベールであつた。

「ところでグリーンハート様はどうしてこんな所にいるんですか？
もしかして私達を不法侵入の罪で捕まえにきたんですか!？私もし
かして前科とかついちゃうんですか!？うつつ、ぐすつ。」

「ち、違いますから泣かないください。まるで私が悪者みたいで
すわ。それにこの旧教会への立ち入りは自由になっていますわ。安
心してください。」

「よ、よかったです。ならどうしてですか？」

「わかったー!!きつと私のスパッツを奪いに来たんだよ!!」

「あらあら随分と増長しているわねネプテューヌ。私そんな貴女が
履いたスパッツなんていりませんわ。これを見なさい!!」

その言葉と共に自らのスカートを勢いよくまくりあげるベール。

「そ、それはまさか!？」

「キャー!!やっぱりグリーンハート様も変態さん、いえ痴女さん
ですー!!」

その光景を見てネプテューヌは驚き、コンパは両手で目を塞ぐ。

その時アイエフは……………。

「こうなったら教会の金品を強奪して……………」

何やら物騒な事を考えていた。

「わかりますかネプテューヌこれが何か？」

「ま、まさかスパッツ！！しかもそこら辺のただのスパッツじゃない！？私のスパッツと同じ神聖なる波動を放ってる！！」

「さすがに記憶を失っていてもそれはわかるようですね。」

「それを何処で手に入れたの乳お化け！！じゃなかった教えてスパッツ同志！！」

「貴女と一緒にしないでください。それとこのスパッツについて貴女に教えるつもりはありませんわ。」

「ならなんの為にここにきたの？」

「謎の光を追ってですわ。そしてここに来て貴女達と出会ったのはたんなる偶然ですわ。」

「スパッツのお導きだね。」

正確にはLEDのお導きである。

「まあいいですわ。そういえば貴女達が探していた鍵の欠片でしたか何処にあるか判明しましたわ。」

「ほ、本当ですか!？」

そこでようやく顔をあげるコンパ。

「ええ。詳しくはまた明日案内いたしますわ。それでは私そろそろ教会に戻らなくてはいけないので失礼しますわ。」

そうして廃人兼妄想癖兼変態兼痴女のベールは去っていった。

「またねースパッツ同志ー!」

どうやらネプテューヌの中ではベールはスパッツ同志に決まったようである。

「なんとかこの大陸での旅も終わりが見えてきたです。」

コンパも少し安心できたのか笑顔が見えてきた。

「そうと決まったらさっさと寝ちやおうよコンパ!」

「そうですね。……………そういえばアイちゃんがいんです。」

ふとコンパはアイエフがいなくなっているのに気付く。

「アイちゃんが?別にいいじゃん。そんな事よりさっさと寝ちやおうよ。」

「そうですね。明日に響くかもしれないですね。ねぶねぶお休みです。」

そうして二人は失踪したアイエフを特に気にせず眠りにつくのであった。

それが大変な事になるとは気づかずに……………。

その翌日……………

コンパとネプテューヌはベールの案内にて鍵の欠片があるダンジョンに来ていた。ちなみにアイエフは朝になっても帰って来なかった。

「ここに鍵の欠片があるんだねスパッツ同志よ!!」

「そうですね。それといい加減にそのスパッツ同志は止めてくれませんか？」

「わかったよスパッツ同志!!」

わかっていなかった。

「それにしてもグリーンハート様自ら案内なんてしてくれるなんて本当によかったんですか？」

「構いませんわ。自ら出番を削るほど私は愚かではありません。」

「そ、そうなんですか。」

口ではそう言ったコンパであつたが心の中ではボールとあまりかわり合いになるべきではないと考えていた。

そんなこんなで三人は順調にモンスターを蹴散らしながらダンジョンを進んでいた。たが異変が起きた。いやイベントが起きたとも言つべきだろうか。

ネプテューヌ達の前に魔女の様な奇抜な恰好をした一人の女性が現れた。

「あはははは！！ようやく会えたな！！」

「「「……………」」」

明らかにイベントなのだが三人は見てみぬふりをしてその女性の横を通りすぎるうとする。

「おい！！貴様等無視をするな！！明らかに今気付いただろうが！？」

彼女も久しぶりの出番でな必死なのであろう。

「あら私てつきり精神異常者かと思つたのですがもしかしてお二人のお知り合いでしょうか？」

「私友達を選びます。ねぶねぶの知り合いじゃないんですか？」

「ううん。私もこんな年増なんて知らないけど。」

「当たり前だ私はお前達とは初対面だ。」

「…………グリーンハート様携帯電話もってませんか？」

「ありますけど、どうかしました？」

「警察に電話してもらっていいですか？不審者がいますって。」

「わかりましたわ。実は最近ノリで設立した機動六課という部隊を試してみたいと思っていたのですわ。」

「待て貴様等私は不審者でも精神異常者でもない！！」

「なら何なの？」

「私は魔王ユニミテスの使いだ。」

「…………私ゲームと現実を混同してしまう人はよく見かけましたがここまで酷い人は初めて見ましたわ。」

「いい年して恥ずかしくないのかなあ？」

「きつとかわいそうな人ですよ。」

「黙って聞いていればあの男といい貴様等といい本当に忌々しい！！」

「あの男？」

「まあいい貴様等にはここで死んでもらう！！」

その言葉と共に魔王ユニミテスの使いは右手に持つ杖から砲撃を放つ。

「うわぁついに撃ってきたよあの年増!!」

「年を取ると気が短くなるのは本当でしたのね。」

「そんな事言つてないで早く応戦するです二人共!!ええい!!」

二人に注意を促しながら注射器による射撃を放つコンパ。

「わかりましたわ。行きますわよ!!」

「OKだよ。スパッツ同志!!変身」

『set up』

ネプテューヌの身体に紫色のプロセッサユニットがベールの身体には緑色のプロセッサユニットが装着される。

「行くわよ同志!!」

「だから一緒にしないでください!!」

「その姿を見ているとあの男を思い出す、消え去るがいい!!」

魔王ユニミテスの使いは先ほどとは違い全体に拡散する砲撃を放つ。

「甘いわね!!はぁ!!」

「この程度なら簡単に避ける事が出来ますわ!!はっ!!」

ネプテューヌは砲撃を避けて斬りかかる。同様にベールもランスにて突く。

「なめるなよ。ふんっ!!」

だが二人の攻撃を魔王ユニミテスの使いは杖で難なく受け止める。

「この程度か。あの男との差は歴然だな。ふんっ!!」

魔王の使いはそのまま杖で二人をなぎはらう。

「くっ!!? 私が押されている!?!」

「なかなかやりますがお兄様程ではありませんわ。」

「それでも受けてください!! えいつ、えいつ、えええい!!」

二人が薙ぎ払われた直後注射器による射撃をコンパが連続で放つ。

「この程度で……………なめるな!!」

杖を回転させてコンパの射撃を受け止める魔王の使い。そしてそのまま杖から新たな砲撃を放ってくる。

「ぐっっ!!?」

「この程度!?!」

「キヤー!!」

ネプテューヌとベールは掠りはしたものの大したダメージはない。
だが……………。

「キヤー！！」

コンパが直撃を受けてその命を散ら「私はまだ死んでないですー。」「
さずに戦闘不能になる。」

「確かに強いわね。」

「ええ確かに強いですわね。」

「どうした臆したのか？」

自分の強さを認めた二人を見てにやりと笑う魔王ユニミテスの使い。

「貴女 of 精神異常と強さだけは認めるはでも私とスパッツは………
…負けない。いいえ負けられないのよ！！」

「確かに私も負けるわけには行きませんわ。教会に帰ってお兄様の
同人誌を見るまでは！！」

その時二人の声に答えたのかはたまたただの偶然なのかは知らない
が二人の履いているスパッツが輝きだす。とりあえず奇妙な光景だ
と行って行っ。

「こ、これはスパッツから凄まじい力が溢れてくる！！」

「スパッツが私に力を！！」

スパッツから放たれていた光は次第に二人の全身を包む。

「この光まさかあの男の!？」

その光を見て何故か戸惑いを隠せないでいる魔王の使い。

「行くわよ同志!！」

「私に命令しないでください!！」

二人はその隙を逃さず同時に斬りかかる。

「「はあ!！」」

「何だと!？ぐうつ!？」

今までの二人からは考えられないスピードで接近してさらには同様に上がったパワーで斬りかかる。魔王の使いも何とか防ぐが全ての力を受け流す事が出来ずに膝をつく。

「くっ、なるほどあの男も何もせずに女神達を下界に落としたわけではなかったか。今日の所はこれで退散させてもらおう。」

そっいうと魔王ユニミテスの使いは忽然と消え去る。

「逃げ足だけは早いようね。コンパ大丈夫？」

「ねぶねぶあの人凄いですよ20000クレジットも落としていったです!！これで宿代が手に入ったですよ!！」

「……………コンパ。」

そんなコンパを見てネプテューヌは苦勞かけすぎたかもしれないと心の中で反省していた。

「他にも何かないんですか……………あっ！？ねぶねぶこれを見ているですー！」

「これは鍵の欠片！？あの年増が落としていったのかしら？なんてご都合主義なのかしら。」

「ネプテューヌそれを言ってしまったたらいろいろと終わりですね。」

「そういうもののね。」

「ねぶねぶもそんな所に突っ立てないで拾うの手伝うですー！」

「コンパ……………」

コンパの必死にクレジットを拾う姿を見てネプテューヌは目から溢れ出そうになる水は汗だと思い込みコンパの隣にしゃがみクレジットを拾うの手伝うのだった。

「お兄様は言っていましたわ、人は一日を精一杯生きていくだけで人生の価値をみいだせる存在だと。」

謎の迷言を残してグリーンハートは消え去っていった。

ユウside

天界のユウの部屋にてユウとイストワールは何やら話していた。

「それにしても貴方もとんでもない事をしますね。スパッツを通してネプテューヌさん達に力を供給するなんて。」

「あのままだと不味いと思ってね。それにしてもあの女生きていたとは予想外だな。」

「正確には残留思念ですけどね。それが形をとったんでしょうね。」

「残留思念ねえ。何にしても面倒なことになりそうだね。」

「貴方なら瞬殺する事も可能なのでは？」

「それもそうだけど今は泳がせて目的を探る。」

「彼女が貴方の妹達に手を出そうともですか？」

「その時は……………殺すだけ。」

「うっ、私にまで殺気を飛ばさないでくださいよ。」

「ごめんごめん。それにしてもあの女……………あれ？そう言えば名前何て言うんだっけ？」

「そう言えば貴方は彼女と対峙したのは一瞬でしたね。彼女の名前は……………あれ？何でしたっけ？」

「俺が質問したんだけどね。」

「待ってください。確か……………思い出しました！！彼女の名前はマゾングです！！」

果たしてそんな名前だったろうかと首を傾げるユウであった。

ネプテューヌside

ネプテューヌとコンパは鍵の欠片を手に入れた後リーンボックスに戻り食事にありついていた。

「お腹いっぱいですう。それにしてもねぶねぶそれだけで足りましたか？」

「うん。私はこれだけで充分だよ。コンパこそもっと食べていいよ。」

先程の一件でどこか遠慮ぎみなネプテューヌ。

「これ以上食べたら太っちゃうですよ。ならそろそろ次の大陸に行くですか？」

「そうしようか。早くしないとアイちゃんが戻って来るかも知れないしね。」

「ねぶねぶ縁起でもない事言わないでくださいです。」

「ごめんごめん。じゃあ接岸場まで行こうか。」

「はいです。」

……二人移動中……

「次の大陸で最後の欠片ですね。」

「なんだかあつという間だったね。」

「そうですね。たくさん苦勞しましたけどこれで「おーい！！コンパ、ねぶ子ー！！」……………！！？」

今までを振り返っていた二人の耳に突如世界一デンジャラスな少女の声が聞こえる。

「ねぶねぶー！！」

「走るよコンパー！！」

反射的に走り出す二人。

「ってこら何で逃げるのよー！！」

「LEDライトは使えないはずだから接岸場まで逃げきればー！！」

「はいですー！！けどお腹がパンパンで走るのが辛いですー！！」

「ああもう、こうなれば日輪の力を借りて今必殺のSUN・LEDライトー！！」

「「イヤー！！」」

アイエフのおでこに装着されたLEDライトよりとてつもない光量が放たれ二人は目を押さえて悶絶していたそう。

ベールside

ところ変わって教会に戻ってきたベール。そこに教会長イヴォワールが慌てた様子で駆け寄る。

「グリーンハート様大変です！！宝物庫に入っていた金品が何者かによって強奪されました！！」

「なんですって！！まさか私のお兄様の同人誌コレクションが！？」

「それは全く手をつけられていませんでした。」

「……………そうですか。それで犯人は判明していないのかしら？」

「犯人を目撃した者はありません。ただ空になった宝物庫からこれが……………」

イヴォワールはベールに一枚のカードを手渡す。それは……………。

「電気店のスタンプカード？……………まさか！？」

意外と犯人は近いところにいるかもしれない。思った。

ネプテューヌside

「まだ目がチカチカするです。」

「あんた達が逃げるからでしょうが！！」

「ごめんごめん。それにしてもLEDライト壊れてたんじゃないの？」

「臨時収入が入ってね。……………そうだコンパこれ余ったお金ね。はいどうぞ。」

アイエフは懷よりクレジットが大量に入った巾着袋を渡す。

「アイちゃんこのお金どうしたんですか!？」

その重量に驚きを隠せないコンパ。

「コンパ気にするだけ無駄だよ。アイちゃんだからって事で納得しよう。」

「そうですね。アイちゃんだからですね。」

「次の大陸に出発よー!!」

次の大陸、白の大地ルウィー。そこは女神ホワイトハートが治める大陸。

「私仕事をしたら負けだと思っの。」

「お願いだから仕事をしてくださいホワイトハート様。」

「だが断る!!」

そこにはニート女神がいた。

二人のスパッツ 忘れ去られた魔女（後書き）

突撃隣の晩御飯

ガスト「突撃隣の晩御飯、進行役のガストですの。今日お邪魔するのはラスティションのノワールさんと見せかけて天界のユウさんです。こんばんわー!!」

ユウ「まさかの俺の所に来るなんてガスト恐ろしい娘!!」

いーすん「それよりもどうやって天界に到達したのか聞くべきではないでしょうか？」

ガスト「今日の晩御飯はハンバーグカレー!! なんとという贅沢を!! 頂くですの!! がす、がす。」

いーすん「それは私のですよ!!」

ユウ「どうだガスト美味しいか? じつくりと煮込んだハンバーグをカレーライスの上に乗っけてみた。」

ガスト「これはぜひとも我が店舗に置きたいですの。」

ユウ「俺が料理を作るのは作るべき時と作るべき相手がいる時だけだ。」

ガスト「いずれガストの魅力で骨抜きにしてやるですの。それでは次回またお会いしましょう。今回はラスティションのノワールさんのお宅に突撃隣するですの。」

「ワ、まだ来ないのかしらせつかくラステーションの最高の料理人に晩御飯を作らせたのに。」

シルバーハート様ご乱心 その壺 増殖するケーキ（前書き）

執筆した物が全て消えてしまった。故にこの短さ勘弁してください。

シルバーハート様ご乱心 その壱 増殖するケーキ

天界の守護女神シルバーハート。その存在は謎に包まれる。そしてその力は正に天の裁き（笑）。そしてその見た目は可愛い美しい美少女。

果たして声変わりはしているのかすら怪しい高く綺麗な声。シルバーハートを見て恋する乙女、恋する男の子は数知れず。全てを魅了しつつしてやむを得ない。　　だが……………彼は男の娘だ！！（やりたかっただけ。）

シルバーハートは全てにおいて謎である。これはそんなシルバーハートが起こしたとある出来事の記録である。

「史書イストワールは言っていた人は美味しい物を食べると自然と笑顔になると。」

「……………言ってますん。」

それでは記録を開放しましょう。うおええええー！！

いーすんside

グリフォンが美しくさえずる爽やかな朝何故か天界の守護女神であるシルバーハートことユウの部屋のベッドで寝ていた史書イストワールは息苦しさにと目を覚ます。

「早く逃げてー！！って夢でしたか。……………とりあえずこの異常な光景は一体何なんでしょうか？」

イストワールの息苦しさの原因それは部屋に大量に積まれた正方形の箱達であった。大きさ的には1ホールケーキが一つ入る程度の大さき。既にベッドの上にまで進行していた。最早ミニマム史書のイストワールですら身動きが出来ないくらいである。

「一体なにが……………よいしょ、うんしょ。」

何とか身体を捻らせて脱出して箱の一つの上に乗っかるイストワール。

「とりあえず開けてみましょう。」

不思議に思いつつもイストワールは箱の一つを開けてみる。すると中から甘い匂いが漂ってくる。

「これはケーキですね。」

箱の中に入っていたのはみんなが大好きショートケーキであった。

「とりあえず頂きます。むしゃ、むしゃ。美味い!!」

イストワールは躊躇なく1ホールのショートケーキにかぶり付く。口の周りがクリームでベタベタになるのも構わずに。

「むしゃ、むしゃ。ほおああ!!」

半分ほど食らいつくすと一気にケーキを吸い込む。イストワールお前はどこの力。ビイだよ!!

「美味でしたね。こっちは……………チーズケーキですか。むしゃ、むしゃ。これはブッシュドノエル。丸かじりが基本ですね。がじがじ。」

「

次々にケーキを平らげていく。丁度五個目位だろうかさすがのイストワールも飽き飽きしだしたのか食べる手を止める。

「さすがに1ホールのケーキを五つは辛いですわね。少し身体を動かしましょう。」

イストワールは食いかけのケーキを放置すると食後の運動がてら本に乗って部屋を後にする。それにしても自分より大きな物を食べて大丈夫なのだろうか？

「まさかあの意味不明な書物が膨大に溢れている禍尾須図書館ですらケーキで埋まっているとは一体この天界で何が起きているんでしょうか？」

禍尾須図書館その広さはカオス。

「うわっ、ケーキが溢れでて来ました！！あそこはキッチンですね行ってみましょう。」

キッチンから溢れでたケーキ達はどんどん天界の隅々まで流れていく。このままでは天界に住むモンスター達がグルメになってしまう。イストワールはそんな危機感を抱いて「ませんよ。」……………キッチンに突入していく。

…いーすん突入中…

キッチンに突入したイストワールそこにいたのは……………。

「よく来たね、史書イストワール君。ハッピーバースデー！！」

ミニスカサンの我らがシルバーハートことユウであった。無論ス
パッツは着用済み。

シルバーハート様ご乱心　その壱　増殖するケーキ（後書き）

突撃隣の晩御飯

ガスト「突撃隣の晩御飯。進行のゲストですの。今日はラスティシヨンのノワールさんのお宅に訪問しているですの！！」

ノワ「今晚わラスティシヨンの女神ブラックハートのノワールよ。」

ガスト「今日の晩御飯は……………は、ハンバーグカレー。」

ノワ「奮発したのよ。さあ食べて行って！！」

ガスト「以上ラスティシヨンのノワールさんのお宅からお送りしたですの！！」

ノワ「待ちなさい何処に行くのよ！？」

ガスト「被ったら最悪ですの。」

シルバーハート様ご乱心！？その忒　ゲームギョウ界に降るケーキ（前書き）

今回のお話しはユウのキャラを崩壊させてみました。次回からはまた元に戻しますが。

シルバーハート様ご乱心！？その式 ゲームギョウ界に降るケーキ

突如天界に溢れだした大量のケーキ。そしてミニスカサンの我らがシルバーハート。一体この天界の未来は！？そして我らがシルバーハートに一体何が起きたのか？

イストワール side

「さてイストワール私は今何をしているのか分かるかい？」

「ミニスカサンのとてつもない勢いでケーキを作っています。」

「素晴らしいその通りだ！！そして今の私のマイブームそれは分かるかい？」

「ケーキ作りでしょうか？」

「さすがは史書だ。私の事をよくわかっている。実を言うと昨日テレビを見ていたら月間女神便りという番組で今時の女神ならケーキを作れなきゃ女神じゃないってあったものだから。つい昨日のお昼からずっとキッチンに閉じ籠ってケーキを作っていたんだ。」

「まさか徹夜ですか！？」

「まさしくその通りなんだよイストワール君。正直眠いよ！！最終的に私が作りあげたケーキの数は幾つだか分かるかい？」

「正直数えきれないですよ。10万個位でしょうか？」

「正解は11438万7578個だよ！！」

「一体貴方は何がかったんですか？」

「さあね過去の事は分からない、だが今の私の使命はわかるよ！！」

「その使命とは？」

「この天界に存在するケーキを全て下界に落とす！！」

「……………それを面白いと思ってしまった私は史書失格なんでしょうか？」

「そんな事はない。人は皆自分の中に存在する欲望によって行動している。今君がケーキを下界に落とす事を面白いと思った事もまた欲望。後は言わなくても自分が何をするかわかるね？」

「はい！！下界にケーキを落としましょう！！」

「エクセレントだ！！素晴らしいiiiiiiiiiiii！！」

後に下界に大量のケーキが落下したこの日をケーキ記念日と名付けられて毎年下界の住民達の期待を裏切る事が出来なかったユウが徹夜でケーキを作り下界に落とす事になるのはまた別の話である。

「ちなみになんでミニスカサントなんですか？私を誘っているんですか？発情させたいんですか？いいんですか？」

「おやイストワール君知らないのかい？ケーキを作る時の正装はミニスカサントだって決まっているんだよ。」

「……………ちなみにそれは誰から聞きましたか？」

「5pb・ちゃん。」

「ナイスです。会長!!」

「がんばって作ったんだよ手縫いで。」

ユウside

「ちなみにこのケーキの全てをどうやって下界に落とすか聞いてもいいでしょうか?」

まあ常識的に考えたら不可能だね。だけどさ俺には天界の頼もしい仲間達がいる。

「そこは大丈夫だ。まあ見てて。みんな出番だよー!!」

俺は天界中に響きわたる声でみんなに呼び掛ける。さて何分でくるかな?

「何も来ないじゃないで「GYAAAAAAAAA!!」って何か来たー!!」

イストワールは置いておくとして俺の目の前に大量のグリフォン達が降りてくる。

「皆元気そうで何よりだよ。さつそくで悪いんだけどこのケーキを下界に降らせまくってくれないかな?」

「GYAAAAAー(了解です姉御)!!」

おれは男なんだがまあいい。

「総員出動ー!!」

「「「「GYAAAAAAAAA!!」」」」

俺の出動要請をきいたグリフォン達は互いの身体にケーキが入った箱を乗つけると飛び立つ。

「御武運を祈ります。では私も行くでしょう!!」

「いろいろとツツコミたい事がありますがミニスカサント、さらには徹夜明けのハイテンションで何処にいくつもりですか？」

そこにイストワールより声がかかる。まるで水をえたドジョウのような顔で。

「日頃お世話になっている人達に直接ケーキを届けようと思ってね。」

「そうですね。もう私には貴方を止める事は出来ないんですね。」

「正直言って俺もベッドでゆっくり寝たいんだけど上からの圧力が凄くてね。」

「ご苦労様です。」

「ありがとう。ではカモン。REDちゃん!!」

「お待たせユウちゃん!!」

事前に頼んでいたREDちゃんが金色の龍の背に乗って現れる。

「といやつー!!」

そして私は颯爽と龍の背中に跨がる。ちなみにREDちゃんの後ろに。

「では行ってくるよイストワール君ー!!」

「はい、行つてらっしゃい。晩御飯までには帰つて来てくださいね。」

「了解だよー!!ではREDちゃん出撃だー!!」

「アイアイサーー!!」

そして俺は下界へと降りる。お世話になっている人達へとケーキを配りに。もしかしたら貴方のところにも行くかもしれません。ミニスカサントで異様なまでにテンションが高い男の娘が。

「ところでREDちゃん歌を歌つてもかまわないかい？」

「いいよー。私ユウちゃんの歌好きだから歌つてー!!」

「行きます。坊やー良い子や寝んねし」それは駄目だよユウちゃん確かに龍の背中に乗ってはいるけど危険すぎるよー!!下手したら著作権的な問題でこの小説が……。」「壊れちゃうよー!!」

ユウside

今現在私はラステーション上空にいるのだよ読者諸君。

「うわあ、凄いよ。ユウちゃんみんなキーキを拾うのに必死だよ。」

私はREDちゃんという言葉に下を見下ろす。確かに住民達がケーキを拾う姿が見える。

「素晴らしい！！皆自らの欲望に忠実にケーキを拾う姿。これぞまさに「人がごみのようだー！！」それなんか違う。」

L

REDちゃんの言葉に俺は疑問を浮かべるがまあ気にせずにケーキを配る為に龍の背中より飛び降りる。

「さあ皆ハッピーバースデー！！」

そして駆け出す。

「待ってよユウちゃん私も行くよー!!」

REDちゃんも私に続いて龍の背より飛び降りてカメラを片手についでくる。そのカメラで何をするかは私は聞かない。否定もしない。何故ならそれは彼女の欲望だから。

「ハッピーバースデー！！ハッピーバースデー！！……ん？」

しばらくケーキを配りながら走っていると一人の小さな男の子が懸命にケーキを拾うおうとする姿を見つける。その姿を見た俺の行動は決まっている。

「少年よハッピーバースデー!!」

「……………僕にくれるの?」

「受け取りたまえ少年!!」

「ありがとうサンタのお姉さん!!僕大きくなったらお姉さんみたいなサンタさんになるよ!!」

そう言つて少年は何処かへと走り去つていった。後にあの少年がラストেশヨンに現れるちびっこサンタになるのはまた別のお話し。

「また女と間違えられてしまった。だが今は……………ハッピーバースデー!!」

俺は再び走りだす。最後の目標であるラストেশヨンの守護女神のブラックハートの元へと。

ノワールside

「どうしたのかしら随分と外が騒がしいわね。」

私は今お兄様の写真が大量に壁に打ち付けられた自室にて優雅に読者中よ。

不意にドアがノックされる。私は少し驚きながらも扉を開ける為に近付く。

「誰かしら悪いけど仕事は全て終わらせたはず「ハッピーバースデーノワール!!」……………!?!」

私が扉を開けるが直ぐに閉めてしまう。何故かって？そんなの決ま
っているわだつてお兄様が可愛いらしいミニスカサントで現れたか
らよ！！普段ならそれこそお兄様の可愛い姿を見て無理矢理で
も押し倒して可愛がるところなんだけど纏っている雰囲気が普通じ
やなかったわ。あれは関わりと録な事にならないと私の身体が私の
心が警報を鳴らしている。だが私は怖いもの見たさにもう一度扉を
開けてしまう。

「ハッピーバースデーノワール！！「ごめんなさい！！」……………」
逃がさない。」

私は扉を閉めようとするが閉まらない。何故ならお兄様が自らの右
足を扉の隙間に入れて閉めようとするのを妨害する。そしてじわじ
わと扉を開けて入ってくる。

「ハッピーバースデー！！ハッピーバースデー！！ハッピーバース
デー！！」

そのハッピーバースデーに私は驚き扉から手を離し尻餅をついてし
まう。

「ご、ごめんなさいお兄様！！よく分からないけどごめんな「ハッ
ッピーバースデーノワール！！」え？ケーキくれるの？ありがとう。」

私にケーキをくれた後お兄様はそこから姿を消した。一体何だった
のかしら？

「私の好きなチョコレートケーキ。お兄様覚えていてくれたのね。」
箱を開けると中から出てきたのは私の大好きなチョコレートケーキ

だった。よくわからないけど何か特した気分ね。
ちなみに今日は私の誕生日ではないわ。

ベールside

今私は教会の自室の窓から外の様子を眺めているところですわ。

「まあ皆さんあんなに必死になってケーキを拾って。ふふふ。あの
人なんてケーキが顔にぶつかってクリームまみれですわ。」

とても面白いですわね。しもしもの皆さんの考える事は理解が出来
ませんわ。

「やはりゲームギョウ界は我々女神と選ばれた廃人のみによつて支
配されるべきですわね。」

そうですね。私が新世界の神に！！

私がそんな野望を企んでいる時でした。突如私の部屋の扉が開き誰
かが入ってきました。ですが私はその人物の顔を見る事は出来ませ
んでした。何故なら……………。

「そんな馬鹿げた野望を持ったベールなんて修正してやるー！！」

その言葉共に私は顔面にケーキをぶつけられて意識がブラックアウト
してしまつたからですわ。

「これは激写だね。」

その後聞こえてきた別の少女の声に私は意識を失うなか危険を覚えて
いました。

ブラン side

「仕事をしたらお腹が空いたわ。フィナンシェ何か食べ物を頂戴。出来れば甘いもの。」

「仕事ってまだ始めてからまだ10分たってませんよ。それにそんなに都合よく甘いものなんて「そんな貴方達にハッピーバースデー！」「へ？」

私がフィナンシェに甘いものをねだっていると突然教会の床が開きそこからミニスカサントのお兄様が現れる。ああしゃぶりつくしたい。

「はいどうぞ。」

「ありがとうございます。」

「それではハッピーバースデー！！」

そしてフィナンシェに謎の箱を渡すと再び床の中へと消えていった。

「いろいろと突っ込みべきところはあるけれどその中身はなに？」

「ケーキみたいですね。超巨大モンブラン。」

「モンブラン私の大好物ね。」

「とりあえずかぶり付きましょっかホワイトハート様？」

「違うはフィナンシェじゃぶりつくのよそのケーキをお兄様だと思
つて。」

コンパside

「ひいひいー！！ケーキが降ってくるですー！！」

皆さんこんにちわコンパです。今私はルウィーにいます。無論ね
ぶねぶ達も一緒です。私はお買い物の帰りだったのですが突然空か
らケーキがたくさん降ってきて雨宿り、じゃなくてケーキ宿りする
場所まで走っています。

「あ、いい所見つけたです。」

しばらく走っていると大きな建物、あれは図書館です。私はそこで
雨宿りをする為にさらにスピードをあげます。

「怖かったです。」

「大丈夫ですかお嬢さん？」

「はい、大丈夫です。ああ！！サンタさんです。可愛いです！！」

「ありがとうございますいつも愚妹がご迷惑を掛けているようで。
こちらをお納めください。」

私は可愛いサンタさんから箱を受け取りました。そしてその箱に目
を向てみると箱の中は苺のタルトでした。

「ありがとうございますです。ってあれ？いなくなってるです。」

タルトから顔を上げてサンタさんがいた所を見ようとしますがそこには誰もいませんでした。

「あの娘はまさか本当のサンタさんだったですね！！それにしても愚妹って誰でしょう？……………そう言えばねぷねぷがサンタさんの衣装持ってたです。もしかしてねぷねぷは……………」

??? side

白の大地ルウイーの雪山のどこかそこにはかつてシルバーハートによつて倒された先代の女神……………ま、ま、マゾ GANG？がいた。いや彼女だけではなかった。その回りには仮面を付けた四人がいた。

「これで勝てる。あの男にシルバーハートに勝てる。ふふふふあーはははははははははは！！」

マゾ GANG が笑い声をあげるなか仮面の四人が声をあげる。

「何処だ、俺のボタンは何処だー！！」

「ああ闘いてえ。死が間近で感じられる闘いがしてええええええええええ！！」

「ふん、愚かな奴等め。それにしても……………ナアナアリイイイイイ！！」

「何処かにいないのでしょうか？とても可愛らしい男の娘は。いたら私好みに調教しますのに。」

四人とも何やら危険で意味不明な事を言っていた。

この四人とマゾガングの関係はそれは本編で。

そして奴等の前にミニスカサントが現れる。ただし……………。

「ハッピーバースデー！！！！！！」

緑色にグリーンモードになっていた。無論ミニスカサントで。そして大量の分身を作り出していた。

「貴様はシルバーハート！？どういふつもりかは知らんが丁度いい。貴様等奴を叩きのめせ！！」

マゾガングが仮面の四人に命令を下すだが……………。

「俺のボタンー！！」

「あのサントかっこいいいいいい！！」

「あれはまさしく俺の妹になるべき存在だ。妹を欲しているのは撃たれる覚悟がある奴だけだ！！」

「まあまあなんて可愛い男の娘なんでしょう。首輪を付けてイヌ耳付けて調教したい！！そしてあんなことや、こんな事を！！ああ想像しただけで涎が。じゅるり。」

命令を全く聞いていなかった。

「肝心な時に役に立たない奴等が！！仕方ないこうなれば私自ら「ハッピーバースデー！！」ぐばあ！！」

マゾガングが自らユウに攻撃を加えようとするが一人のユウがケ-

キを取り出してマゾガングの顔面にぶつける。

「ハッピーバースデー！！」

そして一人のユウをかわきりに分身のユウ達がケーキを投げつける。ちなみにこれは本物のケーキではなくてろう細工作った偽物なので安心してほしい。

結果マゾガングがどうなったかはご想像にお任せする。

ユウside

「た、だいまイストワール。」

俺は全ての配達を終えてREDちゃんに天界まで送ってもらった。無論REDちゃんにはお土産のケーキを持たせて。

「お帰りなさいユウ。早く晩御飯を作ってください。私お腹ペコペコです。」

「悪いけどこのケーキで済ませて。流石にもう限界。シャワー浴びたら寝るよ。」

「またケーキですか。わかりましたそんなにボロボロの貴方に頼む訳にもいきませんね。ではこのケーキいただきますね。」

「うん。どうぞ食べて。」

俺はイストワールへの返答もままならないままフラフラしながらシャワーを浴びてジャージに着替えてベッドにダイブする。

「そういえばろう細工のケーキが一つ余っていたはずあれは飾っておこう。踏んで怪我したら元も子もないもんね。」

俺はろう細工のケーキが入った箱を取り出して中身を取り出す。だが可笑しな事に気付く。

「甘い匂い？どれどれ。ペロリ、甘い。これは本物？ならばろう細工のケーキは何処に？」

そういえばイストワールにケーキを渡しような……………。

「ギャー！！歯が、歯がー！！」

どこからともなく聞こえてくる悲鳴。

「もういいや。寝よう、おやすみなさい。」

そして俺は最早めんどくさくなりそのまま眠りにつく。
明日は普通の一日を送りたいな。

シルバーハート様ご乱心！？その式 ゲームギョウ界に降るケーキ（後書き）

突撃隣の晩御飯

ガスト「突撃隣の晩御飯。うつぷ、進行のガストですの。うおうつ
！？」

5pb.「大丈夫ガスト！！」

ガスト「蹴りを入れないでほしいですのー！！」

5pb.「いいきみだよ。天罰だね一人でシルバーハート様のケーキを食べちゃうんだからね。さあ覚悟はいい？」

ガスト「ガストは死にたくないですのー！！」

この後ガストの姿を後書きで見たものはいなかったそうなの。

主人公紹介MEGAMAX（前書き）

これが真の主人公だー！！

主人公紹介MEGAMAX

・ユウ

妄想C V宮崎羽衣

髪の毛の色は白、長さは腰まで届く位。
目の色は青。

身長は162cm

体重は40kg

服装は半袖で黒色の無地のシャツの上に白いフード付きのパーカーを羽織っている。下は膝上3cmのスパッツの上から黒色の短パンを履いている。しかし短パンは太ももの半分ほどの長さしかない。ちなみにスパッツを長時間履かないでいると精神と肉体が幼くなる。

元々は人間であつたが下界にいた頃並々ならぬ闘いや人助け（結果的にそうなっていた）を繰り返すうちに人々に戦女神やヴァルキュリア、戦乙女等の通り名で呼ばれしだいに信仰されていった。とある時その通り名と見た目故に四英雄がユウを女神と勘違いをして天界へと連れて行く。そのまま取り残されたユウは下界で大量に得た信仰と共に自らの身体をモンスターとの闘いを経て女神へと変革させる。本人は史書イストワールと出会うまでその事実を知らなかった。

炊事洗濯が得意等の家庭的な面もある。押しに弱く妹達に押され気味である。基本優しい性格だが限界が来て怒ると恐い。それとユウ

には独特のマイブームがありそれによってやり過ぎて周りを唾然とさせる事も少なくない。

実はホラー映画やお化け屋敷、肝試し等怖いものが苦手。

使用する武器は主に双剣。基本どのような武器でも使えるが今の武器のマイブームが双剣の為にそれ以外あまり使用しない。

現在の装備している武器

・片手剣―零刹那

・片手剣―菊壺紋字

この二つは元々一つの剣だったが、あまりにも危険な妖刀であり人々に多大なる害をもたらした為に女神になる前のユウが二つに分けてその力を封じた。二つの刀を連結させる事は可能だがユウ自身でも女神化なしでは妖刀の力を制御しきれない為に女神化直後でもないと使用する事はほとんどない。

インフィニット・スラッシュ

双剣の柄をユウが本来とは違う連結の仕方でも無理矢理安定させて薙刀のようにして使用する。その際に放つ事が出来るのがインフィニット・スラッシュ。圧倒的なスピードで対象の全てを斬り裂く。

銀色流星脚

対象を999回高速で蹴ったり殴ったりした後上空に飛び上がりそのまま急降下してその勢いで必殺の蹴りを叩き込む。

真打・童子切安綱

零刹那と菊雫紋字を連結させ真価を発揮した妖刀。使い手の血肉を糧にして力を発揮する。いくら鍛えた人間でもましてやネプテューヌ達女神でもその力を全力で使おうとすれば最後に待っているのは死のみ。シルバーハートと化したユウでさえ全力で使用することは恐れ禁忌としている。

鬼牙絶刀

童子切安綱の力を100%解放して放つ必殺の一撃。その威力は女神と言えども一瞬にて絶命させる力を持っている。

・シルバーハート

・見た目

変身前から髪の毛は白から銀色に変わる。（髪の毛の色の変化にはなかなか気づいてもらえない。）

目の色は金色に変化している。

・プロセッサユニット

シルバプロセッサユニット

見た目はノワールと色違いで銀色。背中についているプロセッサのみ光の羽のようなプロセッサユニット。

身長、体重の変化はない。

武器は双剣のままだが菊雫紋字と零刹那は黒から銀色に変化している。女神化の時のみ真打・童子切安綱が制御可能となる。

変身後にはいくつかの能力がある。

ひとつは絶対領域。絶対領域の前ではどのようなスキル、能力、奇跡さえも操ることが可能。（言わばチート）

二つ目にモードチェンジ。

・怒りの赤・レッドモード

ユウが怒りの感情を爆発させた時に発現するモード。

全体的に能力がアップする。見た目は通常モードと変わらないがプロセツサユニツトの色が赤色になっている。瞳の色も赤へと変化している。

接近戦も得意だが主な戦闘距離は中距離～遠距離。戦闘に使用する武器はガンブレード・紅

・ガンブレード・紅見た目はFF8のスコールレオンハートが使っているガンブレードの色違いで赤色。

これには二つの弾薬があり一つは通常の魔力を込めた通常弾。これには大した力はなく12個全てリロードしてもマジエコンヌを瞬殺出来る程度。

二つ目にユウの怒りの魔力を込めたレッドブレード。これは一つ一つにかなりの魔力があり12個全てリロードするとゲームギョウ界すら崩壊させる力がある（本人も試した事がないため実際には不明だが。）。

・ワンオフディゾルヴァー

TOGのソフィのゼロディゾルヴァーと全く一緒。炎となりて駆け抜けて敵を穿つ。

・フレイムデスバニツシュ

対象を羽交い締めにして空中へと飛翔して高速回転させて多大なるGをかけた後そのまま地面に頭から激突させる。（仮面ライダー龍騎に登場する仮面ライダーベルデのファイナルベントと全く一緒。）

・優しさの緑 グリーンモード

足のプロセッサユニットと身体に纏っているスパッツスーツ以外のプロセッサユニットを外しプロセッサユニットの色は緑へと変わっている。瞳の色も緑色に変わっている。

スピードが上がるがその分防御力が下がる。その為に一撃でも当たればダメージは大きく危険な状態になる。主な戦闘距離は中距離、接近戦。

使う武器は通常形態と同じで零刹那、菊壺紋字。この二つを逆手に持ち使用する。このモードの時のみ特殊能力として質量を持った分身を任意の数だけ作り出すことができる。

そして通常の1000倍のスピードを出すことができる。通称超高速。(三分間のみ使用可能で連続での使用は不可能で再度使用するには一度女神化を解くかまた三分間待つ必要がある。ユウは時折力ツブ麵を作る際に使用している事がある。三分計るために。

クラックアウトブレイク

対象を超高速で翻弄して一気に相手の懐まで入り超高速の勢いを付けた蹴りを1秒に1000発叩き込む。

主人公紹介MEGAMAX（後書き）

後から追加予定です。

最強と脆弱 現れる影（前書き）

最早カオス。そしてオリキャラは出さないと言いましたが出します。敵側に四人。

最強と脆弱 現れる影

ネプテューヌside

現在ネプテューヌ一行は白の大地ルウィーを訪れていた。

「では今日こそ教会に行くですよアイちゃん、ねぶねぶ!!」

「張り切ってるわねコンパ。」

「うん。コンパの言う通り今日こそ教会に行かないとね。今日はケ
ーキも降ってこないしちゃっちゃと行こう!!」

「ねぶねぶ駄目ですよ。そんな態度では一人前のサンタさんにな
れないですよ。」

どうやらコンパはあのミニスカサンタとの出会い以来ネプテューヌ
がサンタの妹であると思い込んでいるようである。

「ねえコンパ。記憶がない私が言っても説得力はないかもしれない
けれど。いくらなんでもサンタさんの妹はないと思うよ。」

流石のネプテューヌも困惑気味であった。

「サンタさんはいるですよ!! 私会ったです!! ミニスカートのサ
ンタさんに。」

「ねぶ子こうなったら多分真実を知るまでどうしようもないわよ。
とりあえず教会に行きましょう?」

「そうだね。教会で女神様に会って鍵の欠片の事聞いてみようか。」

「そうと決まったらさっそく出発です!!」

「……………」

終始コンパに押され気味の二人であった。

ネプテューヌ一行移動中……………

教会前についたネプテューヌ一行だったがそこで立ち往生する事になってしまふ。何故なら……………。

「これって冗談、じゃないわよね。」

「うわぁ、人が一杯だね。」

「これっていったい何が起きてるんですか!？」

三人が目にした光景それは暴動だった。

「出てこい女神!!」

「謝罪しろ!!」

「仕事をしやがれ!!」

その他にも酷い暴言が吐かれていた。それだけではなく、教会の中に石を投げ込んだり、中には剣等の武器を持つ者までいる始末である。

「よくわからないですけど止めるです!!」

「待ちなさいコンパ!!今出て行ったとしてもあの暴動を私達だけで止める事なんて出来ないわ!!」

暴動を止めようとして飛び出そうとするコンパの手を掴み引き留めるアイエフ。

「出来るですよ!!サンタの妹であるねぶねぶなら!!」

「ええ!!私が止めるの!!」

「さあ行くですよねぶねぶ!!」

「うわあ!?!ちょっと押さないでよコンパ!!」

「こらっ!私まで押さないでよコンパ!!LEDで蒸発させるわよ!!」

何やかんやの押し問答を繰り返すネプテューヌ達。そんな事をしている間にも暴動は激しさを増して行く。

「おい皆扉をこじ開けるぞ!!」

「おお!!」

さらには暴動に参加している大勢の人達が教会の扉を力づくでこじ開けようとする。このままでは教会が大変な事になってしまう。そんななかネプテューヌ達はというと……。

「ねぶねぶ早く止めるです!!それでもサンタ候補生ですか!?!」

「なんなのそれ、私聞いてないよ！？アイちゃんこうなったらLEDライトでバーンとやっちゃって！！」

「馬鹿いわないでよ！！こんなところで使ったりしたらアイツに氣付かれるわ！！」

何やら押し付け合いをしていた。

「よし！！扉が動いてきたぞ後もう少しだ！！」

無論そんな事をして暴動は収まらない。教会の扉も開きかけて全てが終わるかと思われたその時……………。

「みんな暴動なんて止めてボクの歌を聞けー！！」

くエレキギターをかき鳴らす音共にどこからともなく一人の青髪の少女のが現れ 歌を歌いだす。

その少女こそが……………。

「まさか……………終わったわ私の人生。まさかよりにもよって会長と出会うなんて。SSH最強の存在に……………」

そう彼女こそシンガーソングライターでありSSHを立ち上げた女神を除けばこのゲームギョウ界最強存在のspbちゃんであった。

「良い歌だな。何だかこんな事するの馬鹿らしくなってきたな。」

「さっさと帰ろっぜ。」

「そうだな。」

彼女の歌を聞いた暴動参加していたが穏やかな顔になって帰路へとつく。

「綺麗な声。歌でみんなを止めるなんて凄いよ!!」

「本当です!! ねぶねぶもサント候補生ならこれくらいは出来ないと駄目ですよ。」

コンパとネプテューヌが5pb.ちゃんの歌を誉めちぎる? なかアイエフの様子がおかしかった。身体をガクガクと震わせて顔が真っ青である。

「いや、私まだ死にたくない。」

「おや? そこにいるのはもしかして会員No.2のアイエフ? てつきり粗大ゴミかと思っちゃったよ。」

5pb.ちゃんはアイエフを見つけると先程の歌を歌う時の優しい表情は何処に行ってしまったのかと思うくらいの冷たい目でアイエフを見ていた。

「ヒイヒイヒイヒイ!!」

「逃げるなんて何かやましい事した証拠だね。ふんっ!!」

直ぐ様逃げようとしたアイエフに5pb.ちゃんは自らの相棒であるエレキギターを投擲する。

「あべし!?!」

直撃こそしなかったがエレキギターはアイエフのコートの襟首を捕

らえてそのまま近くにあった木にアイエフを貼り付ける。

「さあてお仕置きの間だねNo.2?」

「待つてよ会長!!私何か悪い事をしたとでもいうの!？」

「ボクが知らないとも思っているのかな?君が犯した罪の数々を。」

「な、何の事かしら?」

「あくまでしらばつくれるつもりなんだね。ならばリンボックスでの教会襲撃、ラストイションでのLEDライトによる無差別テロ、さらにはプラネテューヌでのLEDライトの強奪。全てボクは知っているんだよ。」

「そんなどうして!？」

「どうしてバレたのかなんてつまらない事聞かないでよね。とりあえずSSHのルールに乗っ取りシルバーハート様のご迷惑となるようなことをした場合罪一つにつきボクの蹴りを500発行くよ!!」

「いやああああ!!」

何やらネプテューヌとコンパの目の前で話しは進んで行くが二人は5pb.ちゃんの変貌にただただ呆然とする。そしてアイエフが処刑もといお仕置きされるのを黙って見つめる事しか出来なかった。

「はっ、ふん、てりゃ!!」

「へぼっ!!ぐぶっ、げぶん!!」

貼り付けにされたアイエフに5pb・ちゃんは容赦なく連続で蹴りつけていく。最早速すぎて足の動きが見えないくらいである。

「アイちゃん安らかに成仏してくださいです。」

「それにしてもえげつないねうわっ今更に足の動きが加速したよね？」

5pb・ちゃんによるお仕置きそれは悪い事一つにつき500回の蹴りを入れられるという単純な物。だが5pb・ちゃんは普通ではない。その力は女神さえも凌駕するかもしれないほどである。故に一秒に100発の蹴りを入れる事ができる。

そして蹴りを入れる箇所は全て一定の箇所にしぼられている。そう顔面へと。

「ヒイヒイヒイヒイ！！もう見てられないです！！」

「これは流石にやり過ぎじゃあないかな？」

「そんな事はないですよ。あれくらい何時もの事ですよ。」

コンパとネプテューヌが流石に引いているとそこに一人の女性が現れる。そう彼女こそ……………。

「どちら様ですか？」

「おお綺麗なお姉さんだ。スパッツに興味ある？」

「これは失礼しました私白の大地ルウィーの教祖を勤めさせてもらっていますフィナンシェです。」

「う」丁寧にありがとうございます。私はコンパです。」

「私はスパッツ美少女ネプ」それでお二人は我が教会にどのようなご用件でしょうか？」流さないでよ！！」

流石フィナンシェ伊達にSSHの常識人を行っているわけではない。ネプテューヌの危険性を直感で理解して軽く流す。

「はっ！！ふん！！せええい！！」

「ぎゃぼっ！！へぼっ！！ぐほ！！」

「私達実は鍵の欠片というアイテムを探しているんですけど女神様が何か知らないか聞きに来了です。」

「そうなんだよちなみに私はスパ」まあホワイトハート様を頼ってくれる人がまだいたなんて！！」お姉さんどうやっても私に語らせないつもりだね。」

5pb.ちゃんによるアイエフのお仕置きもとい処刑をBGMにフィナンシェ、コンパ、ネプテューヌの三人は話を進める。どうやらネプテューヌはフィナンシェに予防線を引かれたようだ。

「え？どういう事ですか？」

「女神」とりあえず教会に入りませんか？ここにいたらあれに巻き込まれますよ。さあ早く行きましょう。」スパッツ言わせて！！」

フィナンシェは処刑の危険性を提示してコンパとネプテューヌを少し強引に教会に押す。そして今回ネプテューヌの出番は大幅に削減

される事は確定事項となりかけていた。

ネプテューヌ一行移動中

「それではここでお待ちください。ホワイトハート様を呼んで参りますので。」

ネプテューヌとコンパはフィナンシェによって教会の応接間案内されていた。フィナンシェは二人を案内した後そのままホワイトハートを起こしにいったようである。

「ねえコンパ。ホワイトハート様ってどんな人なんだろうね？」

「私も会った事がないから分からないですからわからないです。けどねぶねぶはサント候補生として恥ずかしくない態度で対応するですよ。」

「コンパまだそれ引つ張ってたんだ。」

ネプテューヌがコンパの思い込みの激しさはどうしたものかと頭を捻らせている時だった。

「ホワイトハート様いい加減に起きてください!!!もうお昼ですよ、いつまで寝てるつもりですか!？」

「……………あと半年。」

「何言ってるんですか目が腐りますよ!!!」

「大丈夫よ替えが幾つかあるから。」

「ありません!!!」

「え？フィナンシエはないの？」

「当たり前です。」

「……………ぐう。」

「だから寝ないでください！！」

「……………。」

「ああもう！！いい加減に起きろやこの駄女神！！」

「……………んぐつ！？」

「目が覚めましたか？」

「覚めたけど鳩尾がいたいわ。」

「自業自得ですよ。さあ早く着替えてください。」

「悪いけど寝間着のまま行くわ。いざ出発。」

「ま、待つてくださいホワイトハート様！！」

ドタドタと二つの足音が応接間に近づいてくる。

「待たせたわね。私がこの大陸の女神ホワイトハートよ。さあ崇め称えなさい。」

応接間の扉を開けてネプテューヌとコンパの目の前に現れた一人の少女。

彼女こそこの白の大地ルウィーの守護女神ホワイトハートだった。

「これ以上シェアが下がるような事は止めてください！！ふん！！」

「いたい！！いたいフィナンシェ！！腕の関節が外れる！！」

寝間着でフィナンシェに関節技を掛けられてはいたが。

??? side

何処か近くて遠い場所そこには仮面を付けた四人がいた。

「さあて皆さん集まりましたね。今より定例会をはじめますよ。」

仮面を付けた一人が口を開く。声から判断するに若い女性のようにある。

「ふん、今更何を話し合うと言った？我々は各自勝手に動く事で決定していた筈だが？」

さらに二人目。これは男の声である。

「ボタン、ボタンがー（俺のボタン集めを邪魔しないでほしいのだが）。」

何故かボタン、ボタンと連呼する男。どうやら他の三人にはこの男が何て言っているかわかるようである。

「うつせえよ！！何でもいいさつさと闘わせろよ！！それともお前等が相手してくれるのか！？ああ！！」

最後に苛立ちを隠さない仮面の小柄な身体の男。

「低脳な奴め。」

「何だと！？やる気がシスコン野郎が！！」

「あらあら止めてくださいね。今は私達が争っている場合ではないんですからね。」

言い争いを始め一触即発の空気の二人であつたが仮面の女性の言葉に嫌々ながらも従う様子を見せる。どうやら彼女はこの中でも彼らを抑えるだけの何かを持っているようである。

「ちっ！！くそが！！」

「ふん、それで議題は何だ？」

「ボタン（確かになんなんだ）？」

「現在白の大地ルウィーのシェアが最底辺まで下がっています。なーのーで女神ホワイトハートを殺してルウィーを私達の拠点にしたと思います。」

「ほー。確かに拠点は必要だな。ところでルウィーの少女達は全て私の妹にしても構わないよな。」

「構いませんよ。それとその戦闘狂さんルウィーに行つて女神を殺してきてくださいね。」

「おもしれえええ！！女神は強いんだろ楽しめそうだ！！」

「そのシスコン野郎、貴方は彼のバックアップに付いてください
ね。」

「命令なら従うさ。」

「ボタン、ボタン（俺はどうすればいい）？」

「ボタンさんはここで待機してくださいね。マジエコンヌのご機嫌
取りもしなくてはいけないので私は動けないのでこの防衛は任せ
ました。」

「ボタン（承知した）！！」

「それでは皆さんの働きに期待します。」

その言葉に三人が席を立ち何処かへと去ろうとするがそこに再び仮
面の女性より声がかかる。

「最後に言い忘れていましたが銀色の女神、シルバーハートのユウ
ちゃんには手を出さないでくださいね。あれは私がもらいますので。」

「

どうやら我らが主人公はまたもや厄介な奴に目をつけられたよう
である。

最強と脆弱 現れる影（後書き）

ユウちゃんの何でも相談室

ユウ「ガストが全治1ヶ月の怪我の為に俺が変わりにコーナーを任されました。ではおはがきを紹介しましょう。」

ぺらっ

「まず一枚目パープルな妹さんより私の出番はまだですか？でどうなのトマト？」

トマト「この小説が50話までいけば出れるかもね。」

ユウ「それは不可能だね。という事でパープルな妹さんは諦めてくださいね。では二枚目。」

ぺら。

ユウ「とある四天王の一人さんよりユウちゃんは女神になる前には何をしていたの？言ってもいいの？」

トマト「軽くぼかしてね。」

ユウ「俺はね昔正義の味方と呼ばれたこともあれば歩く災害とも言われた事もありますよ。」

トマト「そろそろ時間だよスカーレットピンク。」

ユウ「何故貴様がその名を！？まあいい。次回があつたらまたお会いしよう。」

崩壊の白の大地　そして少女は青くて赤い（前書き）

今回少女率が高いかも……………。

崩壊の白の大地　そして幼女は青くて赤い

カオス side

今現在ルウィーの教会の応接間は緊迫した状況であった。例えるならば今まさに破裂仕掛けている風船の様に。

「ネプテューヌてめえよくも私の前に顔をさせたなあ!!」
怒りを隠す事もなくネプテューヌにぶつけるホワイトハート。

「駄目だっと言いましたよねそんな口の聞き方をしたら? 梅干しいきますか?」

梅干しそれはフィナンシェがシルバーハートより伝授された対ホワイトハートへの切り札。ホワイトハートのこめかみを両側からぐりぐりと握り拳ですりつぶす事である。

「ごめんなさい。調子に乗りすぎました。だから梅干しは止めてください。」

「わかったなら。もう一度。」

「ネプテューヌ又貴女よくも私の前に顔を出すことが出来ましたね(棒読み)。」

「とりあえず私は何処から突っ込めばいいのかしら?」

とりあえず何で貴女は変身しているんだいネプテューヌ?

「私に聞かれても困るですう。」

「いやああああ!!」

「ボクの蹴り50000発それがNo.2君の罪の重さだよ。」

「どうやら処刑もいいやもう処刑でいいやも終わったようである。壁をぶち抜いて5pb.ちゃんとアイエフがネプテューヌに合流する。」

「とりあえずお二人はお座りください。」

「ありがとうフィナンシェ。ふんっ!!」

フィナンシェに礼を言いつつアイエフを投げ飛ばして丁度コンパが座っているクツシヨンの隣座らせる。その後さらにアイエフの隣に5pb.ちゃんは腰掛ける。

「5pb.てめえ人の教会の壁壊しておいて詫びの一つくらいは言わねえのかよ!!」

「……………」

「っ!?!お詫びのひとつくらいないのかしら?」

「謝罪よりも今はこの混沌とした状況を何とかしようか?ふん!!」

何処から取り出した林檎を握り潰す5pb.ちゃん。飛び散る果汁。そして沈黙するみんな。

情報整理中……………。

「ネプテューヌさんは記憶を失ったスパッツなんだね？」

「その通りよ。意外と話がわかるわね5pb。」

「ホワイトハート様もしかしてネプテューヌさんの事知っているんじゃないんですか？」

「……………ええ知っているわ。でも教えるつもりは「ホワイトハート様これはチャンスですよ。」いきなり何フィナンシエ？」

「ここで本当の事を彼女達に言えば感謝されてホワイトハート様の評判が上がりシェアが上がる事は間違えないですよ。」

「……………なるほど貴女策士ねフィナンシエ。わかったわ本当の事を言うわ。」

「いろいろとツツコミをいれるべきなのでしょうけれどまあ記憶が戻るならかまわないわ。それで私は一体何者なの？」

「ネプテューヌ貴女は……………」

「私は……………」

辺りが静寂を包む。

「きつとねぶねぶはサンタさんの妹のサンタ候補生です。」

「まあ、それはないでしょくばらっ!？」

「君は黙ろうかNo.2。そして空気を読もうか？」

「ネプテューヌ貴女は紫の大地プラネテューヌの守護女神パープルハートよ。」

??? side

ルウィーの街に一人の少女が立っていた。年齢的には9〜10歳前後であろう。その姿は美少女といっては差し支えないだろ。その身を包むのは黒のゴシックローリータ。

そしてその目は黒く淀んでいた。何も映す事もなく。ただ呆然と立ち尽くしていた。

「どうしたんだいお嬢ちゃん？」

そんな少女に近付き声をかける中年の男。きつとこいつはロリコンである。

「……………これ全部壊していいのかな？」

「ん？すまないねもう一度聞いてもいいかな？」

「貴方を壊していい？」

「え？ひつ。わ、私の腕がー！！」

その言葉と共に少女が何処からか取り出したその体つきには似合わない大剣で中年の男の手首を斬り落とす。男の斬られた手首から溢れでた血が少女の身体に降りかかる。すぐに少女の身体はその青く長い髪は血に濡れる。その光景に辺りが騒然となる。悲鳴を上げて逃げ惑う人々。そんな中少女は呟く。

「何処にいるの女神は？私は女神を殺さなくちゃいけないの。ねえ何処にいるのホワイトハート？」

カオス side

真実を伝えたホワイトハートは現在。

「痛い痛いー！！という事だよフィナンシェ！！ちゃんと話した
だろぅがつていたたたたた！！」

「真面目にやつてくださいつて言いましたよね？」

その真実をみんなに信じられずフィナンシェにシルバーハート直伝
の梅干しを受けていた。

「やつぱりねぶねぶはサンタさんの妹なんですよー！！」

サンタさん説を押し通すコンパ。

「シャウトしろー！！ライティングスパークー！！」

「ひぎゃー！！」

何故か r p b . ちゃんによってギターを突き刺されて身体に電流を
流されていた。

「結局私の正体は分からないままなのね。まあいいわ、ところでホ
ワイトハート様鍵の欠片っていうアイテムに聞き覚えはないかしら
？」

「それより早く助けるー！！」

「またそんな乱暴な口調で。駄目ですよ。」

「ぐっおおお!？」

「……………とりあえずフィナンシェ止めてあげてちょうだい。話が進まないわ。」

「仕方ないですね。ちゃんとしてくださいねホワイトハート様?」

「……………私は正直に言ったのに。」

「とりあえずもう一度情報を整理しようか?」

「会長いつか殺す!!ぐはあああああああ!!」

再度度情報整理中……………。

シリアス side

「何処、何処なの?」

何かを探しながら自らの持つ大剣でルウィーの建物を破壊する幼女。そのままこの小説の力オスも破壊してもらいたいものである。

「いない、何処にもいない。女神かくれんぼ?」

首を傾げて大剣を振るう少女。瓦解の音を立てて崩壊する建物。よく見ると火の手まで上がっている箇所もある。

『にゃー、にゃー。』

「これは何？」

崩壊した建物から猫の鳴き声が響く。それを見つけた少女はしゃがみ込み猫を掴みあげて不思議そうに見詰める。どうやら猫は怪我をして動けないようである。その証拠に足から出血している。

「……………女神じゃない、壊すね。」

『ギニヤー!!』

そのまま猫を地面に叩きつけると少女は大剣を猫に振りおろそうとする。

「やめろー!!」

「……………!!?」

だが大剣が今まさに猫の身体を真っ二つにするかと思われたとき少女の大剣に何かが投げつけられて爆発を起こす。そして少女は大剣ごと吹き飛ばされる。

「日本ーいくら何でもダイナマイトをぶつけるのはやり過ぎですのー!!」

「大丈夫ちゃんと手足がもげるだけで済む様にしたから。」

「余計に駄目ですよ!!」

「おおー!! 激写だ、スクープだー!! 少女がルウィーの街を破壊しているー!!」

「REDも自重するのです!!」

幼女にぶつけられたのは日本一のダイナマイトであった。
ガストはツツコミながらも猫を拾い傷の手当てをする。REDちゃんはカメラを持って何故か写真を物凄い勢いで撮る。

「……………痛い。」

ダイナマイトを受けた筈の幼女は瓦礫をおしのけて何事もなかった様に起き上がる。

「に、日本一のダイナマイトを受けて傷一つないのです!!」

「最近の幼女は凄いだねえ。」

「ならもつとぶつけるだけだよ!!喰らえジャステイスダイナマイト×6!!」

ガストの驚きとREDちゃんの幼女最強発言を華麗に無視して再びダイナマイトをぶつける日本一。

「……………痛い。っ!?!ち、血が血が血が血が血が血が血が血が!」

ダイナマイトを6発受けて軽くよろめく幼女。あれだけ受けて額からの出血だけですんでいる。ついでにダイナマイトでさらに崩壊するルウイ。

「私のダイナマイトを受けてまだ地に足をつけていられるなんて! ?こうなればアトミックバズーカを使うしか……………」

「使つなですの!!それよりも突っ込むべき場所は別にあるですの

「!!」

「あの幼女今の内に潰すか……………」

「意味深な発言するなですの!!! 突っ込む身にもなるですの!!!」

ガスト達が漫才をしている間にも幼女の様子は変貌する。

「あああああああああー!!!」

幼女の美しかった青い髪はまるで血のような赤い髪に。黒く淀んでいた瞳は赤く狂気を孕んだものへと。そして青いゴシックローリタも赤く変貌する。

「てめえらよくもやってくれたなあ!!! 女神を殺す前にぶち殺してやるよ!!! この俺様がな!!!」

日本一達の前に現れた謎の幼女。彼女は一体何者なのか? そして日本一達の運命は……………。

「名乗られたからには名乗り返す私はSSHのNo.3、ゲームギョウ界の正義の味方日本一!!!」

名乗った日本一の背後で事前に仕掛けていたダイナマイトが爆発する。そして新たに倒壊する建物。

「私は自称ユウちゃんの嫁。SSHのNo.5ロイヤルエンペラードラゴンのREDちゃん!!!」

ポーズを決めたREDちゃんの背後でやはりダイナマイトが爆発する。そしてまたもや倒壊する建物。

「シルバーハート様の弟子、SSHのNo.4のガストですのって

「キャー!!」

何故か爆発のタイミングとが早くて名乗りの途中爆発に巻き込まれるガスト。

「「我らSSH!!」」

今までと比べものにならない爆発が起こりさらに崩壊するルウィー。そして爆発のなかに消えたガスト。

そしてその名乗りを見ていた少女は……………。

「かつこいいいいいいいい!!」可笑しな事になっていた。

ユウside

場所は変わって天界

「…………… 妙だな。」

「私への愛がですか？」

「違う!!何だよお前への愛が妙って!!」

「さあ？」

「くっ!!? 落ち着け俺。ここで怒ったらイストワールの思う壺だ。」

「それで何が妙なんですか？」

「まあいい。イストワール、今ルウィーに存在する女神は何人だ？」

「ネプテューヌさん、ブランさんの二人ですけど。」

「そっだその通りだ。いや先程までそうだった。」

「言いたいことがわからないのですが？」

「……………3人だ、つい先程一つ増えた。」

「それはあり得ません！！ノワールさんもベールさんも自分の大陸から離れていません。」

「俺もここにいる。ならば……………。すまないがルウィーに行ってくる。後は任せたよイストワール。」

ユウは転移魔法にてルウィーへと向かう。

「行ってしまいましたか。しかしルウィーに一体何が？まさかマゾゴングが何かを……………」

謎は深まるばかりであった。

崩壊の白の大地　そして少女は青くて赤い（後書き）

今回出てきた少女さんの容姿はうみ。このなく頃のベル。カステルです。

ちなみに後書きのコーナーはガストが行方不明な為にしばらく中止です。

スパッツと少女と時々熊さん（前書き）

もう自重なんてしない!!

スパッツと少女と時々熊さん

ユウside

現在俺は瓦解したルウィーの街に来ていた。
そして……………。

「あの赤い少女から女神の反応が有りか……………」。

俺は崩壊した建物の中から赤い少女とREDちゃんとダイナマイト少女の鬨いを覗き見る。

「あの少女強いな。SSHの実力者である二人を相手にしていて圧倒されるどころか逆に圧倒するとはね。」

新たなチートの誕生というわけか。

それにしてもどうしたらいいのやら、下手に介入してネプテューヌ達に気付かれたら元も子もないわけだ。

「気付かれないように長距離援護射撃に絞るか、それとも……………ん？」

足が何かに掴まれたような感触がして下を向くとあちこちが焦げたガストが這いつくばって俺の右足にしがみついていた。

「ガスト何をやっているんだ？」

「愛を寄越すですのー!!」

「よくわからないんだが一体俺は何をすればいいんだ？」

「頭を撫でてほしいですの。」

「わかった様な分からない様な？とりあえずわかった。」

「早くしないとガストはこの帽子の中に隠された頭部の秘密を暴露するですの。」

ガスト恐ろしい娘。そんな事したらゲームギョウ界がこわれ…………。

「撫で撫で。」

「それでシルバーハート様はこんなところで何してるのですの？」

「何て言ったものか……………」

「出来の悪い妹を持つと苦勞するですの。」

「まだ何も言っていないんだけど……………」

「このシスコン野郎。」

「シスコン？」

「……………まあいいですの。」

さつきからなんなんだこのガストは帽子を引っこ抜いてやるうか？
まてよこのガストを利用すれば……………。

「ガスト頼みたい事があるんだけど。」

「代金を支払うんですの。」

「師匠から金を取るのか!?!」

「こついう時だけ師匠使うなですの。」

「致し方ないいくらだ?」

「100000クレジットですの。」

「高すぎだろうが!?!」

「なら身体で払うですの。」

「肉体労働的な意味でか?」

「違うですの。性的な意味ですの。さあ早く脱ぐですの。」

「受け取れ100000クレジットだ。」

「このチキン女神が。それでガストは何をすればいいですの?」

「……………まあいい。簡単な話しだルウィーの教会に行ってホワイトハートを連れてきてくれ。無論俺の事は伏せて。」

「仕方ないですの。敬愛してやまないシルバーハート様の頼みならやってやるですの。」

「先程から喧嘩売ってるのか?」

「一つ100000クレジットからですの。」

「もういいからさっさと行ってきたくれ。」

「アイアイサー。」

すたすたと走り去って行くガスト。人選間違えたかな？

「まあいい、あの少女の方はどうなったかな？」

俺は未だにルウィーの街を崩壊させながら闘う三人に目を向ける。

三人 side

「いけよファング！！」

少女のスカートの中から大量に飛び出していくキバの様な白い何か。まるで自らの意思を持つかの様に日本一とREDちゃんを襲う。何故少女のスカートの中からそんなものが出たのか気にした貴方は口リコンです。

「正義の味方をなめるなダイナマイトビット行けー！！」

まるで自らの意思を持つかの様にダイナマイトが動きファングへとぶつかり爆発する。

「私も負けないよてりゃー！！」

そして巨大な剣玉で少女を殴りつけようとするREDちゃん。

「緩いんだよー！！」

それを難なく受け止めて弾き返す少女。

「弱い！弱すぎんだよ！！」

ユウside

「何とかあの二人も善戦してはいるがこのままでは何れにせよいつらの決着が着く前にルウィーが崩壊する可能性が出てくるな。さてどうしたものか……………」

下手に介入したらブランにばれてネプテューヌと遭遇。かと言ってこのままだとルウィーが崩壊。

「誰にも俺だとはれないように尚且つブランが来るまであれを足止めしなくてはいけないか……………」

いつそのこと変装でもするか？
いや待てよ変装、それならあれを使えば……………。

「まあ分の悪い賭けは嫌いじゃないけどね。イストワール突然で悪いけどR2を射出して！！」
俺は天界にいるイストワールに連絡を取る。

『いきなりなんですか？それにR2ってなんですか？』

「いいから早く俺の部屋にあるクローゼットの右から二番目にあるから早くルウィーの俺の所に射出して！！」

「ついでに下着何枚かもらっていいですか？」

「はあ？あげるわけないだろうが！！」

『なら知りません。』

「ああもう下着でも何でもあげるから急いで!!」

『何でもって私誤解しちゃいますよ?』

「お願いだから早くして下さい。」

『わかりました。少々お待ちください。右から二番目……………正気ですか?』

「何でもいいから早く!!」

『どうなっても私は知りませんよ。では射出!!』

羞恥心なんて必要ない。今必要なのはゲームギョウ界を愛する心の
み。

「今は一時眠ってくれ零刹那、菊舌紋字。そして来れ我が体内に眠
りし剣製セブンスード。」

ネプテューヌside

今私の前ではニート幼女のホワイトハーが口を開く。

「……………鍵の欠片なんて聞いた事ないわね。フィナンシェは?」

「私もありませんね。」

どいつもこいつも使えないわね。私のスパッツを見習いなさい。ほ
らこんなに凛々しいわ。

「もしかしてまた一つ一つダンジョンを回らなくちゃいけないですか!？」

「ただダンジョンの一つや二つ私のスパッツでこじ開けるわ!!」

「鍵の欠片がボクも聞いたことないな。」

「いや誰も会長には聞いてなっていたい!!」

歌姫がエレキギターでアイエフの頭を見えない速さで叩く。

「大変ですの〜。(棒読み)」

突如教会の応接間の扉を開けて可笑しな帽子をがぶった少女が現れる。

「ガストどうしたの?そんな消しゴムの大安売りを見つけたように慌てて。」

歌姫 5pb. が言っにあの帽子少女の名前はジョー。フルと言っらしい。

「大変ですの〜。シルバーハート様が可愛らしい少女と戯れているですの〜。(棒読み)」

「……………!?私以外の少女キャラはもうこのルウィーにはいなかった筈なのに。お兄様あのフラグメーカーは危険ね。再教育を施行するわ待っていて……………」

「ユウ君、君にボクの全てをぶつける事を約束しよう。」

その言葉と共に忽然と消え去る幼女ホワイトハートと歌姫5pb。

「二人がド。ゴンボール的な消え方したですう!!」

「そこは驚くところなのかしら?別に普通でしょう?」

「はい。ホワイトハート様もよくあの様な消え方をして探すのに苦労してますよ。」

「会長もよくあの消え方をしているわよ。それにやろうと思えば私も出来るわ。LEDライトの力が必要不可欠だけどね。フィナンシエだって出来るわよね?」

「はい。可能性ですよ。」

「出来ないのはコンパー人ね。」

「待つです!!ねぶねぶも出来るんですか!?」

「スパッツファイターに不可能はないわ。行くわよみんな!!」

「構わないわ。LED!!」

「SSHのフィナンシエの真骨頂それはこの右目の力を使う事で発揮されます!!」

その言葉を残して私達三人はコンパの前から消え去る。
それにしてもシルバーハートその名を聞いた瞬間の胸のときめきこれはいったいなんなの?

幼女 side

「どうしたどうしたもう終わりかよ！！こっちはまだ闘い足りねえぞ！！」

幼女は大量のファングを展開して空中に浮いて日本一とREDちゃんを見下ろしていた。

「もうダイナマイトもないのにまだあれだけの数があるの!？」

「もうフリスビーも剣玉もないよ。」

「なら消えな！！行けよファング！！」

最早対抗する手段がない二人に襲いかかる白き牙。

そしてその命を刈り取るかと思われたその時であった。

「ハチミツ食べたいなあー！！」

謎のハチミツ宣言と共に雷でも落ちたかの如く極大の雷の砲撃が幼女の周りに浮かんでいたファングを消し去る。

「何だありゃあ!？」

「ええー！！何あれ!？」

「熊さんだ！！熊さんが空を飛んでるよ!!」

彼女達が驚きの視線を向けた先には雷を帯びた日本刀を正面構えた

謎の熊がいた。

「ハチミツ食べたいなー！………いくらなんでもこれは辛すぎる。」

ネプテューヌスパッツになる（前書き）

スパッツ！！スパッツ！！スパッツ！！
特に意味はないですが遂
にネプテューヌがスパッツに覚醒！！

ネプテューヌスパッツになる

熊さん side

「何だてめえ熊の分際でこの俺とやり合うつもりか!？」

「ふもっふ!!」

俺だってこんな姿で闘いたくないよ。だけどこれなら俺だとばれな
いだろう。

俺は言葉に出来ない怒りを収めて自らの体内に秘める七剣のセブンソード一つで
ある雷を纏う剣、雷切を構える。

「おもしれえ行けよファング!!」

日本一さんとREDちゃんを苦しめたオールレンジ攻撃。だがこの
程度避けられる!!

「馬鹿な当たらねえ!？」

「ふもっふ、ふもふも（別に難しい事ではない全てのBT兵器の動
きを同時に読めば必ず攻撃がない空間が生まれる。そこを見抜けれ
ばオールレンジ攻撃などたいした事はない）!!」「何言ってるん
だかわからねえんだよ!!」

幼女が大剣を俺にじゃなかつた熊さんに振り降ろしてくるがそれを
雷切の腹で受け止める。

「ふもっふ（甘い）!!」

熊さんいやもう俺でいいや。俺はそのままの状態です。雷切から幼女の大剣を通して電流を幼女に流す。

「ぐうううう！？てめえ！！」

「ふもっふ、ふもふも（身体に直接電流を流される気分はどうだ？）」

「なめるなあー！！」

俺は幼女に馬鹿力で無理矢理切り払われる。幼女もそのまま斬りかかって来るが……………。

「ふもっふふもっふ（馬鹿の一つ覚えの突進など）！！」

俺は雷切を上になげる。

「くっ！？」

その俺の動作に驚いてか幼女は動きを止める。甘いなそれがこちらの狙いだ。

「ふもふもふもっふ（雷の雨を喰らえ）！！」

上空に投げられた雷切より幼女に雷の雨が降りかかる。

「何っ！？ぐうお！？ファンゲ！！」

「ふもっふ（無駄だ）！！」

幼女がスカートからファンングを出そうとするが雷切より放たれる雷により射出直後次々に撃墜される。

「てめえ卑怯だろうが！！ぐわっ！？」

闘いに卑怯も何もないだろ。それに俺の役割は時間稼ぎ。どうやらそれも終わりのようだがな。

俺は雷切から放たれる雷を止めて回収する。

「ふもっふふもも（待ちかねたぞ）！！」

俺の視線の先にはブランとネプテューヌ達がいた。

ネプテューヌside

凄まじい状況ね。破壊された街。大剣を振り回す幼女。そして幼女を圧倒する熊。

「その幼女貴女が私の大陸をこんな事にしたのね。」

ホワイトハート様やはり怒っているのね。それもそうね自分の大陸をこんなにされれば怒るのも当たり前ね。

「だったら何だ！？」

「いえ別に確認しただけよ。特に怒ってないわ。」

「ホワイトハート様少しは気にしてください！！」

「……………どうせ破壊された次の日には治ってるんでしょっ？」

ギャグ補正ね、わかます。そしてフィナンシェツッコミご苦労様。
それにしても5pb.は何処にいったのかしら？アイちゃんは何やらボロボロな女の子二人を何処かに投げとばしてるわ。

「ふもっふ。」

呆れたかの様に手で額を抑えて嘆息する熊。随分と人間的な熊ね。

「こいつらっぜえ。」

貴女の容姿程ウザくわないわね。幼女キャラはもう定員オーバーよ。
それにしてもそんな高いところにいたらスカートの中が丸見え……
……何ですって!?

「認めないわ!!何故貴女が貴女が!？」

「ねぶ子いきなりどうしたのよ。」

何やら隣のLEDライトが喋っている様だけど私の耳には届かない。
何故なら私の視線は幼女のスカートの中に釘付けにされていたのだから。

「何故貴女がスパッツを履いているのよ!?!」

「「「はい？」「」」

「ふも？」

「あの少女のスカートの中を見てみなさい！！」

「「「あ、本当だ。」「」」

みんなが少女のスカートの中を覗いて納得したかのようにうなずく。

「…………ふも。」

なんなのよその熊その人を馬鹿にしたような目で見て。

「ちょっとその熊！！文句があるなら何か言いなさいよ！！ジャ
ンクにするわよ！！」

熊が何やら右腕についているボタンらしき物を押す。

「ふもっふ…………ふも！！僕ハチミツだーい好き。」

「ちょっと何よそれ！？どっちか一つにしなさいよ！！」

「ふも！！僕はねハチミツを食べるんだ。」

「一緒じゃない！！」

「ふも、ふももももも！！」

何よあの熊空中で必死に身振り手振りで何かを伝えようとでもしているわよ!!あれでは可愛いだけじゃない!!

「ふももももも!!」

「ちょっとそんなにいっぺんにボタン押したら危ないんじゃない？」

「ふももももも!!」……ふも、
がががががががががががががが
がビー!!」

ほらそんな乱暴な扱い方するから背中から煙が出てるわよ。

「ふもー!!」

「待ちなさいこの熊野郎！！背中から煙りを出して何処に行くのよ
！！！」

背中から煙りを吹き出して何処かへと飛んでいく熊へと私は憤りを隠せず叫ぶ。

「ねぷ子とりあえず仕切り直しましょう。」

仕方ないわね。けどアイちゃんに戒められると何だか自分の存在意義に疑問を抱いてしまうのは何故かしら？

「おいそこのチビ!!」

「てめえも十分チビだろうが！！」

「そんな事はどうでもいいんだよ！！てめえさっき自分の大陸がどうとか言ってたよなあ？」

「だったらどうしたくそチビ!!」

「てめえもしかしてホワイトハートか？」

「そうだ!!この白の大地ルウィーの守護女神の超絶時空口リ系美少女ホワイトハートとは私の事だ!!」

どうでもいいけど貴方達口悪いわね。この小説の品位が疑われるじゃない!!

「てめえがホワイトハートなら話しは早いなブツ殺してやるよ!!」

「望むところだやああってやるぜ!!」

ホワイトハート様の身体が光りに包まれる。まさかこれは私と同じ変身!!

「行けよファンゲ!!」

そう行けよファンゲって!?

「ちょ、貴女何考えているの!?!変身中の攻撃はご法度でしょう!？」

「ほ、ホワイトハート様大丈夫ですか？」

流石のフィナンシェも変身中にファンゲの直撃を受けてうつぶせで倒れているホワイトハート様を心配そうに見詰める。

「……もついややる気なくなっただお家帰る。」

何処のだった子よ。

「よしよし、後でシルバーハート様のドラマCD買ってあげますからねー。」

「……………マグカップも買って。」

「仕方ないですねわかりました買いますから少しはやる気を出してくださいね。」

フィナンシェ何だか手慣れているわね。

「何だ何だあ女神の癖に弱すぎんだよクソチビが!!」

「ま、またチビって言った。お兄様にも言われた事もないのに、うつぐすん。」

「意外と打たれ弱かったのねホワイトハート様。」

「ああもうせっかく落ちついてたのに……………」

「仕方ないわね。ここは私のLEDライトで場を和ませてあげる。」

「それは必要ないわ。」

「即答しなくてもいいじゃないねぶ子。」

どうせぐだぐだになるのは予想済みよ。

「てめえら無視するなよ!!」

「あらごめんなさいね。とりあえず貴女の相手は私がするわ。」

「何だてめえ。」

「よくぞ聞いてくれたわね。私の名前はネプテューヌ。だけどそれは過去の名前。」

「遂に取り返しの付かないところまで行ってしまったのねねぶ子。」
うるさいわ少し黙ってなさい。

「今の私は人間を超えて女神を超越したそして今の私はスパッツよ！！」

「お前馬鹿だろう？」

「違う！！私はスパッツよ！！だが貴女はスパッツではない！！貴女が履いているそれがスパッツであっていい筈がない！！」

私はそのまま自らの剣で赤い幼女を一閃する。

「なっ！？速い！！」

「当たり前よ今の私はスパッツさえ凌駕する存在よ！！」

「てめえさっき自分はスパッツだって言っただろぅが！！」

「その場のノリに決まっているでしょう！！」

私は自らの剣の腹で幼女の大剣を持つ手を殴りつけ、幼女が取り落とした大剣を奪い取り斬りかかる。

「ひとよんでネプテューンブレイクスパッツペシヤアアアアア

「アアル！！」

「ぐわああああああ！！」

必殺のスパッツを受けた少女は何処かへと吹き飛んでいく。

「私の前に敵はいないわ。ないスパッツ！！」

熊side改めてユウside

「酷い目にあつた。まさか整備不良とは恐れいる。」

実を隠そうなんとあの熊は俺ユウことシルバーハートだったのです。
この変装誰も気付く事は出来なかったであろう。

「それにしてもここは何処？」

もしまし子か！？いや違うそんな訳がないこの年で迷子なんて。

「うーん、雪山で遭難した時は星を見ればいいんだっけ？……………こんな真昼間から星が見えるわけがって見えた！！しかも流れ星。」

だけどこれで方角が分かるのであろうか？

「気のせいかなあの流れ星こっちに近づいてくるような？」

いや気のせいではないな確実に近づいて来ている。青い流星が。

「よくわからないけど逃げろー！！」

俺は直ぐ様逃げようとするが奮戦虚しく流星が直撃する。
衝撃で俺はそのまま後ろに倒れる。

「流れ星に直撃しても生きているとは流石女神だね。自分ながらびつくりだよ……………!？」

立ち上がるうとするが身体の上に何かが乗っかっており起き上がる事ができない。

ま、まさか流れ星に乗った宇宙人が!?まさかのSF突入かこの小説も!!

俺は恐る恐る身体の上に乗っている何かを見る。そこには……………。

「……………熊のお姉ちゃん。」

「青い流星ならぬ青い幼女キター!!」

そう仰向けに倒れた俺のお腹の上に乗っかっていたのは先程激闘を繰り広げた幼女であった。色は青くなっていたが……………。

「……………幼女じゃない。」

「あ、ごめん。」

この年頃の娘は子供扱いされるのを嫌がるんだったね。

「幼女じゃなくて美少女。」

「気にする所はそこですか!?貴女も結構予想外だね。」

「……………キラー。」

「はい？」

「……………私の名前。」

「キラーちゃんだね、俺は「熊のお姉ちゃん。」え？」

「俺はユ「熊のお姉ちゃん」せめてお兄ちゃんに「熊のお姉ちゃん」もうそれでいいです。」

どうせ俺なんて名前のないモブキャラだよ。

「……………よしよし。」

いつの間にか俺のお腹の上からどいたキラーちゃんは俺の近くの場合に座り込み俺の頭を撫でてくれる。

俺は上半身を起こすとキラーちゃんの頭を逆に撫で返す。何故撫で返すのか？右手で撫でられたのなら左手で撫で返す。これはゲイムギョウ界では常識。

「キラーちゃんは何処から来たの？」

「……………わからない。」

「なら家族は？」

「アインとシスコンとボタンそれにマジエコン又だと思う。」

どの名前も聞き覚えがないな。というかそれは名前なのだろうか？そんな時であった。

「ちなみに私はキラーのお兄ちゃんである。」

何処か高い声を無理矢理低くした感じの声が聞こえてくる。声が聞こえてきた方向を見るとそこには 全身黒ずくめの可笑しな仮面がぶつた男がいた。

「……………違う私のお兄ちゃんは熊のお姉ちゃん。」

キラーちゃんもしかして俺の事男って気付いていながら言っているのか!?

「違うな、間違っているぞキラー・ザ・ハード!!シルバーハートは美少女だからお姉ちゃんだ!!」

「……………どっちでもいい。」

「何でもいいが結局お前はなんなんだ？」

「そんなに焦らさないでくれお兄ちゃん困っちゃうだろう?」

「キラーちゃんあいつ殺していいかな？」

「うん、いいよ。」

「待ってくれ、言うから殺さないでくれ!!」

「ならさっさと言うてくれるか？」

「よかるう。我が名は……………」

いちいち溜める必要があるのだろうか?それに何故いちいちポーズを決める?

「我が名はシスコン・ザ・ハード！！全ての美少女、美少女の味方でありお兄ちゃん！！そしてシルバーハートお前のお兄ちゃんとなる存在だ！！」

とりあえずまためんどくさいのが出て来たということか。

「……………がんばれ熊のお姉ちゃん。」

「……………ありがとう。」

ネプテューヌスパッツになる（後書き）

・ノワールよ貴女も同類だ。

ノワ「ふもっふ（なかなかいい着心地ね）。」

ユウ「着心地はね。でもやっぱりボイスチェンジャーがないとただの熊だからね。」

ノワ「ふもも（この右手のボタンは）？」

ユウ「俺の知り合いが熊と言ったらこれでしょうって。」

ノワ「ふもふも（どれどれ）。」

『ボクはハチミツ食べたいな』

ノワ「ふもふもふも（誰よその知り合い）！？」

ユウ「クリストファー」「ふもふも（やっぱり言わなくていいわ）。」

……………そう。」

ノワ「ふもふもも（結局この熊は何の）？」

ユウ「防弾チョッキ？」

ノワ「ふもふもっふ（作った自分でも分からないのね）。」

防弾チョッキKUMASAN

核には耐えられるがお湯をかけると溶ける。

飛行可能。

水中には入れない。入ってもいいけど命の保証はしない。

ボイスチェンジャーは別売り。一個2500クレジット。

買わなければただの熊。喋れない熊はただの熊。空を飛べるけど。

見た目 月の輪熊。

作中でユウが使用する武器（セブンスード）（前書き）

ぶつちやけ11eyesで出てくる草壁七宝です。

鬼切と蜘蛛切はアイン・ザ・ハードが所持している為にここにはかいていません。

作中でユウが使用する武器（セブンスード）

こがらすまるあまこく
小烏丸天国

桓武天皇の時代、八尺余りある大鴉によってもたらされた宝刀。刀身の上半分が両刃になっており、黒みを帯びているのが特徴。妖力及び魔力を蓄積することができ、これを開放することで絶大な威力を放つ。だが一度妖力、魔力を開放すると再び蓄積する必要がある。

らいきり
雷切

立花道雪が雷を斬ったと伝えられる日本刀。デザインは一見、シンブルな日本刀のそれだが、刀身の根本の部分が折れ曲がった形状をしている。電撃を放つ刀として、遠近両用に見える。また電撃を広範囲に拡散、放電させることによって複数の敵を殲滅、敵の攻撃を防御することも可能な事から汎用性の高さがうかがえる。

かしゃぎりひろみつ
火車切広光

火車を切ったといわれる上杉謙信の愛刀。三尺を越える大太刀で扱いは難しいが、破壊力は大きい。呪^{スベル}を唱えることで、刃に炎を帯びさせ、奥義・火天墜衝を放つ。シルバーハートのレッドモードと併用する事で絶大な破壊力を誇る。

かななぎりながみつ
鉋切長光

近江の堅田又五郎が、大工に化けた妖怪を鉋ごと斬ったことから名付けられた刀。セブンスード（草壁七宝）の中では最も刀身が硬く、反りが殆どない。刀の長さが変形可能で、柄には暗器が隠されている。

る特殊な刀でそれらのギミックを利用したトリッキーな戦い方が可能。

真打・童子切安綱 しんうち・どうじぎりやすつな

大原安綱の大傑作で天下五剣の一つ。唾に当たる部分に水疱のような瘤がいくつも付いている異様なデザインであり、使い手の血肉を糧にして力（妖力）を発揮するセブンスード（草壁七宝）最強の妖刀。捧げる血肉の量に比例して発揮する力は増大するが、”その状態”が長時間続いてしまうと刀そのものに神経、肉体をて発揮する力は増大するが、”その状態”が長時間続いてしまうと刀そのものに神経、肉体を侵食され、取り込まれてしまう諸刃の剣であり、力の全てを解放する事は使い手の「死」を意味する。シルバーハートになったユウでもさえも全ての力を解放することは恐れ危惧している。奥義は鬼牙絶刀 きがぜつとつ

零刹那 ぜろせつな

シルバーハートになるより昔のユウが真打・童子切安綱の危険性を感じて二つにわけた双剣の一つ。

零刹那はユウの妖力を増大させる。陽を司る刀。

菊雫紋字 きくいちもんじ

字は似ているが決してガーベラストレートではない。

同じく真打童子切安綱の片割れの双剣。ユウの魔力を増大させる。陰を司る刀。

作中でユウが使用する武器（セブンスード）（後書き）

何故そんな物がここにあるのかは作中で明らかにしますよ。

シスコンは死ぬ。何故ならただの前座だから。(前書き)

これは駄文による駄文です。

シスコンは死ぬ。何故ならただの前座だから。

C o u n c i l

俺の前に立つのは可笑しな仮面を被った男。

「俺の名はシスコン・ザ・ハード。お前のお兄ちゃんになる男だ！
」

いくつか言わせてもらいたい。

帰りたい、関わりたくない、会話したくない、視界に入れたくもない。それほど奴は気持ち悪い。

「そんなに見つめるなよ、照れるだろ。」

そこで何故ポーズを決める？カッコイイとも思っているのか？
気持ち悪いだけなんだけど……。

俺は心の中から湧き出る黒い衝動を抑えつつ奴に問いかける。

「お前は何だ。」

「お前のお兄ちゃんと言いたところだがその問いかけから判断するに俺の存在理由を聞きたいのだろう。」

俺は可愛らしい妹が欲しかったが無念にも志し半ば朽ち果てた魂達を基にマジコンヌ様によって作られたアンチハード四天王が一人知能のシスコン・ザ・ハードだ。」

いろいろとツツコミたい事はあるけど何故マジエコンヌとか言う奴ははそんなピンポイントな奴等の魂を基に造りだしたのだろうか？

「シスコン・ザ・ハード、その名似ているな確かキラ・ザ・ハードだったか。」

俺は斜め後ろで俺の服の裾を握っているキラちゃんを見る。

「…………あれとは一緒にしてほしくない。」

まったくもって同感だ。

「因みに私は自分より年下の娘達が対象だ。私の年齢は20歳。」

そんな事は知らない。とりあえずこいつとは会話したくないので先に進めるとしよう。

「答えるつもりはないと受け取る。ならば貴様の目的はなんだ？俺を殺す事か？」

「ふん、間違えているぞシルバーハートいやユウちゃん。」

「……………殺す。」

「待て、落ち着くんだ。暴力はいけない。君は頭の良い利口な女神なはずだ！！」

「……………続ける。」

「私の目的は君だよユ、シルバーハート。」

「俺の身柄の拘束か。他の女神達への人質にでもするつもりか？」

「違う、間違っているぞ。私の言葉を忘れたか！？」

「確か……私には変態だ。だったかな？」

「……………違うよ熊のお姉ちゃん私は友達いませんって言ったんだよ。」

そういえばそうだったね。

「どちらも違う……私の目的はシルバーハート君を私の妹にする事だ……！」

「やばい頭痛くなってきた。」

「痛いの痛いの飛んでいけー。」

「ありがとうキラちゃん。」

最早最後の砦はこの娘だけだよ。ついつい抱き締めて頭を撫でてしまっ。

「無論ただでは言わない。君が望むだけの報酬を支払おう。幾らでも好きな額を言ってくれて構わない。」

シスコン・ザ・ハードは何処から取り出したアタッシュケースを開き大量のクレジットを見せびらかす。

「断る。」

「ならば宝石かそれとも洋服か？そうかお兄ちゃんわかつちやたぞゲームだな！！目の為にも一日一時間が約束できるなら好きなだけ買ってあげよう。」

「……………黙れ。」

「うーん、だとするならばやはりゲームギョウ界そのものをプレゼントするしかないかな？」

「……………貴様俺がシルバーハートとわかって言っているのならその命を刈り取る。」

俺は右手を腹に添える。そして体内に眠るセブンスード呼び出す。

「顕現せよ千歳の儔、小鳥丸天国！！」

「お腹の中から剣が出た。」

まあキラーちゃんの言う通り下手したらお腹の中から飛び出てきている様に見えるけど正確には俺の体内を巡る血液に溶け込んでいる魔力に物質変換して取り込んでいるものを再構築して取り出しているのである。

小鳥丸天国。その刀はまるで黒き翼を体現する黒色の刃。そしてあの変態の命を刈り取る刀。

「待つんだシルバーハート何が不服なんだ！？こちらは提示できる最大の物を差し出したのだ何が不満なのだ！？」

こいつ天性の馬鹿だな。

「……………馬鹿と天才は紙一重。」

……………ああ多分それだ。

「確かに私は天才だ。他のアンチハードとは違い知略、戦略、戦術にたけている。だが馬鹿ではない。」

「……………この間車椅子に乗った女の子を見てなあなありいーって言って飛びかかろうとして逆に車椅子にひかれていた。」

「どんだけ弱いんだよ！！！」

もしくは車椅子の女の子の方が強かったのだろうか？

あまりこいつと話していると俺にツッコミキャラが定着してしまう。とりあえず障害は早目に取り除くとしようか。

俺は小鳥丸天国を両手に持ち正面に構える。

「お姉ちゃんシスコン殺すの？」

「まあね、いくらキラーちゃんでも邪魔をするなら容赦はできないよ。」

「邪魔はしない。シスコンの弱点は仮面。仮面を割ると著作権的な問題で存在が消される。」

「キラーちゃん私を、私を裏切ったなあー！！！」

「だってシスコン私が冷蔵庫にストックしていた一個300クレジ

「ッともするプリン10個全部食べた。」

「食べていいのは食べられる覚悟があるやつだけだ。」

「……………殺して。」

「了解した。」

俺は小鳥丸天国を持ちそのままスコン・ザ・ハードに向かって走る。その命を刈り取る為に。

「ま、待て見逃してくれ私は非戦闘員なんだ！！長距離支援タイプなんだ！！APは999位あるけどHPは10しかないもやしなんだよー！！」

そんな事はやはり知らない。

土下座するとはプライドの欠片のない奴が。

「さっき俺が何でそちらになびかないかと聞いてきたな。答えは簡単だ。家族の絆は金などで買えるものではない。さらには貴様はこのゲームギョウ界を侮辱する発言をしたそれはゲームギョウ界の守護女神である俺自身を侮辱した事にかわりない。」

「なら謝罪でも何でもする。許してくれ！！」

俺は歩みを止めない。

「そして俺は男だ！！俺を女の子と間違えた奴には死あるのみ！！」
「単なる逆ギレと言われても否定は出来ない。」

「ば、馬鹿な男の娘だと！？だからアインがあそこまで執着していたのか。……………まずい！？」

「何をごちゃごちゃ言っていていやがるとりあえずその命ここで散らせー！！お前キモイんだ……………！？」

その時であった。小鳥丸天国がシスコンの仮面を叩き斬る瞬間だった。

辺りの空気が一変した。

何かが違う、何かが……………見ている。これは危険すぎる。

「お姉ちゃん避けて！！」

キラーちゃんが今までに聞いたことのないくらい大きな声で俺に警告を発する。

俺は反射的に後ろに飛び退く。

刹那俺がいた場所に黒い竜巻が発生する。明らかに人為的なものである事は確かだ。

「ぐあああああ！？止めてくれアイン、私が悪かった！！」

シスコンは黒い竜巻に巻き込まれて姿が見えなくなり、叫び声をあげる。

「アイン？あの竜巻か？」

「駄目、お姉ちゃん早く逃げて！！」

「キラちゃん？」

「アインはお姉ちゃんを壊しちゃうの!？」

「あらあらキラ・ザ・ハードどうしちゃったのかしら？感情なんて皆無だった貴女がそんな顔するなんて。」

「ぐあああああ!？」

竜巻の中からシスコン・ザ・ハードの断末魔の叫び声が聞こえた後竜巻が止みシスコン・ザ・ハードが仮面に輝が入った状態で地面に転がされる。

「い、いやアイン止めて。」

キラちゃんがガタガタと身体を震わせて俺の服の裾を物凄い力で握りしめる。だが俺はそんな事は気にしていられなかった。竜巻の中から現れたもう一人青い髪を後ろで結んだ小柄の少女から目を離せないでいた。

少女から放たれる闘気いやこれは殺気それでもないこれは……嫉妬、愛情。何故かそれが俺に向けられていた。

「初めましてユウちゃん。私はアイン・ザ・ハード、貴方のメインヒロイン。」

俺には少女が言っている事が理解は出来なかった。

ただ少女からアイン・ザ・ハードの赤い目は俺をまるで捕食する草食動物かの如く見つめていた。

何かよくわからない衝動的なものにおされて俺は小鳥丸天国を構える。

「いい殺気これは調教のしがいがありそう。」

こいつはこいつだけはこのゲームギョウ界にあつてはいけない。そう俺の中の女神としての勘が警報を鳴らしていた。

シスコンは死ぬ。何故ならただの前座だから。（後書き）

ノワールの貴方も私と同類よ！！

ノワ「何かしらこれは？」

トマト「あとがきコーナーだけど。」

ノワ「私やらないわよ。」

トマト「やろうよ。後二話で大変な事になるノワールさん。」

ノワ「……………え？」

トマト「やるなら生かしてあげよう。やらないなら殺します。」

ノワ「仕方ないわね。どうしても言うならやってあげるわ。」

トマト「よし。では次回からよろしく。」

最強対最強（前書き）

リアルが忙しすぎて投稿がまったくでないという現実。^{スバツ}

最強対最強

ユウside

「そう警戒しないでユウちゃん。ただ私は貴方を監禁して私好みの男の娘になるまでひたすら調教するだけだよ。勿論できあがったら精神崩壊するまで食べてあげちゃうよ性的にね」

アイン・ザ・ハードは舌で唇の周りを舐めると息荒くこちらを見詰める。

「き、貴様はなん何だ一体!？」

何時もの俺だったらこの変態女が!?!とでも怒鳴りつけているところであつただろうが、アイン・ザ・ハードから放たれる何かに身体がすくんでいた。

「そんなに怯えちゃって可愛いなユウちゃんは」

「くっ!?! 答える貴様は何が目的だ!?!」

「そんなに慌てないで。自己紹介だよ。私の名前はアンチハード四天王が一人最強のアイン・ザ・ハード。マジエコンヌの婆によってアニメやゲームのメインヒロインの影に埋もれ忘れ去られたサブヒロイン達の未練の魂を基に造り出された存在なんだよ。」

マジエコンヌまたその名前か。やはりピンポイントな魂を基にして造られている訳か。それが後一人いるのか。

「次はユウちゃんの自己紹介をしてほしいな」

幾ら気に入らない相手でも挨拶されたら挨拶し返すのが俺のポリシー。

「ゲームギョウ界を守護する守護女神が一人シルバーハート。この姿の時の名はユウ。」「うんうん。よく出来ましたー。今ので私の高感度振り切れちゃいましたー。本当に良いこだねユウちゃんは。……それに比べてキラ・ザ・ハード貴女はねえ。」

「ひいつ!？」

俺の後ろでアインから隠れて一言も発していなかったキラちゃん
がびくんと身体を震わせる。

「私の言い付けを忘れたのかなあ？ユウちゃんは私のだから手を出さないって。ねえどうなのキラ・ザ・ハード？」

「わ、私はただお姉ちゃんに愛してもらいたくて、それだけ、ただそれだけの!！」

ガクガクと身体を震わせながらも必死にアインに向かって声を出す
キラちゃん。

「そっかあ貴女みたいな化け物でもやっぱり基になった魂に影響されるんだね。」

わざとらしい仕草で手を叩いて納得の仕草をして見せるアイン。

「ち、違う!!--私は化け物じゃない!!--」

「キラーちゃん？」

「ああユウちゃんは知らないだったね。このキラー・ザ・ハードは幼くにして死んでしまった子供達の未練の魂に闘いを楽しむ狂人達の魂を組み込まれて作られたの。その為に見た目は可愛らしい幼女だけどその心の内には狂人の魂が眠っているの。表の魂は愛を求める。裏の魂は闘いを求める。そして性格変貌のトリガーとなるのが流血。自分の血を見ると変わってしまう。こんな風にね。」

するとアイン・ザ・ハードは突如俺の視界から消え去る。そして俺の後ろにいたキラーちゃんが…………。

「痛い、痛い痛い痛い痛いー!？」

振り返るとそこには自らの右手をキラーちゃんの右肩付近に突き刺したアイン・ザ・ハードがいた。そして俺にキラーちゃんの返り血がかかる。

「くっ!？貴様ー!!」

俺の感情はその光景を見た瞬間に怒り一色に支配されて女神化を果たす。怒りのレッドモードへと直接。

「うふふ、どうしてユウちゃんが怒るの？傷ついたのはキラーなのに。」

「貴様何故味方であるこの娘まで!？」

「別に殺意とかはなかったんだよね。良い機会だから性格が変わる瞬間を見せてあげよかなと思ってね。」「どどういう事だ!！」

「だ、駄目お姉ちゃんが見てるのに!!!血が血が血が血が血が血が

血が血が血がー!!」

キラーちゃんの右肩から溢れでた血液で彼女の着ている衣類に染み込んでいくかのようにその色を変えていく。

「……………アインてめえ!!」

「お目覚めのようね。」

キラーちゃんの身体を覆っていたゴシッククロリータが青から赤へと変わりその瞳には狂気を宿す。

「とりあえず一旦拠点に戻った方がいいんじゃないかな?その傷だと闘えないんじゃないかな?」

「くっ!?てめえがやったんだろう!!まあいいシルバーハートいずれてめえも俺が倒してやるよ。」

狂気を宿しながらもどこことなく悲しそうな目をしながらキラーちゃんは何処かへ飛翔していった。

「さてとこれで邪魔者もいなくなっただねユウちゃん。」

「貴様は何が目的だ?」

「さっきも言ったけどね私はユウちゃんのメインヒロインなんだよ。なら一緒にいるのが普通でユウちゃんは私を攻略しなきゃいけない。うつんする義務がある。そして私のルートに入って私と永遠に一緒にいなくてはいけないの。」

「悪いが俺はパズルゲームしかしたことはないんでね。お前の言っている事の半分も理解は出来ない。それに好きでもない相手を愛する事はできないんでね。」

俺はそう言つと小鳥丸天国を胎内に戻す。そしてレッドモードの武器である。ガンブレード紅を取り出して構える。

「なら私がユウちゃんを攻略しなきゃいけないね。」

「出来るものならして見せろ！！」

俺はガンブレード紅のシリンダーにレッドブレードを一つ挿入してシリンダーを回転させる。

『レッドワンスチャージ。』

ガンブレード紅より電子音声が響き俺の怒り（炎）の魔力が解放される。

そしてそのままアイン・ザ・ハードに近付き容赦も躊躇いもなくアインを切り裂く……………筈だった。

「な！？一体何がっ、ぐうつ！？」

俺の目に映つたのはオリハルコンで形成されたガンブレード紅が持ち手の上から全部が砕け散った姿。

そしてプロセッサユニットの上からバツ印に切り裂かれ出血する自分の胸部であった。

「ガンブレードはオリハルコンで形成されその強度にはどんな物でも刃をとすることは不可能。だけどその形状は銃のシリンダーを大剣に無理矢理に取り付けて歪な物となっている。だからこそ一見完

壁に見えるそれでもその歪さを捉える事が出来れば簡単に破壊する事が出来るんだよ。」

確かにそれは不可能ではない。だがそれは武に技術に秀でたもの、境地にたつた者でなくてはならない。それにあのアイン・ザ・ハードは至つたとも言うのか!?

「火翼展開!! フレイムフェザー!!」

胸の傷を右手で押さえながら背中に炎で出来た翼を展開させる。そしてそこから炎の羽を大量にアインに向かって射出する。

アインの周りにあつた雪がフレイムフェザーの発する熱の余波により溶ける。

その為に水蒸気が発生してアインの姿が見えなくなってしまう。だが俺はそんな事は気にせずに攻撃を続ける。

「……………やったか!？」

炎の翼を展開させるのが限界になるほどフレイムフェザーを打ちつくした俺はアインの状態を確認しようとする。
だが……………。

「ユウちゃんそれフラグだよ」

その言葉と共に背中に激痛が走る。あまりの痛みに立つことも儘ならなくなり膝を付く。そしてダメージを受けすぎた事によりレッドモードが解除されてしまう。

「ば、馬鹿なまったく動きが見えなかっただ。いくら何でもあり得ないあの距離から俺の元にくるのに動線がないなど、うぐっ!？」

背中に蹴りをいれられて俺は雪の地面を転がされ仰向けに寝転んだ状態となる。

「難しい事は考えなくていいんだよ。なんたって私はユウちゃんのメインヒロインなんだから。」

仰向けで倒れた俺の上にアインは馬乗りになりどこからか取り出した日本刀を片手に持ちゆっくりと俺のプロセッサユニットをその日本刀で引き裂いていく。

「どうかなユウちゃん。こういうのは初めてかなあ？」

だが俺は自らのプロセッサユニットが引き裂かれて己がどうにかされてしまう事など気にはしていなかった。俺に傷の痛みさえも忘れさせてその視線を釘付けにしていたのはアイン・ザ・ハードの手に握られている剣であった。

「貴様その刀を、鬼切をどこで!？」

「よく気づいたね。ううん気づいて当然かもね。貴方がセブンソードと言っている七つの妖刀草壁七宝その内の二振り鬼切と蜘蛛切はわたしがリオンボックスより回収しておいたよ。今では私が使わせてもらっているよ。双剣がお揃いだね。」

「草壁七宝？」

中華料理か何か？

「もしかして知らない？元々この妖刀達は別世界からの遺産。流失してきた宝物。私も理由や目的はわからないけれど別世界から誰かが何か意図的な理由を持って送ってきたものと考えられるわ。マジ

エコンヌもこの妖刀達とは別の遺産で私達を造りだしたそうよ。」

「答える貴様は貴様達アンチハードとは一体なんなんだ!？」

「貴方によって倒された先代の女神マジエコンヌによって造られた命、貴方達守護女神を打ち倒す為に造られた人造守護女神とでも言ったところかな？」

マジエコンヌ!？そうだ思い出した天界で倒したあの魔女もどき確かそんな名前だったような？あいつが生きていてアンチハードを作ったということか…………。

「お話しはこれ位でいいよねー。焦らされるのはあんまり好きじゃないし、これ以上は我慢できそうにないからねー。」

「な、何を!？」

「調教する前に味見しておこうかなと思ってねー♪」

アインはゆつくりと己の人差し指で俺の頬を撫でる。その瞬間俺は身体に悪寒が走り、馬乗りの状態で必死に抵抗するが腕を掴まれる。

「たまらないよねえ。嫌がる男の娘が快楽に逆らえなくなって終いには自分から求めるようになるのは。」

「俺はお前何かに屈しない!!」

「もっと叫んで!!もっと抵抗して見せてそうすればそうする程私はリビドーを高める事が出来る!!」

たとえば身体が汚されても心は、心までは屈しない。俺はそう心を強く持ちどのような諸行にも耐えようとしていたその時だった。

「ユウ君に気安く触れないで!!」

突如アイン・ザ・ハードの身体に雷の砲撃が直撃する。そしてその身体を吹き飛ばす。

「5pb・ちゃん!？」

雷の砲撃を放ったのはSSHの会長であり会員No.1の5pb・ちゃんであつた。

「ユウ君大丈夫?には見えないかな。」

「まあ実際手酷くやられたからね。」

「立てる?」

「何とか。」

俺はよろめきながらも5pb・ちゃんの手を借りて立ち上がる。

「そのままよろめいてボクを押し倒すとか引き倒すとかしてくれてもよかったんだけど。」

「突然何を言い出す!？」

「もしくはお礼にキスの一つや二つ位期待してたんだけど。」

「この状況でそんな事考えてもなかったよ。」

「この状況下だからこそ考えるんだよ。弱気になったユウくん。でもまるで逆白馬の王様のな助け方をしたボクに歓喜余って抱き着い

てあんな事やこんな事をするのは同然だと思つよ。いや寧ろするべきだ！しなくちゃおかしいよ！」

「そんな事熱弁されても俺にどうしろと？」

「ああもうユウくんは可愛いね。可愛いよー!!」

突如人に抱き着いて頬ずりし始める5pb・ちゃん。

「痛い！まじで痛い！5pb・ちゃん出血してるんだよ！怪我してるんだけど！そんなに強く抱き締め、いや圧迫されたら痛いんですけどー!!」

「寧ろもつと出血するべきだよ！出血は男の娘の勲章だよー!!」

「そんな勲章あつてたまるかー!!」

そんな時であつた…………。

「メインヒロインは私。なのに何でそんな女と抱き合つて喜んでるのユウちゃん。そんな事は駄目だよ。私にいっぱいフラグ建てたのに他の女に浮気とか駄目だよ。一度クリアしたくらいで止めるとかそんなの、そんな事許せない!!」

5pb・ちゃんによつて吹き飛ばされたアイン・ザ・ハードが頭から出血しているにもかかわらず何事もなかったように歩いてくる。だが…………。

「5pb・ちゃんちよつと何処に手を入れようとし？」

「言ってほしいのユウくん？」

「何でもいいから早く離して！」

「そんな事言っても身体は正直だよ。ほらこんなに出てるよ。」

「うん。確かにでてるね。血がやばい位に。そのうち俺は死ぬんじゃないの？血が足りなくなってる。」

「大丈夫足りなくなったらボクのを輸血するから。」

「それは何か嫌だ。」

「ボクの血を入れられたユウくんはボクのシュヴ。リエに。」

「ならないからね。」

もはやアイン・ザ・ハードは忘れ去られていた。

「どうしてどうしてどうして！？いつもメインヒロインは私達サブヒロインを！」

狂った様に叫び声をあげるアイン。

「そういえばいたねあんなの。」

「やばい素で忘れてた。それとなんだかクラクラしてきた。血が足りないのかも。」

「ならあれはボクが倒していいかな？」

「待っていくら5pb・ちゃんだからってアイン・ザ・ハードには勝てない。たぶんあいつは俺より守護女神よりも強い。」
故に俺も圧倒されてしまった。

「うつん、あれは弱いよ。ボクの足元にも及ばない。」

「待て！それは聞き捨てならない。俺が5pb・ちゃんより弱いとでも言うのか！？」

「えい♪」

「痛い！ごめんなさい調子に乗りました。だから傷口をつつかないで。」

「まあここは黙って見ていてくれないかなユウくん。ボクならあいつに勝てるよ。」

「信じるよ。だけど本当に無理や無茶はしないで。」

「ありがとう心配してくれて。それとお願いがあるんだけど。」

「何？」

「もしもボクがあいつにノーダメージで勝ったらボクの言うこと何でも聞いて「断る。」聞いて「断る。」……………」

「どうせまた破廉恥きわまりないことさせられるに決まってる。」

「あらら、まあいいや。無理矢理すればいいか。」

「ちよつと!?!」

「行くよアイン・ザ・ハード。君のからくりは既に解けているよ。さあ臓物ぶちまけて!?!」

「この娘がゲームギョウ界のアイドルなんて。信じたくない俺がいる。」

「けど5pb・ちゃんが言うアイン・ザ・ハードのからくりって一体なんなんだ?」

「とりあえずこれがシリアスではなくなった事が俺にわかる唯一の答えか。」

最強対最強（後書き）

きょうののわーるさん

ノワ「迷走したタイトル名は結局これになったのね。」

シアン「出番が出来ただけいいだろうが。」

ノワ「貴女に言われると現実味があるわね。」

シアン「どうせシアンって誰だよ！？とか思われてるに決まってる。」

ノワ「大変ね。ところで私は一体何をすればいいのかしら？」

シアン「今日あった事を言えだそうだ。」

ノワ「今日はご飯をいっぱい食べたわ。」

シアン「抽象的過ぎるだろ。」

ノワ「話はここからよ。ほらよくあるじゃない私あの娘の事考えるだけでご飯何杯でも食べられるって。」

シアン「まさかやったのかよ。」

ノワ「お兄様の事を考えながら食べたわ。」

シアン「それで？」

ノワ「お茶碗で9杯。」

シアン「……………」

ノワ「おかげで体重が……………」

シアン「……………」

ノワ「お兄様の事を考えるとどうしてか知らないけれどお腹がすくの。」

シアン「……………」

スパッツは見えているか!?(前書き)

リミッターを外させてもらう。

スパッツは見えているか！？

ネプテューヌside

キラ・ザ・ハードとの闘いで崩壊しかけた白の大地ルウィー。

だがふと気がつくとその嘘のように街は元通り。住民達も普通に過ごしていた。

だがそれはこのゲームギョウ界では普通の事。

「もしもそんな事あり得ない。ふざけんなどか思ってる奴等は出てきなさい。スパッツにしてあげるわ。」

「ねぶねぶ誰と話してるですか？」

「画面の向こうの愉快なお友達とよ。ちなみに私達は戦闘が終わった後再びルウィーの教会にてホワイトハートに鍵の欠片について聞いているところよ。」

「しつこいようだけど私はそんなアイテム聞いたことも見たこともないわ。大抵1日は寝て過ごしてるから。」

もったいないわね。私だったら一日中スパッツの毛繕いに継ぎ足すわ。

「ならいいLEDライトが売っている場所を知らない？」

「この大陸のLEDライトは全て5pb.によって破壊されたわ。」

「会長ー！！！」

無様ねアイちゃん。

「LEDライトなんてどうでもいいです！今は鍵の欠片です。」

「LEDライトを馬鹿にするなー！！」

「きゃー！！アイちゃん髪の毛引つ張らないでください！痛いです！」

「全くなつてないわね二人ともそんな事では私のお供は務まらないわよ。アイさんコンパさん懲らしめてやりなさい的な。」

「……………何でもいいけど早く帰ってくれないかしら。用事は済んだのでしょ？」

「ホワイトハートそれでも私と同じスパッツの為に闘う守護女神なのかしら？」

「別に私はスパッツの為には闘わないわ。……………待ちなさいネプテューヌ今の言い方だとまるで記憶が戻った様に聞こえるのだけれど。」

「愚問ね。さっきのスパッツ・ザ・ハードとの闘いで記憶は戻っているわ。」

「キラー・ザ・ハードだったと思うわ。まあ戻ったのならこちらにとっても都合がいいわ。私にとってはスパッツなんてただのぬけがら別にそこまでして欲しくないわ。しかも貴女が履いたスパッツなんておぞけが走るわ。とりあえず見逃してあげるからさっさと私の前から消えなさい。」

「その言葉スパッツファイターに対する侮辱と受け取ったわ。ホワ

イトハート。貴女は本当に守護女神なの！？スパッツを守護してスパッツを愛する女神なの！？」

何かがおかしい。このネプテューヌは何かがおかしい。それに気付いたブランは顔をしかめる。

「おいネプテューヌ。てめえとりあえず思い出した事を言ってみろ。」

「それこそ愚問ね。私はスパッツタウンを守護する女神スパッツハートだって事を思い出した。ただそれだよ。」

とりあえず取り返しはつかないようである。

「…………どこでこいつは間違えたんだ？」

「もしかしてLEDライト浴びせすぎたかしら？」

「ねぶねぶしっかりするです！」

「心配は無用よプロフェサー。」

「私はコンパです！」

「時にプロフェサーコンパ。カスタムスパッツの準備は出来たのかしら？」

「…………私にはもうどうしようもないです。」

「これをお兄様に見せたら反応が面白そうね。とりあえず面白いか

「このままにしておくわ。」

「異論はないわ。」

「とりあえずねぶねぶは軽く流すということだ。」

「異論はないわ。」

「行幸なるスパッツね。」

「とりあえず私が知っているダンジョンには既にモンスターは存在しないわ。それどころか殆どのダンジョンは跡形もなく消し飛んでいるわ。」

「……………会長ね。」

「そうrbpが修行と称して殆どのダンジョンとモンスターを完全破壊、いいえ完全消滅させてしまったの。」

「その諸行間違いないわ。まさしく我らが聖女スパッツ。」

「ならどうすれば鍵の欠片は手にはいるのでしょうか？」

「……………崩壊したダンジョンを掘り進めればいいんじゃない？」

「それじゃあ途方もない時間がかかりそうです。」

「万事休すね。とりあえず室内でLEDライトを付けてみてもいいかしら？」

「その前にそのライトを割るだけよ。」

「アイちゃんもねぶねぶみたく華麗にスルーされたいですか？」

「最近私の扱い酷くない？」

「闘いの気配。濃密なるマイナスパツツエナジー。スパツツが告げているわ。このルウィーに不穏なる気配が近づいているわ。」

ネプテューヌの発言はスルー。

そしてその瞬間であつた。教会全体に響く爆発音。そして響く怒号。

「ダイナマイトは日本ー！！」

「もっとやるですのー！！」

「みんながんばれー！！」

「「女神止めちまえー！！」」

「「女神でてこーい！！」」

「や、やめてください皆さん！！それに日本ーさんダイナマイトは使わないでください。教会が崩壊してしまいますよ！！」

「ならガスト特性のどんなものでも溶ける硫酸を教会の壁にぶっかけるですの。」

「それも駄目です!!」

「ならロイヤルでエンペラーな私が撮影したフィナンシェの寝顔を教会の壁に貼り付けるよ!!」

「何でそんな物があるんですか!？」

教会の外では何やら暴動を起こしている住民。そしてそれを先導する謎の三人組。

「とりあえず私寝るわね。」

そして寝室へと向かうブラン。

「逃げちゃだめですよホワイトハート様!!」

「…………えー。」

「ならばここは私に任せてもらうわよ。」

その言葉を最後に教会の応接間より窓ガラスをぶち抜いて飛び降りる。ちなみに応接間は教会の二階にある。まあ女神化しているから大丈夫なのだろう。

「…………構わないわ。ってもういない。」

「ホワイトハート様この大陸がどうなってもいいんですか!？」

「別に住民全てがスパッツ好きになる訳じゃないんだからいいじゃない。」

「なったら面白いわね。」

「話がわかるわねホワイトハート様!!」

「よく言われるわ。」

「LEDライトは「駄目よ。」悪魔ねホワイトハート様!!」

「ああサントさん非力なコンパをお許しくださいです。」

「静まりなさいルウィーの住民達とその三人。」

「ネプテューヌさん!?!」

「違うわ。今の私はスパッツハートよ。」

「……………関わるとめんどくさいですね。」

「なんなんですよ貴女は!?!」

「それはこちらの台詞よ。ですの幼女。」

「私のダイナマイトが火を吹く前にさがりなさい。」

「あれ私何もないや。とりあえずこれフィナンシェの寝顔写真だよ!!」

「それをこちらに渡してください!!」

「ダイナマイトペたんこにリストラされたドラゴンと言わせてもら
うわ。貴女達三人がルウィーの住民達の魂を狂わせたのね。」

「ガストはノリで参加しただけですの。」

「私はいっぱい爆発させてくれるって言われたから。」

「私は………何でだろ?」

「とりあえず貴女達を悪役にしておきましょう。そのほうがいろ
いと助かるわ。」

「「何だよてめえは!?女神はどうしたんだよ!?!」」

「ホワイトハートは闘っているのよ。この大陸に渦巻く悪と!!」
「嘘くさ!」

無論嘘である。

「黙りなさいフィナンシェ!!」

「「「どういう事だよ!!」」」

「どうでもいいけど貴方達よくハモるわね。………最近このルウィ
ーから最近モンスターが減ったと思わないかしら?」

「『『『そういえばそうだな。』』』」

「それはホワイトハートが寝ずにモンスター退治をしていたお陰なのよ。」

「『『『な、なんだってー!!』』』」

無論嘘である。

「それなのに貴方達はそれも知らずに暴動だなんて。恥を、恥を知りなさい!!」

「『『俺達は間違えていたのかー!?!』』』」

「そうよ。でも大丈夫。ホワイトハートは怒っていないわ。寧ろ暴動が起きて喜んでいたわ。」

だから月に3回位は暴動起こしなさい。」

「ちよつと!?!なんて事言っているんですか!?!」

「『『『わかりましたー!!』』』」

「分からないでください!」

「それじゃあ皆反省したところで今回の主役に登場してもらいましょう。出番よホワイトハート様!!」

「止めてめえら突き落とすきかよ!?!」

「逝ってらっしゃいます。」

「革命に犠牲は付き物よ。」

ネプテューヌが飛び降りた際に破壊された箇所は無理矢理押してい
かれるブラン。そしてそのまま。

「まじで落としたー!?!」

……落ちました。

「「ホワイトハート様俺達が間違えていましたー!?!」」

「よかったわねホワイトハート。」

「よくねえ身体が痛い!あちこち打ってまじで痛いんだよ!?!」

「皆見なさい。ホワイトハートのこの喜びよう。あまりの嬉しさに
地面をのたうち回っているわ。」

「「ホワイトハート様!?!」」

「胸上げよ!?!」

「止めるー!?!」

「「ホワイトハート様バンザイ!?!ルウィーバンザイ!?!」」

「いーやー!?!」

「これにて一件落着ね。」

「もう少し寝るのを大目に見るべきでしょうか？」

「ガストにRED私は教会の右側部分から爆破させるわ。」

「ならガストは左側から硫酸をかけるですの。」

「それなら私は暴動に参加してない人達をここに読んでくるよ。」
「てめえらいい加減にしろやー！！」

これ以降ルウィーでは月に三回全住民による暴動（お祭り）が行なわれる事になる。その度に教会は跡形もなく破壊されたそうである。そしてホワイトハートもニート生活をさらには休日も返上して暴動を止める事に画策したそう。

「暴動は収まったけど鍵の欠片は見つからなかったわね。」

「仕方ないです。とりあえずこの教会から離れるです。」

「あー、ずっと変身してるのは疲れたよ。」

「可笑しくなるのは変身した後だけみたいです。」

「可笑しく？可笑しいといえば私変身してた時の記憶がボンヤリとしか思い出せないんだよね。私何してたんだっけ？」

「…………とりあえずどうするですか？」

「さあ？LEDライト付けていいかしら？」

「駄目です。」

「シビアね。」

『聞こえますかネプテューヌさん？イストワールです。』

「おお！この声はいーすん。どつたの？」

『すいませんが鍵の欠片は幾つ集めましたか？』

「三つだよ。今ルウィーの欠片を探しているんだけど見つからなくて。」

『すいませんがルウィーには鍵の欠片はありません。なので直ぐにプラネテューヌに戻ってきてください。』

「ええー！！どういう事！？」

『実は隠し忘れて、いや違います実はルウィーの鍵の欠片は既にこちらにあります。』

「そうなの？どうしていーすんが持つてるの？」

『ああもうそんなの私を知るわけないでしょう！？とりあえず早くプラネテューヌに戻ってきてくださいね！はい終わり。ブチッ！！』

まさかの逆ギレ。そして通信途絶。

そしてネプテューヌはこの事実をどうコンパとアイエフに伝えたも

のかと首を傾げていた。

鍵の欠片を集めたネプテューヌ一行はプラネテューヌへと帰還する。
そしてそのプラネテューヌには……………。

「まさか貴女がこのプラネテューヌに来ようとは油断していました。」
「

「ふっ、ここであつが100年目。シルバーハートがない貴様など敵ではない。イストワール覚悟しろ。」

「いいでしょう。私も新たな力で貴女に挑みますかかつてきなさいマゾコンヌ!!」

「だから私の名前は……………まあいい。」

「行きますよ!!」

「来るがいい!!」

「そもさん!!」

「せつぱ!!」

闘いは新たな局面を向かえる。

スパッツは見えているか！？（後書き）

きょうのわーるさん

ノワ「実は昨日ラステイションの教会でボヤ騒ぎがあったのよ。」

シアン「そういえばそんなのあったな。……………まさか！？」

ノワ「起こしたのは私よ。」

シアン「何をしたのか一応聞いてやるよ。」

ノワ「ゆで卵を作ろうと卵をレンジにかけたらトガンと卵がレンジごと爆発しちゃって。料理って難しいのね。」

シアン「そんなの料理じゃねー！！」

アイドルな女の子 (前書き)

ボクは生きる。生きてこの光を繋ぐ!!

アイドルな女の子

5 p b . s i d e

ボクは自らが愛用するエレキギター正式名称『機項式機銃サンバン』を逆手に持ち構える。

「最初に言っておくよ。素直に誤って腹を切るか、素直に遺言書書いてトリカブトを飲む気はないかな？」

まあどちらにしても君は死ぬんだけどね。

「黙りなさいサブヒロイン。私にはユウちゃんとエロチックパーティーを繰り広げる選択肢以外はありません。」

ちなみにボクはこの小説だとメインヒロインなんだけどね。

「仕方がないね。とりあえず君をボクの敵と認識するよ!!」
そのまま一気に走り抜けてエセヒロインに斬りかかる。

「この程度効きませんよー。」

「どうかな?.....雷撃!!」

エセヒロインの刀にボクのギターは受け止められたけどこれこそがボクの狙い。このギターにはシアン特性の機項技術がふんだんに詰まっているんだよ。

そしてその一つが.....。

「くっ!?!これはギターから放電しているの!?!」

「この程度でびっくりしてほしくないな。ふんっ!？」

ボクはそのままエセヒロインの足をおもいつきり踏みつける。今ので粉碎骨折は間違ないね。それにボクの靴の裏には飛び出る刃を仕込んでいるから、まあどうなるかは言わなくてもいいよね？

「あぐう!?!このサブヒロイン風情がよくもおおおお!!」

痛みに震えながらもエセヒロインは後ろに飛び退く。
よし、獲物が網にかかった。

「ふふ、もう容赦してあげないよー。殺して……………なっ!？」

エセヒロインはボクに斬りかかろうと向かって来ようとするが急にその足を止める。
何故かって?それはね……………。

「これはピアノ線!？」

「ちょっと違うよこれはボクのギターの弦。それを君の周りに張り巡らせているんだ。下手に動いたら首がコロッと落ちちゃうかもね?」

「この程度で私を引き裂けるとでも思っているとしたら、あぐうっ!?!」

「どうしたの?もしかしてギターの弦で足を貫かただけでそんなに痛がっていたりしないよね?」

こんなに細いので痛がられたりしたらつまらないよ。さあボクのユ

ウ君を虐めたんだただでは済むと思わないでほしいな」

「…………雷撃。」

ボクはまだ全力の3%しか出していないんだからね。

エセヒロインの足を貫いている弦に電流を流しながらボクはあれをどう料理するか考えていた。

ユウside

確かに5pb.ちゃんは強い。俺も女神化しなくては負けてしまう可能性が高い位に。

だがそれだけの筈だ。それなのに何故俺が全く勝てなかったアイン・ザ・ハードを圧倒しているのか。
そして…………。

「何故俺までギターの弦で吊り上げられているんだよ!？」
これはあれか新手の虐めか何かか!？」

「そのアイドル俺を巻き込むな早くこれをほどけ!!無視するな
――!!身動きとれないんだよこの馬鹿やろ――!!ってうわあ!?!電
流を流さないで――!!」

やばいこのままでは主人公としての威厳が――!!どうすれば、一体ど
うすればいい!?!?

5pb.side

何やらユウ君の叫び声やら悲鳴が聞こえたような気がしたんだけど
まあ気のせいにしておこうっと。

「そろそろ良いかな？あんまりやりすぎて殺す前に死んだら困るからね。」

「くっ！？どうして私がユウちゃんだって私には勝てなかったのに！？」

「ユウくんは主人公だからメインヒロインは傷つけることはできない。」

「なっ！？」

「ゲームではお約束だね？」

「貴女まさか気づいているの！？」

「さあ？何の話かな？それと良いこと教えてあげるよ。」

「何を言って。……………これは！？」

アインが驚いている理由？そんなの簡単だよ。ギターの弦が身体に
まきついて動けなくなっているからだろっね。

「とりあえず君はこれでおしまいだね。……………よっつと。」

ボクは動きがとれなくなっているあのエセヒロインを後目にサンバンを地面に置きその上に乗っかる。

「さてサンバン、重力緩和装置起動フライングモード。」

ボクを乗せてサンバンは飛翔する。シアン特性の重力緩和装置により空中に浮遊する事を可能としているんだ。

「それではボクの歌を、うっくん君の絶望^{うた}を聞かせてね。」

ボクはギターより伸びてアインを捕縛している弦を手元に手繰り寄せる。

「くっ、なんでこんなのがほどけないのよ!？」

「教えてあげない」それ吊るしましょう。」

ボクはそのままエセヒロインを上空に吊るしあげる。何をするのかって？

「それでは起動しようかギター・ザ・ギロチン。」

要はギターのボクが乗っているところ以外からギロチンの刃が飛び出るだけなんだけどね。

「それではーレッツ吊るし切りー!！」

「……………な!？」

アンコウの吊るし切りならぬアイン・ザ・ハードの吊るし切りだね。

ユウside

俺は今まで女神になる前、そして女神になってから数多くの戦場を

くぐり抜けてきた。無論人の死も幾度となく見てきた。そして今
俺の目の前で行なわれている5pb.ちゃんの処刑^{ライブ}を見ているとあ
まりの凄惨さに吐き気が込みあげてくる。

「まずい。何がまずいかって俺の立ち位置が。吊るしあげられてい
るわけではなくまるで芋虫の様に簀巻きにされているだけではある
が。」

だがこのままでは5pb.ちゃんに全てが持って行かれてしまう。
主人公としての座すらも。そして次回からこの小説の題名が最強な
歌姫に変わってしまう。それはまずい。かなりまずい！！

「どうする、どうすればいいんだよ!？」

どうして俺はこんな思考に至ったのかそれはよくわからない。だけ
どこで俺が主人公降格なんて事になったら全てが終わる。きっと
終わってしまう。

「5pb.ちゃんは確実にダメージを与えていつてアインを殺す筈
だ。ならばそれよりも早く俺がアインを潰せばいい。」

ならば最強の一撃をぶつける。俺の最強の一撃ガンブレード紅のフ
ルバーストはまあ破壊されたから無理か。ならばあれを真打童子切
安綱を使っしかないか。

5pb. side

「あーあ、この服お気に入りだったのに血まみれになっちゃったよ。」

これがユウ君の血だったらどれほど嬉しかったかなあ。

「あゝ、ぐう!？」

「まさか本当にぐうの音を聞くことになるなんてね。面白かったから次の一撃で首を落とすね？」

ボクはサンバンに乗ったまま地面に降りる。無論その際ギロチンの刃は収めているよ。

「残念だけど君の悲鳴はもうないよ。さようなら。」

ボクは跳躍してそのままエセヒロインの首をサンバンで斬り落とす筈だったんだけど。

「鬼牙絶刀ー!!」

突然ボクの後ろで転がっていた筈のユウ君から絶叫に近い叫び声が発せられる。ボクはその瞬間本能的な危険を感じてサンバンを盾にしてその場より飛び退く。そしてその数秒後ボクがいた場所が消し飛んだ。圧倒的な魔力、ううん違う。これは確か妖力その奔流が空間を蹂躪した。そしてアイン・ザ・ハードはそれに呑み込まれた。

ユウ side

真打童子切安綱。その力は絶大だ。かつてイストワールが俺の最後に食べようとしていたショートケーキの苺を食べようとした時に顕現させて使用して天界を崩壊させかけるほどである。

だがその分の代償は大きい。童子切は使用者の血肉を糧としてその

力を発揮する。使い続けられずればその身を滅ぼす。もしも童子切の全力を使用するならば死ぬ事を覚悟するのは必須である。

「この状況（主人公からの降格）を開くには童子切を使用するしかない。持ってくれよ俺の身体。」

その言葉と共に俺は零刹那と菊ヶ紋字を取り出す。そして二つを重ねる。

「零刹那の魔力を菊ヶ紋字の妖力を開放する。そしてそれを混合させる。」

二つの剣が紫色の光りを放ちそのシルエットが徐々にひとつに重なっていく。

「そして顕現せん真打童子切安綱。」

俺は淡々と再構成が完了した童子切を右手に持ち正面に構える。 5

pb・ちゃんとアイン・ザ・ハードが闘っている方向へと。

「くりより生じし万鬼の王、神毒鬼便の緋き狂水を以ってその御霊を鎮めん。」

その言葉を唱えた瞬間に童子切より針のように鋭い棘が生じて俺の腕を貫こうとする。だがプロセスサユニットを装着している俺の腕は貫く事は出来ない。そのかわりに……………。

「あつ、ぐう!？」

アイン・ザ・ハードとの闘いで生まれたプロセスサユニットの腹の部分の裂け目から棘が入り込んで血肉を齧る。

そして童子切より新たに二本の白い人の手に酷似した触手が生まれ俺の右腕に絡み付く。

確かに痛みはある。腕が千切れてしまふかのようだ。だけど…………。

「渡せない渡せないんだこれだけ（主人公）はだから俺は……………斬り裂け！！」

俺はアイン・ザ・ハードを倒す。そして必ず守ってみせる（主人公としての威厳を）。

「鬼牙絶刀オオオオ！！」

そして俺はアイン・ザ・ハードを倒した……………筈だ。

5 p b . s i d e

「ユウ君大丈夫？そんなに血を流して？」

多分致死量を遥かに超える量の血を流してるよ。

「正直目が霞んできたんですけど。」

まあそれだけで済んでるだからいいんじゃないかな？さすが女神。

「でもあのままならボクが倒せたのに。」

「……………主人公は俺だから。」

彼は一体何と闘っていたのだろうか？

「ユウ君とりあえず今日はボクの家でゆっくりしていつて。輸血用の血なら5リットル位ならあったから。」

「多分そんな恐ろしい家ではゆっくり出来ないよ。」

うん。ボクもそう思うよ。

そんな感じで何やら凄まじい剣を使ってアインを蒸発させた血まみれのユウ君と他愛のない話をしていた。

そのせいか蒸発した筈のアイン・ザ・ハードの肉片と血が動いている事にボクは気付く事が出来なかった。

アイドルな女の子 (後書き)

きょうののわーるさん

シアン「ブラックハート様何持ってんだ？」

のわ「メン。スと炭酸飲料よ。」

シアン「何をするんだ？」

のわ「知り合いのFさんがメントスと炭酸飲料と一緒に食べると超美味しいっていうものだからやってみようというわけよ。」

シアン「……………そうか。カウント3。」

のわ「ではまずはメントスを口の中に5個位入れてと。」

シアン「……………2。」

のわ「ふいにふぁんひぁいんひょうをのんふえ（次に炭酸飲料をのんで）。」

シアン「……………1。」

のわ「……………！？」

シアン「……………0、逃げろー！！総員退避ー！！」

のわ「げぼあ!？」

申し訳ありませんが番組ここで一旦中断させていただきます。

敗北の黒 最後のアンチハード（前書き）

レイン。ーパンは奇跡の集大成。

敗北の黒 最後のアンチハード

side

痛みが私を襲う。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

血が足りない、肉が足りない。愛が足りない。足りない足りない足らない足りない足りない足りない足りない足りない。

痛みで狂いそうになる。ただ、痛みで正気になる。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

痛みで気を失いそうになる。ただ、痛みで目が覚める。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いいたいいたいいたいいたい
タイタイタイタイタイ。

「なんですの赤いスライヌですの。新種のスライヌですの。高く売れるですの。捕まえるですの。瓶は確か……………」

[illegible]

ちようだいそのからだ。そのからだ私にチヨウダイ。

「な、なんですの！？このスライ又腕に絡み付い……………！？」

からだわたしのからだ。あたらしいわたしのおにくおにくからだか

らだ。

『わるくはないですの。ゆうちゃんろりぼではおこのみですの?』

ボタン side

我が名はボタン・ザ・ハード。マジエコンヌ様によってボタン集めが趣味のバウンティハンターの魂より造られた存在だ。普段は悪を働く者たちを打ち倒しそのボタンを奪いとっている。そして任務が下ればその為だけに行動する。よく他の仲間にはつまらないやつとまで言われる。そんなことは知らない。俺はただ自分のしたい事をしているだけである。

(何を考えているんですの?)

(アインか。何のようだ?)

俺の意識が思考の渦よりアイン・ザ・ハードからの念話により中断される。

(貴方に任務ですの。防衛は私が替わりますのでラストেশションのブラックハートを打ち倒してくださいですの。

)

(倒す? 殺さなくていいのか?)

（ええ、倒さずに晒し者にしてくださいですの。そうすればシエア
はドーンと下がりますの。よろしく願いしますですの。）

なるほど本来の目的はブラックハートではなくラスティションのシ
エアというわけか。

（構わない。任務を遂行する。）

（こちらの作戦はユウちゃんの乱入で失敗しちゃったから貴方を頼
りにしていますの。）

（ほう、あの噂のシルバーハートか。勝ったのか？）

（良いところまで追い詰めたんだけどなんか凄いの出しちゃった。
でもでもわたしのおにくをひきさいてあおいおんなといちゃい
ちやいちゃいちゃいちゃいちゃいちゃ。）

（……………アイン？）

（ごめんなさい取り乱したですの。）

（まあいい。一度は闘ってみたかったが今宵は辞退するしかないか。
）

（ブラックハートで我慢するですの。）

（……………御意。）

その言葉いや念話を最後に私は通信を切る。

目指す地はラステーション。

ボタン移動中。

私は現在ラステーションの教会の前に立っている。圧倒的な殺氣を出して。

理由は簡単だ私は言語機能が破損しておりしゃべっても他のアンチハード以外にはボタン、ボタンと連呼しているようにしか聞こえない。

故に殺氣を出してブラックハートを誘いだそうとしている。

（……………どうやら気付いたか。）

「こんな夜分にお客様かしら？」

この娘がこの黒の大地の女神か。押し問答は必要ない。俺は黙って剣を構える。

「物騒ね。そんな物持って、その殺氣メン。スで爆発した私と闘うつもりと受け取って構わないかしら？」

（喋れないというのは不便だな。）

故に俺はさらに殺氣を高め濃密にする。

「言葉は必要ないってことかしら!？」

ブラックハートをレイピアを取り出すとそのまま横に薙ぎ払う様にして斬りかかる。

（緩いな。）

俺はブラックハートのレイピアによる薙ぎ払いを剣の腹で受け止める。本来レイピアは突き殺す為の剣。薙ぎ払いや叩き斬る動作には向かない。

（だがそのような事はブラックハートもわかっているはずだ。ならば今のはこちらをためしたか。）

「……………こいつ強い。ならー!!」

（来るか!?!）

「はあー!!」

俺の予想通りブラックハートはレイピアによる素早い突きを容赦なく放ってくる。

（速いな。……………だが一撃一撃が軽い。この程度ならば。）

俺はブラックハートの攻撃を全てを自らの剣で捌く。そして攻撃が止んだところで切り払う。

「くっっ!!?こうなったら変身!!」

ブラックハートは衝撃で後ろに吹き飛びながらも体制を立て直す。そして変身という言葉と共にブラックハートの身体が光りに包まれる。

（……………噂の女神化か。）

「悪いけど本気でいくわ!!」

（さらに速くなるか。）

俺は女神化したブラックハートの斬撃を自らの剣で受け止める。

「くっっ！？」

（……………斬り払う。）

俺はそのままブラックハートの剣撃を斬り払う。

「こうなったらー！」

（さらに加速するか。）

「私の前に立ちふさがるのならお兄様の名の基に斬り捨てるだけよ。お兄様直伝インフィニットスラッシュー！」

（早い……………緩い！！）

俺は居合いからの抜刀を放つ。

そして俺の身体を覆っていたローブはブラックハートの剣撃の前に破れさり。俺の顔を隠していた仮面は碎け散る。

「かはっ！？な、なんでわたしが！？私は女神なのに！！！」

そしてブラックハートの大剣は碎け散り。その身体を覆っていたプロセッサユニットは至るところに亀裂が入っていた。

（命までは取らん。だが二度と剣を握れなくしておく。）

俺は悠然とブラックハートの前に歩みを進めていく。
そして……………。

（貴様の敗因は力の過信だ。貴様では俺に勝つことは出来ない。まあ二度と俺の前に立つこともないだろうがな。）

そしてそのまま俺はブラックハートへと剣を振り降ろした。

ユウside

「なんだろう何か嫌な予感がする。」

「気のせいじゃないの？ユウ君の感で全然宛にならないよ。」

「否定はしない。」

「それより早く食べようボクの手作りなんだからね。冷めないうちに食べようよ。」

現在俺は5pb・ちゃんの家まで頭を殴られて気絶させられた後連行させられて料理を食べさせられていた。

「うん。とりあえずどうして料理が虹色に輝いているんだけどこれはなんでかな？」

「はい、あーん。」

「ねえ人の話をもごっ！？」

「どうしたのユウ君虹色に輝いちゃって？」

「死ぬ、やばいこれ死ぬ。逆に料理に食い殺される！？」

とりあえず誰がピンチで助けを求めているかは知らないが俺も生命の危機を向かえていた。

「次はユウ君が幼少時代から大嫌いだったシカベーダの丸焼きを！
！！」

さよならゲームギョウ界。

敗北の黒 最後のアンチハード（後書き）

きょうののわーるさん

シアン「ノワールはどうしたかって？あいつは馬鹿な奴だったよ。ゆで卵作ろうとして協会燃やして、メン。スで大爆発起こして。だが奴はもう……。やめだこんな誰の特にもならない話はな。それより美味しいホットケーキの作り方を話そうか？生地200gに対してマヨネーズをこさじ二杯入れるとふつくと美味しくなるんだぜ。他には「レインボー！！」誰だ！？」

???「お前もレインボー。拙者もレインボー！！！」

シアン「その手に七色に輝く危険物質は一体なんだ！？止める近づくなー！！！」

???「レインボー！！！」

シアン「ギャー！！！！」

お見苦しい映像もとい文章をお見せしてしまいもうしわけありません。今しばらくお待ちください。

この島の桜はb y u u そげb y ノワール（前書き）

これは超大作を書いたが何故か消えてしまった為に自暴自棄になつてしまったトマト畑がやっっちゃった的な感じでかいたやっっちゃった地雷話です。

この島の桜はbyユウ そげぶbyノワール

ユウside

5pb. ちゃんの虹色に輝く珍味を無理矢理食べさせられた俺は強烈な吐き気と悪寒、頭痛に襲われながらも深夜のラスティションを訪れていた。その理由？

「シアンに口直しに何か作ってもらおう。」

このままでは第二のイストワールになってしまうという危機感に襲われて俺はただただ歩いていた。
そして……。

「うわっ、何か面倒な場面に出くわしてしまった。」

夜なら何もない事を信じて突き進んでいた俺の期待は脆くも打ち碎かれた。

我が妹の一人ブラックハート事ノワールが白い甲冑を身に纏った仮面の戦士がいた。そして今まさにノワールが白い甲冑の戦士の狂刃によってその命が奪われ様としていた。

「とりあえず見なかった事にしよう。」

そしてその場から逃げたそうとした俺がいた。
だが神は俺を見捨てた。

「あ！？何故か逃げ去ろうとした俺の足元に何故か丁度俺が転ぶの

にいいおきさの石があつた。そして俺は顔面から地面にきゃうん！
？………… よくよく考えると俺も神なんだよね。」

俺は転けた。すってんころりん。

そして緊張感を孕んだ空気は脆くも崩壊した。

「………… お兄様可愛すぎるわ。」

黙れよブラコン。

「お兄様はシスコンでしょう？」

「…………。」

「否定しないのね。」

嫌いになれるわけないでしょ。………… とりあえず立ち上がるか。
立ち上がる俺。そしてその俺の前に立ちほだかる白い甲冑の戦士。
どこの仮面。イダーだよ。

「ボタンボタンボタンボタンボタン（君がシルバーハートか。
話は聞いている最強の女神だそうだな）。」

「…………？」

「ボタンボタンボタンボタンボタンボタンボタン（驚く事はない君の事は俺達アンチハードの中では有名なんだよ）。」

「…………??」

「ボタンボタンボタンボタンボタンボタン（ここで闘つてみたいという想いもないと言えば嘘になる。だが今の俺は任務中だ。口惜しさは残るがここは退こう。さらばだ。また会おう。」

そして忽然と消え去る白い甲冑の戦士。まるで景色に溶け込むかのようだった。

とりあえず……………。

「なんだあれボタンボタン言つて勝手に消えたよ。まさか俺の威厳に恐れをなして逃げたか。……………まあいいそんな事よりも早く口直しを。」

ノワール？何それ美味しいの？

とりあえずシアンの料理屋を目指して歩き出そうとした俺の足を掴む我が妹。

「妹よ足を離せ。」

「ならチューして」

「……………」

「何か言つてくれない？」

「さくら！このまま枯れない桜を咲かせ続けたら「そんな一部の人にしかわからないネタはだめよ。」……………」

ヒントは俺の中の人。

「ういたんまじ天使。」

「わかったから仕切り直すわよお兄様。」

「そんな事するわけないでしょおにいのばーか。」

ヒントは俺の中の人。

「今のはちょっと嬉しかったわ。」

「おにい私の右手返して。」

「とりあえず気は済んだかしら？」

……幾分かは。

「仕切り直すわよ。兄と妹の感動の再会ていくつー。」

「帰りたい。」

・ていくつー

俺の膝に頭を乗せるノワール。その身体はあちこち傷だらけで見えているだけで痛々しかった。

「良かった最後にお兄様に会えて。」

「そんなまるで最後の別れみたいに言わないでよノワール!」

「だってもう手の感覚もないのよ。」

「なら人の太ももをまさぐないでくださいね。」

「……………そげぶ。」

ていくすりー

「だってもう手の感覚もないのよ。」

「そんなノワールしっかりしてよ。」

「最後にお兄様に伝えておきたい事があるの。」

「とりあえず可笑しな事言ったら決るからね。」

「……………」

ていくフオオオオオー

「最後にお兄様に伝えておきたい事があるの。実はお兄様が大事にしていた熊のぬいぐるみをズタズタに引き裂いたのは私なの。」

「お前か！？お前だったのか義照殺したのお前だったのかよ！！返して義照返してよ！！！！」

「熊の名前が義照ってぶぎゃ。」

ていくふあいぶ

「やるわけないだろうが。そしてノワール俺は今からシアンのところに行く筈だったんだけど。」

「私を助けに来てくれたんじゃないの？」

「違うよ。」

「私を襲いに来たんじゃないの？」

「決るよ。」

「そんなお兄様が大好きよ。」

「そ、そうか。」

「そこで赤くなるお兄様可愛すぎるわ。そして私も連れて行ってくれないかしら。」

「協会に帰れよ。」

「無理よ。」

「何故だ妹よ。」

「女神首になったのよ。」

「……………!？」

「教会でメン。ス爆発させてね。」

「勘弁してくれよ。」

「これからよろしくねお兄様♪」

元女神？ノワールが仲間になった。

「……逃がす。」

「残念ノワール逃がせないわ。とりあえずシアンのところでパーッとやりましょう。」

「自棄食いでもしようかな。」

「ドンマイ。」

「お前が言っな。そしてお尻を触らないで。」

「……そげぶ。」

この島の桜はboyユウ そげboyノワール（後書き）

きょうのわーるさん

シアンの元へと向かったユウとのわーるさんであったが留守で鍵が閉まっていた為に鍵を破壊して不法侵入しました。

のわ「あはははははは！ねえお兄様わたしの事好き？」

ユウ「お前何なのそのテンション？」

のわ「キープボトルがあつたから軽くグビツとね。」

ユウ「酒は飲んでも吞まれるべからず。」

のわ「男の娘なら出来る事があるでしょ？」

ユウ「???」

のわ「女装して。」

ユウ「ならボクと契約して魔法守護女神少女になって。」

のわ「結ぶわその契約ー!!」

ユウ「次回女装と白の女神と魔法少女。」

のわ「ぶっちぎるぜ。」

裏銀話 紫色のディスク（前書き）

これはシリアスだー！！誰が何と言ってもシリアスだー！！ヒヤヒヤー！！

裏銀話 紫色のディスク

シルバーハートside

『悪夢は何時もここから始まるのですね。』

これは私が女神から外れた日。その身に異物を取り込んだ日。そんな日のお話し。

シルバーハートside

「REDちゃんここに例のディスクがあるのですか？」

「うん、間違いないよ。ここにこの遺跡に結構昔のゲームギョウ界を支配していた生物達を封印したディスクがある筈だよ。」

今私はプラネテューヌに存在するゲームギョウ界の災厄を封印したと言われている古代遺跡に我が同胞REDちゃんと訪れています。

「それならば構いません。」

「ユウちゃんはそのディスクをどうするつもりなの？」

「天界での保管。それが無理なら完全なる破壊をするつもり。」

「そうなんだ。私馬鹿だからよくわからないけどあれって凄く危な

いから気をつけてね。そ、それとここの場所教えたから私と結婚してくれるんだよね。」

「わかっていますRED。ふふっ、そんなにあせらないでくださいね。」

「ユウちゃん焦らし上手なんだからね。………ついたよ。」

「これが禁断のディスク。」

遺跡の奥、そこには古びた台座がありました。そしてそこには五枚の紫色のディスクが時代を感じさせられないほどの美しさを保ち納められていました。大きさはコンパクトディスクほどですね。

「ゆ、ユウちゃんこれやばいよ。な、なんか身体の震えがとまらない。このディスクこのままにしておこうよ。」

同感です。私も興奮を抑えることができずに震えが止まりません。ああなんとという美しさ。そしてなんとという狂気。これならば……。

「全部で五枚か。そしてこの力。これならば私が取り込むにふさわしいですね。」

「取り込む？何を言ってるのユウちゃん？これはね凄く危険なんだよ。これは私が昔生きてた時代のはぐうっ!？」

「ありがとうRED。古代から生きるロイヤルエンペラードラゴン、君の事は忘れないよ。だから安からにお休みなさい。」

「ゆ、ユウちゃん？な、なんで？」

私の腕によってその胸を貫かれたREDの返り血を浴びてその身を

赤く染める。

「そういえば貴方の願いは私とひとつになることでしたね。これで望み通りですよ。」

REDの私の腕によって貫かれた身体が少しずつ赤い光となって私の胎内に取り込まれる。

「…………ゆ、うちゃ。」

そしてREDは完全に私とひとつに私の身体の一部となる。

「これで先ずはひとつ。さてとここからが本番ですね。来るがいい古代の支配者達よ。守護女神シルバーハートがヨリシロと器となる。」

私の言葉を受けたからかはわかりませんが五枚のディスクはまるで自らの意思を持つかのように私の中へと入ってくる。

「素晴らしいこの力。私の中ですら暴発しそうになるほどの力とは！完璧に制御するには時間がかかりそうですね。だがこれで私の計画が一気に進められる。先代の女神の生存、そしてアンチハードの誕生。ここまでは計画通り。そして今回手に入れたディスクの力でいや、私の力でアンチハードと先代の女神の存在の抹消。これで計画は最終段階へと移行する事ができる。そうです全てに良き破壊と再生を。」

後はこの遺跡を破壊して脱出するだけそう思っていた私でしたが遺跡全体を襲う巨大な揺れを感じて動きを止め警戒を強めます。

『貴様か我等の眠りを覚ます者は。』

「……………これは機械兵器？」

五枚のディスクが封印されていた台座が砕け散ります。そしてそこから現れたのは機械兵器俗に言うロボットですね。しかも一体だけではなく次々と現れます。

「遺跡の守り手でしょうか？」

『違うな我の名はハードブレイカー。我等らはかつてゲームギョウ界を滅ぼす為に作られた存在。だがゲームギョウ界の支配者達によって封印されていた存在キラーマシーンと呼ばれていた。』

なるほどその封印が今私の手によって解かれてしまったというわけですね。

「……………面白いですね。」

『何を言っている？』

「だってちょうど良かったですよ。ディスクを取り込んでから身体が熱くて熱くて疼いてしかたなかったんですよ。壊せ壊せってね。」

『まさかあのディスクをその身に取り込んだのか！？』

「だったらどうかしましたか？」

『ただの人間があれを取り込んで平静を保てるなどありえない。あ

れは我等キラマシンの全てを無力化して封印していたのだ。それを受け入れるなどと貴様なんだ、何者だ！？」

「口の聞き方に気をつけて欲しいんですけど、まあいいでしょう。

私はこのゲームギョウ界の守護女神です。」

「なっ！？女神だとゲームギョウ界の秩序と平和を守る女神が何故！？」

「決まっています。全ては良き破壊と再生の為に。」

「なんだ貴様、貴様の内から感じるこの感覚は女神等ではない！これはまるでぐがあ！？」

「私としたことがお喋りが過ぎましたね。」

私と会話していた機械兵器は不自然にその身体をねじ曲げられて機能を停止させられていた。

「女神化しなくてこの力。ならば女神化したら。……あれで試してみるか。」

私の視界に入ってきたのは未だに溢れでてくるキラマシーン。

「これが終わりの始まり。」

全てはここから始まる。

「待っててねユウ。君の願いはもうすぐ叶うよ。」

同時刻ゲームギョウ界のシルバーハートのシェアが大幅に下がった。
だがそれを直ぐに察知したギルドSSHによってシェアは回復された。

この勢いはもう誰にも止められないわっ
ンワール（前書き）

シリアス？何それ美味しいの？

この勢いはもう誰にも止められないわb y ノワール

ユウ s i d e

俺は朝までノワールと杯を飲み交わした後ラスティションの教会まで行きなんとか教会の皆さんに謝り倒してノワールのクビを取り消してもらった。

「家の妹が本当にすいませんでした！！謝って済むとは思いませんがどうぞお許してください。」

下の責任を取るのは結局上の者という事だ。

そして現在俺と何故かついてきたノワールと一緒にルウィーに来ていた。

「ルウィーさすがに寒いわね。」

「まあノワールの格好ならしかたないだろうね。」

「なら温めてよ。」

「断る。だがそんなノワールにこれをあげよう。」

「こ、これは！？さすがねお兄様！」

「だろう？とりあえずこれを着てブランに会いにいこう。」

「構わないわ。寧ろ推奨するわ。だけど私がこれを着たらお兄様のがなくなってしまうわ。」

その言葉を待ってましたとばかりに俺は例のブツを取り出す。

「そ、それは!？」

「プロトタイプが完成したオリジナルに勝てると思うな。」

「お兄様愛してるわ。」

「家族以上の想いは抱いていない。」

「私を捨てるの？」

「教会に行くんだ。」

「了解しました大佐。」

フィナンシエ side

月に三回暴動が行われるルウィー。その被害は半端なかった。そしてルウィーの教祖（笑）のフィナンシエは復興作業の為に走り回っていた。

「B地区復興作業を行なってください!もう一時間も過ぎてるんですよ。なんでまだ始まってないんですか!?直した端からどうせ壊されるんだろう?ふざけんな!こっちは金払ってるんだぞ!私の月一の給料なんかもう三ケタになってしまったんだから!わかったら金の分は働きやがれこのイジキタネエかね食い虫どもが!!」

彼女もいろいろと辛いのであろう。

「はっ!?!いけません私としたことが。私は常に冷静で物事を客観的に判断できる美少女が売りだったのに。」

彼女も女神通信に出れて調子に乗っているであろう。

そして彼女が教会で仕事をしていた時であった。ふと彼女の肩が叩かれる。

「ん？どちら様ですか？私はルウィーの教会の看板娘フィナンシエで……………！？」

「ハチミツたべたいなあ（フィナンシエ久しぶりだね、悪いんだけどブランはいるかい？）？」

「ふもつふもふもつふ（私はただの熊よ。クマツクハートとでも呼んでもらおうかしら？クマツクハートなんか語呂がいいわね。）。

」

「クマはいやー！！」

フィナンシエの肩を叩いたのは月の輪熊プロトタイプと月の輪熊オリジナルを装着したユウとノワールであった。

ブランside

「私はブラン。働く女神ブラン。使える女神ブラン。みんなの憧れブラン。そんな私は優雅にこーひーぶれーく。って苦！？誰だよこんなの淹れた奴は！？出てこいぶん殴って、私だったわね。なら今のなしね。」

ブラン、ホワイトハートは微妙に仕事をする様になっていた。週に

2日程は。

そしてそんな彼女の部屋の扉が開かれ二匹の熊が突入してくる。

「ふもっふ（やばいわお兄様なんかテンション上がってきたわ。）」

「

「ハチミツ（ブランお前の力が必要だ）！！」

「……………とりあえず帰って。」

「ふもっふ（いやよ寒い）。」

「ハチミツ（寧ろ喜んでよ）！！」

「私は仕事で忙しいのふもふもハチミツ言っていないでさっさと帰ってノワールだけ。お兄様は脱いでそしていろいろ飲ませて。」

「「キャストオフ。」」

キャストオフと二人が呟いた時月の輪熊が解除される。

「仕方ないわねブランちょっと来なさい。」

「ノワール何をするつもりだ？」

「少し女の子だけの話よ。ほら早く来なさい。」

「いやだ、H A N A S E ! !」

ノワールはブランを連れて外にでる。

「読書でもするか。」

俺はそれを『胃に優しい料理』という題名の料理雑誌を読んで待っていた。

「戻ったわお兄様」

「お帰り。それでブランは？」

「私もお兄様に付いていくわ。そして立派な魔法少女になるわ。いずれお兄様と結婚する為に。」

「ノワールよ、お前いったい何をした？」

「この勢いはもう誰にも止められないわ。」

次なる標的はグリーンハートことベール。

ベール side

聖地リンボックスの守護女神のグリーンハートのベールはこじやれたカフェで自分は素敵と自分は可愛すぎと思い込んでいた。

「優雅ですわね。そして可憐ですわね。」

自分でそう言う人ほど…………。

そしてそんなベールの席に…………。

「相席しても構わないでしょうか？」

謎の黒い仮面にマントを羽織った長身の男いやアンチハード、シスコン・ザ・ハードが腰かける。

「まだ返事をしていないのに腰かける辺り貴方も普通ではないですわね。」

「よく言われます。ところでレールガンって言うってもらっていいでしょうか？」

「お断りしますわ。」

「そうですか。因みに私悩みがあるんで聞いてもらっていいでしょうか？」

「お断り。実は先日妹が妹じゃなくて。でも可愛いから妹の方が良くて。」人の話を聞かない上に言っている事が意味不明ですわ。」

「つまり妹は実は男であって私は絶望しました。だけど男でも可愛すぎるから妹にしたいくて!!」

「なら可愛いのは正義と言う事で、可愛いから妹にでもすればいいのではなくて？所謂妹主義ですわね。」

「なるほど可愛ければ妹というわけですか。年上でも可愛ければ妹！男の娘でも可愛ければ妹！！男でも可愛ければ妹！！！」

「いえ何もそこまでは「ゲームギョウ界よ私は帰ってきた。我が名はシスコン・ザ・ハード全ての妹のお兄ちゃんとなる者だ。弱者（妹）は求めよ。強者（兄）は恐れよ！ふふふあはははははははははははは！！」…………世の中色んな人がいる物ですわね。」

高笑いをして去っていくシスコン・ザ・ハードを見ながらベールは世界の広さを思い知らされていた。
だがまだベールは思い知らされる。

「知っているかベール。人は夢を見ると凄く切なくそして美しく輝けるんだって。だけど俺には夢がない。けどなあそんな俺にだって夢を持つ人達を守る事は出来る！！」

ベールの前には何故か執事服を纏ったユウがいた。普段こそヒヤッハ―とも言ってユウに飛び付くところなのだがベールは本能的な何かで直ぐ様反対方向に逃げようとする。
だがそこには…………。

「お兄様は言っていたわ。ねえノワール俺最近キャラ弁作りにはまっているんだよねって。」

それは是非ともご相伴にあずかりたいものだとは思いつつもベールはメイド服のノワールより逃げようと誰もいない方向へと逃げようとする。

…………だがやはり。

「とある魔法少女は言っていたわ、少し頭ひやそうかって。」

あれは正直やり過ぎではなかったのではないだろうか？（ちなみに作者は魔王様もつとやっちなまえー。とか思っていた。）そう思いながら赤いハンマー魔法少女の恰好をしたブランを見つめていた。そして自分が追い詰められた事をベールは悟った。

「さあベール。」

「下っ端の様におめおめと逃げおおせるか。」

「ここでアイ。ン！！されるか。」

「「「どちらか選べえええええい！！」」」

「私も老いましたわね。」

守護女神グリーンハートことベールと守護女神ホワイトハートことブランが仲間になりました。

「よしこのままアンチハードの本拠地に攻め込むぞ！！」

「「「……………え？」」」

事態は加速する。

この勢いはもう誰にも止められないわb y ノワール（後書き）

きょうののわーるさん

ノワ「せっかくリーンボックスまで来たんだから私噂の執事喫茶に行ってみたいわ。」

ブラン「ここは魔法少女喫茶に行くべきよ。」

ベール「甘いすわね二人とも今の流行りは戦国喫茶ですわよ。」

ノワ「埒があかないわね。ここはお兄様に決めてもらいましょう。」

ブラン「異論はないわ。」

ベール「お兄様なら戦国喫茶を選んでくださるに決まってますわ。」

ノワ「さあお兄様選んでちょうだい。」

ユウ「な、ならこの巫女喫茶っていうところに行ってみたいかな？」

ユウ以外の三人「え？」

裏銀話その弐 偽善者と贋作者（前書き）

無理矢理シリアスにして可笑しな事にしてしまった。
まあしかたないよね。

裏銀話その貳 偽善者と贗作者

シルバーハートside

現在私はラストেশョンにて標的と定めている二人目を取り込もうとしている最中です。

今回の標的は…………。

「シルバーハート様の偽物め、このゲームギョウ界の正義の化身である日本一が打ち倒してあげるわ!!」

偽善者さんです。正直私はこの人嫌いなんで死ぬ寸前まで痛めつけてから取り込もうと思います。

「さてここで問題です。私はシルバーハートの偽物でしょうか、それとも本物でしょうか？」

「そんなの決まってる偽物だ!!」

「残念本物でした。はい罰ゲームです。術式形成展開波動結界スフィア。」

偽善者さんを半透明な球体が包みます。

「な、何なのこれ。硬いしびくともしない!？」

「波動結界スフィア。私が好んで使用させてもらっ簡単に言えば対象を捕縛する魔法とでも思ってください。」

またの名を拷問結界と言います。

「いくら硬くてもこのダイナマイトで！！つてきゃあ！？」

「言い忘れてましたけどこのスフィアはダイナマイトこどきでは破壊する事はできませんよ。なんたって私の魔力で編み込んでいますからね。それに中でダイナマイトを爆発させるなんて自殺行為ですよ。」

愚かですね偽善者。自らのダイナマイトでダメージを受けていますよ。これは絵になりますね。密封された空間で爆発物を使用するなど偽善者さんあなたやっぱり馬鹿なんですね。

「けほっ、こほっ！卑怯な、正々堂々闘え！！」

「それなんですよ。闘いにおいて正々も堂々も何もないんですよ。そしてその言葉は強者にのみ許された台詞。しかも今の貴女は劣勢に立たされている事にも気付いてない。少し絶望してもらいましょうか偽善者さん。」

「私は偽善者なんかじゃ……………！？」

偽善者さんなにやら喉もとを押さえて苦しみだしましたね。

「苦しいですか？今スフィアの中は真空状態になっています。さてさて偽善者さんはどれほどもつでしょうか？」

私はしばらくスフィアの中でのたうち回る偽善者を腕を組んで眺めていました。

「……………」

「そろそろでしょうか？」

ですがそのうち偽善者がぐったりとして動かなくなったところで真
空状態を解除します。

「かはっ！？っふう！」

「これで終わりだとは思ってほしくないですね。次は水攻めですよ。」

「な！？ま、待って！？」

「正義は負けないのではなかったんですか？」

「い、いやダイナマイトが。」

「ああこれでは頼みの綱のダイナマイトも使用不可能ですね。」

「や、やめてお願いだから！！」

もう水は偽善者さんの首もとにまで迫ってきています。

「そうですねえ。なら自分が偽善者だと認めてくれませんか？」

「み、認めます！私は偽善者です！！だから助けて！！！！」

「意外とあつけないですね。では約束通りにスフィアは解除しましょう。」

「た、助かつ「ただし。」……はぐうつ!？」

「本来の目的は遂行しますけどね。」

「い、いや死にたくない。」

「残念ながら貴女は死にません。生きたまま私の一部となるのです。それではごきげんよう偽善者さん。」

私の腕に貫かれた偽善者さんはそのまま青い光となって私の中に取り込まれます。

「これで二つ目。残るは四つ。……そろそろあちら側にも変革が訪れる筈ですね。……!？」

《バズーカキター!!》

どこかで聞いたことのある電子音声と共に私の命等簡単に奪い取るであろう赤い砲撃が放たれる。無論私を標的として。まあ当たり前がせんが。

「さすがにそう上手くはいかないか。」

「シアン、それにその身に纏っているのは試作型プロセッサユニット。形状が少し違っていますね。もしや完成したのですか? 疑似プロセッサユニット。人間でも女神に匹敵する力を得られる為に作ら

れた人間の為のプロセッサユニット擬き。」

バズーカを放ったのは疑似プロセッサユニットを装着したシアン。
いまさら何を。見られていたなら消去するしかないですね。

「まあな。ところでシルバーハート様に預けてる試作型の調子はどうだ？」

「上々ですよ。」

「そうか。あれ？そういえば試作型は俺が預かってたんだった。あらら？ならなんでシルバーハート様は自分が持つてるみたいにいるんだ？」

「……………」

「可笑しいなあ。これじゃあまるでそのあんたはシルバーハート様じゃないみたいだな。」

「しかたありません。計算外ですが貴女はここで排除します。絶対領域作動。全てよ我のシルバーハートの名の基に全ての命運を我を預けよ。」

絶対領域が作動すれば全ては私の手に納まる。とりあえず貴女は眠りなさいシアン。

「くっ！？」

「これで貴女は終わりです。計画の邪魔となる者は排除します。消えなさい！！」

「やられる！？……わきゃねーんだよ！！」

「絶対領域が作動しているのに動いている！？」

「こいつは昔なつかしのモーターオイルだ。そんな簡単に止められるわけがないだろうが！！」

私が驚きに動きを止めたが為に圧倒的なスピードで迫ってきたシアンによって捕縛されてしまいます。

「くっ離しなさい！」

「俺ではお前には勝てないだろう。だけどこれなら！！」

《ジバクキター！！》

「貴女まさか自ら命を絶つつもりですか！？」

「自爆は俺の十八番だ！！」

「くっ！？離しなさい！」

「俺は寂しがりやでね、お前にも地獄まで付き合ってもらっぜ！！」

そして私はダンジョンを全壊させる程の爆発に巻き込まれました。

「冗談じゃありません。あんなただの人間なんか遅れをとってしまっなんて。……肉体の再構成が間に合わない。こうなったら一時的に彼の中に入るしかありませんね。まさか私が計画を歪めてし

まうことになるなんて。」

私は自らの肉体を粒子化させて五枚の紫色のディスクと一体化させます。

「彼の予測進路を考えると目的地はプラネテューヌですか。あそこには標的の二人もいてちょうどいいですね。」

なんにしても彼の事ですから厄介事を抱え込んでなければいいのですが。

裏銀話その弐 偽善者と贋作者（後書き）

現在吸収した人物

REDちゃん

日本一ちゃん

残り四人

最後のシ書（前書き）

短い？何それ美味しいの？

最後のシ書

ネプテューヌside

全ての鍵の欠片？を手に入れたネプテューヌ一行はイストワールの声を頼りにプラネテューヌの街の外れにある湖に訪れていた。

『それではネプテューヌさん鍵の欠片を湖に沈めてください。』

「オツケー、任せてよ。そりゃー！」

勢いよく湖に投げこまれる鍵の欠片。

「ねぶねぶ私は帰っていいですか？」

「アイちゃん。」

「LEDー！！」

「きゃー！？」

LEDにより気絶するコンパ。それを満足そうに見たネプテューヌは湖に視線を向ける。

「おお、湖がモーゼもびつくりなくらいに二つにわれてきたよー！」

湖が割れ底から白い光を発しながら何かが現れる。
それこそ、いや彼女こそ……。

『私が超絶美少女史書イストワールちゃんです。キラッ』

「アイちゃん。」

「LEDー!!」

その名乗りはともうざかったそうな。LEDを最大出力でぶつけられる程に。

「……………サンタさん。」

……………状況整理中……………

「お久しぶりですねネプテューヌさん。相変わらず可愛らしいですね。」

「あれ？私っていーすんと会ったの初めてじゃなかった？それと可愛いのはわかってるよ。」

「ねぶねぶも充分うざいです。」

「クスクス。確かにネプテューヌさんは可愛いですね。ですけどこの私の超絶美少女っぷりには貴女の可愛らしさなど邪鬼以下です！ぶぎゃあ(<ε>)」

「ねえコンパこれ潰していいのかな？」

「ほどほどにならないんじゃないんですか？」

「これがいーすん。何か思ってたのとちがうわね。」

「いーすん助けたのにその態度はなんなの？」

「べつつに好きで助けてもらったわけじゃないですしー。むしろぶぎゃあ（＜ε＞）」

「このロリータがあああああああああああああ！？」

まじないーすん。きれたネプテューヌ。他人のふりのコンパ。傍観するアイエフ。

『ネプテューヌさん、女神ごときがこのミラクルスーパーガール史書のイストワールに勝てると思っっているのですか？超絶分身ぶぎゃあ（＜ε＞）」

『ワタシイストワールですぶぎゃあ。』

『ぶぎゃあ。』

『ぶぎゃあ。』

『ぶぎゃあ。』

突如大量発生するイストワール。
そして大量のイストワールに襲われるネプテューヌ。

「ねぶー！？」

「酷いわね。」

「酷いですね。」

『『『『『ぶぎゃあ。』』』』』

収集がつかないのは最早お約束。

…それでも収集…

「酷い目にあつたよ。」

『史書であるワタシに喧嘩を売った罰ですよ。ぶぎゃあ（＜ε＞）』

「「「とりあえずそのぶぎゃあはやめ（なさい）（るです）（て。」」

」

「わかりました。それではネプテューヌさんの記憶を蘇らせましょうか。アイエフさん、コンパさん捕縛してください。」

「「了解^{です}。」」

「まさかの裏切り！？離してよ二人とも！！」

「こんな旅は早く終わらせるです！」

「いや、なんか面白そうじゃない？」

『慕われてますねネプテューヌさん。』

「どこがだよー！！」

『行きますよ。史書の力をみせてあげましょう。』

「いーすんがおつきくなった！？そしてなんなのその本は！？」

『本の角は世界で一番痛いとは考えています。そしてななめ45度からの一撃イイイイ！』

「ねぶー！？」

イストワールによる史書ブックによる一撃をつけたネプテューヌは……。

「コンパ、アイちゃん。実は私女神だったんだ。」

「ああ何となく予想はついていたわ。」

「あれ？意外とあっさりだね。」

「だって女神の皆さん変態さんです。ねぶねぶも変態さんです。」

「すなわち。」

「女神」変態の方程式が完成するです。」

「否定出来ない自分が悲しい。……いやこは寧ろ誇るべき所なのかな？」

『とりあえずこのままアンチハードとの拠点を襲撃しましょう。』

「え？」

「「了解。^{です}」」

事態は加速するかもしれないようないかもしれないような？

『ふぎやあ。』

最後のシ書（後書き）

きょうののわーるさん

ユウ「み、巫女さんがいつぱい！？ぐはっ！？」

のわ「お兄様が血を吐いて倒れたわ。」

ブラン「そっとしておいたほうがいい。」

ベール「ですわね。」

ユウ「巫女喫茶って恐ろしいよイストワール。」

ボタン・ザ・ハード（前書き）

また一人消え去る。

ボタン・ザ・ハード

ユウside

現在女神化した俺、ノワール、ブラン、ベールの四人はプラネテューヌの上空を飛翔していた。

「アンチハードの本拠地はプラネテューヌにある天界への道を開く塔のすぐ傍に存在する。」

「何でわざわざその様なところに作ったのかしら？」

「天界に攻め込むため、もしくは……………」

「隠れ蓑だろうな。無論天界への道を塞ぐ事も視野には入れているであろうが。」

「……………それでお兄様作戦は？」

「立ちはだかるアンチハード達を打倒して正面突破あるのみだ。」

「そんな事だろうと思っていましたわ。」

「何よ嫌なら自分の大陸に帰りなさい。」

「別に嫌だとは言っていないせんわ。寧ろ分かりやすくして好印象ですわよ。」

「……………私も異存はないわ。」

「ならばこのまま一気に……………！？待て三人共止まれ。」

「……………何？」

「どうかしましたかお兄様？」

「この莫大なる殺気いや闘気は……………あの男か。」

俺はラステーションで一度感じた事のある気を感じて三人を制する。

「ようやく来たかシルバーハート、そしてその妹達よボタン。」

俺のいや俺達の前にはどこかの白い仮面ラ。ダーをモチーフにしたボタン好きの中のボタン好きであるアンチハードが一人ボタン・ザ・ハードが腕を組んで悠然とたっていた。いや浮遊していた？日本語って難しいね。

「喋った！？」

「ノワールそこは重要ではないから。」

「驚く事はない宿敵ボタン。マジエコンヌ様によって言語中枢を修理してもらったボタン。」

「修理足りてねえんじゃねえのか？」

「同感ですわね。」

いや寧ろ良い仕事をしたのではないだろうかま、ま、マゾコンヌは。

「これだけ喋れば今の俺には充分ボタン。それに戦士の生きざまは闘いでのみしめせるものだボタン。」

「そういう考えは嫌いじゃないが正直その語尾で全てが台無しになっているぞ。」

「「「………同感。」」」

「無問題ボタン。」

「まあいいノワール、ベール、ブラン四人で囲んで一気に奴を倒すぞ。」

「あまりフェアではありませんわね。」

「……私一人でも行けそう。」

「語尾に騙されない方がいいわよ。私はあれに手も足も出なかったわ。」

「それは貴女が弱いだけではなくて？」

「いやあいつは強い。語尾があれだけど。」

「……お兄様にそこまで言わせるなんて油断はできない。語尾以外は」

「話は済んだボタン？」

「ああここでケリをつける。」

「俺も二人分の働きをしないとイケないボタン。アインがあの様では使い物にならないぼたん。」

「アイン・ザ・ハードの事か!？」

「安心しろ奴は可笑しな者を拾い食いして大変な事になっているボタン。最早使い物にならないボタン。」

「詳しく話を聞けると思っているボタン?」残念だ。」

「どうでもいいけどさっさと闘いを始めましょう?」

「それもそうだな。ボタン野郎貴様はここで俺が、俺達が倒す。」

「ふっ、ありがたい話だが俺が相手にするのはその女神三人だけだ。」

「どういうこ、なっ!？」

「お前の相手は愛を渴望する少女ボタン。」

「くっ!?!強制転移魔方陣か!?!三人とも気をつけて……………」

それを最後に俺は別の場所に転送された。因みにボタン・ザ・ハー
ドの語尾のせいで俺の対戦あいてが少女ボタンという名前の少女か
と思ってしまったのは秘密です。

三女神 side

「お兄様を何処にやったのかしら?」

「答えを素直に言うと思っているのボタン？」

「言うわけないですわね。」

「なら力づくで聞き出すまでだ!!」

「そうこなくてはボタン。アンチハード四天王、ボタン・ザ・ハードがいざ尋常に参るボタン!!」

「やばいわ語尾のボタンのせいで脱力感が。…………まさかこれが狙いだったの!？」

「「ないない。」」

「よそ見している余裕があるのかボタン!!」

「いくわよ二人とも!!」

「待ちなさい何故貴女が指揮っているのですか!?!ここは一番美しい私が。」

「ここは一番魔法少女な私が。」

「黙りなさい!私口の中でサ克蘭ボの枝を結べるわよ!」

「それなら私ポケ。ン全部言えますわよ。」

「…………わたしは魔法少女よ。」

「お前達女神を見ていると我等アンチハードを見ているようだボタン。その結束力のなさは我等と似ているな。」

ユウ s i d e

「転移魔方陣によつて転移させられた俺はどうやら天界への道に近い場所にいるようであつた、とナレーション的に説明してみる俺。」

眼前には天界への道の塔。そして……。

「その景色を青空を覆いかくしてしまうかのような大量のファング。」

「お姉ちゃん迎えに来たよ。」

「キラーちゃんお願いだから自重して。」

「や。」

「いけない今少し可愛いとか思つてしまった。」

「大丈夫。それはロリコンじゃないよ。寧ろシスコンだよ。」

「シスコンはセーフ。ロリコンはアウトだよね。」

「だからね。………行つて白き全てを蹂躪する牙ファング達よ。」

「ちょ！止めてよー！？」

わかる？空を覆いつくす程のファングだよこの無理ゲーだよこれ

は！？

三女神 side

「「三位一体イイイイイイ！！」」

「そんな即席の連携攻撃等は通じないボタン！！」

「やっぱり駄目だったわね。」

「ですわね。」

「ここはやはり魔法少女として覚醒した私が少し収束砲撃をする事を所望するわ。」

「諦めなさい。」

「現実を見ることをお勧めしますわ。」

「……絶望したわ。魔法少女がないこの世界に。」

「そんな事はどうでもいいのよ。今はあれをどうやって倒すかが重要なよ。」

「ノワール貴女何とかできませんの？お兄様養分を過剰摂取して暴走するとか。」

「近いのなら出来るけど逆に弱体化するわよ。」

「……………はっ！？私良いこと思いついてしまったかもしれない！！」

「何よ？」

「どうせまた魔法少女がゝとかではありませんの？」

「馬鹿にしないで魔法少女はそんなに大安売りしないわ。とりあえず黙って見てろよ。おいそこのボタン野郎!!」

「どうしたホワイトハートよボタン。」

「お前の後ろに空飛ぶボタンがによっきによっき!!」

「…………。」

「お馬鹿ですわね。」

「同情するわ。」

「や、やめろそんな目で私を見るんじゃない!!」

だがこの世界は馬鹿だらけであった。

「どこだボタン？」

「「はい???」」

「空飛ぶボタンはどこだボタンー!？」

「まさか。」

「あいつ。」

「いや確実に。」

「「馬鹿ね（ですわね）。」「」」

「ボタンは俺のボタンー！！ボタンは全て俺の物だボタンー！！」

「とりあえず。」

「……………わかつているわ。」

「リンチですわね。」

「「消え去れー！！」「」」

無論その隙を逃す女神達ではなかった。

「抜かったボタンー！！」

ボタン・ザ・ハード死亡（死因ボタン死）。

残るアンチハード三人。

ボタン・ザ・ハード（後書き）

きょうののわるさん

のわ「あんた確かボタン・ザ・ハードと言ったわね。」

ボタン「は、はいボタン。」

のわ「舐めてんの！？そんな語尾が可愛いと思ってんの！？」

ボタン「い、いえこれは台本に書いてあったボタン。」

のわ「台本に書いてあっただ！？あんまりふざけたこと言ってる
と潰すぞ新人！」

スタッフ（RED）「ちょっとノワールさんカメラ回ってますよ！」

のわ「……………え？」

これはフィクションです。たぶん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2592w/>

男の娘な女神様

2011年12月3日19時02分発行